

348

261



始





Handwritten text in a circular arrangement, likely a library or collection stamp, surrounding a central square seal.



弘法大師

大正
4. 4. 26
内交

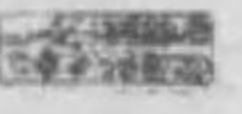




大觀信鬼親王

明治二十六年七月

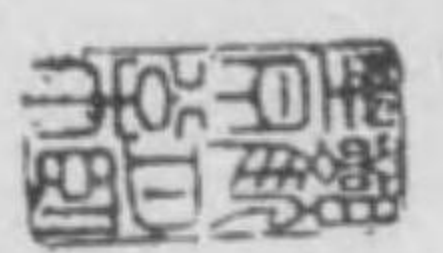
文
鳳
法



高麗宮藏



界備光



法册

弘法大師傳序

弘法大師ハ曠世ノ大偉人ナリ其宗教上ニ於ケル事績ハ固ヨリ論無キナリ其他文學ニ或ハ美術ニ遍ク人智ノ啓發ニ勉メ我文明史上ニ貢獻セラレタル無量ノ功德ハ何人モ之ヲ認ムル所ナリ予カ先妣深ク大師ニ歸依シ嘗テ手繡ノ曼陀羅ヲ金剛峯寺ニ奉納セリ從テ予モ亦紹テ信奉者ノ一人ナリトス先年親シク高野山ニ參詣シ大師ニ對スル予カ宿論ヲ演說セシモ奈何セン短時間ニシテ抱負ノ一

斑ヲ吐露セシニ過キス今尙以テ憾トナセリ
頃者渡邊霞亭君高野千百年大法要ヲ機トシ
テ大師傳ヲ編シ世ニ問ハントス記事該博行
文流暢能ク大偉人ノ面目ヲシテ自ラ紙上ニ
躍如タラシム予ハ此書ノ大二世ヲ益スルヲ
信シ欣然一言ヲ卷首ニ冠スト云爾

大正四年四月初

伯大隈重信

緒言

一 渡邊家は左大臣源融公に出で、融公は嵯峨天皇の皇子なり、余は渡邊家の血統として正しき系圖を所持す

一 弘法大師は嵯峨天皇の御歸依最も厚き大聖にして、一生の御事蹟至純至誠を以て貫き、皇家御繁榮衆生福利を以て終始す、大師在世以後の文學、智識、宗教、美術、工藝、其他に亘りて大師の恩徳感化を蒙らざるもの殆んど稀なり

一 余は筆を以て世に立つこと二十餘年、いつか一度は大師の面影を傳へて、萬分一の報恩に資せんと志しき、然もその事の容易なるまじきを懐ひて筆を擲つこと幾度なりしかを知らず、されど家の祖先源融公の御父君たる嵯峨天皇が殆んど師父の禮を以て御歸依遊ばされたるに思ひ至る時は、いかにもして大師の御高德を——假し千百萬分の一にても——書き顯はして、一部にても世に弘むる事が、一は祖先の英靈を慰むる最上の供養ならんと思ふこと切なるに由り、更に又幾度

擲ちたる筆を取り上げたることあるかを知らず
一然も余の望みを満たすべき時期は、高野山開創一千年紀念法要を営まるゝに因りて來りぬ、此の機會に於て、多年の宿志たる御傳記を能ふだけ平易に、能ふだけ記述的に書き顯はすは、余に於て無上の光榮なるのみならず、祖先の英靈も必ず嘉納したまふならんと覺悟してこゝに此編を著述する事となせり
一余は御入定地の靈氣に觸るべく、併せて材料を調査すべく、二月三尺の積雪を踏んで野山に登り、御廟を拜し、御影堂に詣で、寶藏に入り、諸寺院を訪問し、大徳及び有志に就いて、記録、寶物、圖書、御道具を拜見し得て、更に深く御傳記著述の決心を堅うしたりき

一爾後五十日餘、多くは門を杜ち、客を絶ち、大師御影の御前に筆を把りて、今日稿を終る、最初の期待に比べては、僅にその形を得たるに過ぎず、靈徳いよゝゝ高く、吾筆いよゝゝ低く、恰も日輪を仰視し、その眞を拜み得ざるが如く、僅かに陸離たる光輝の一二線を描きたるに止まる、稿成りて讀み返し見れば懺悔

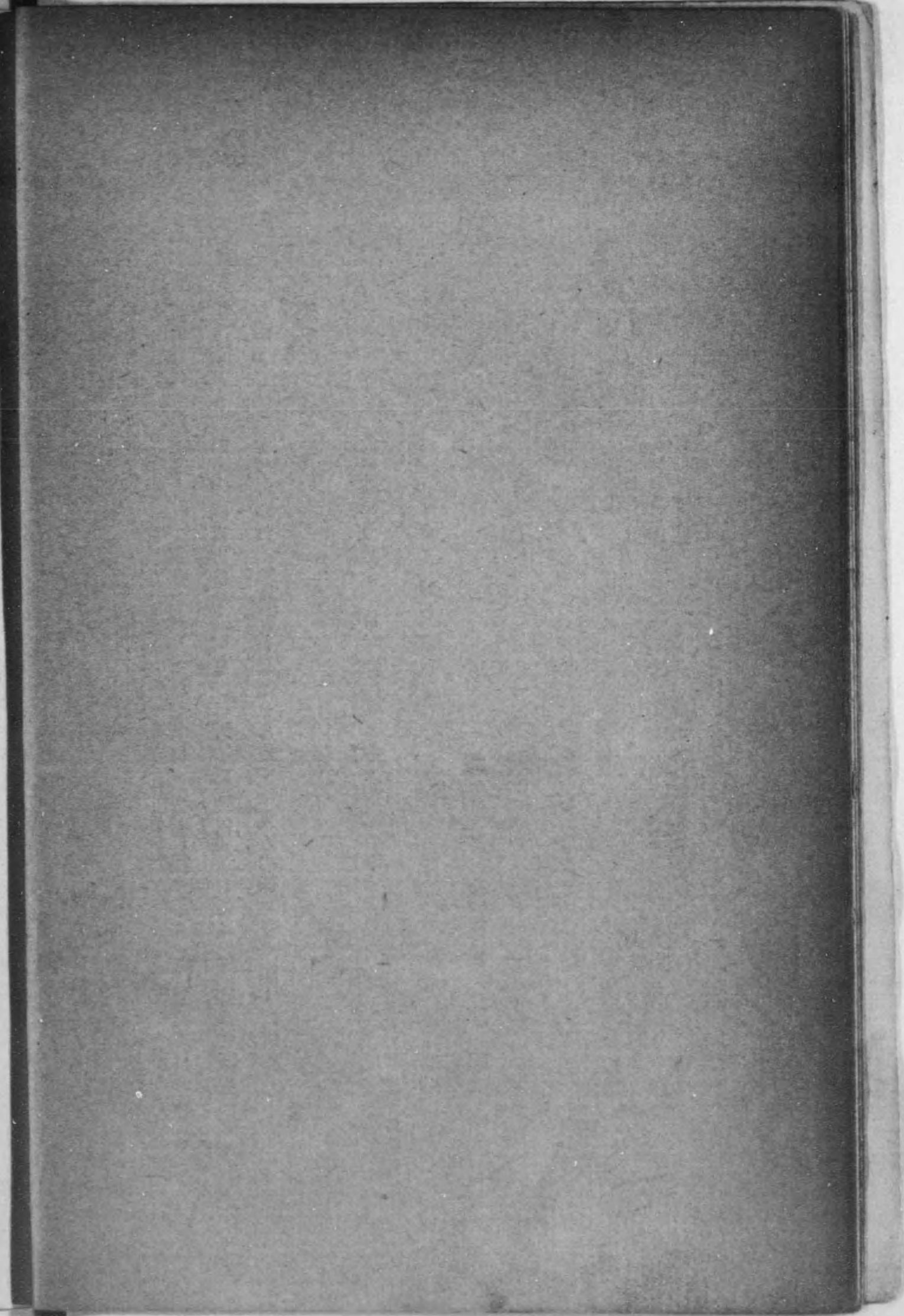
只胸に迫るを覺ふ
一此編前半に精しくして、後半に極めて疎なるは、紙數に限りあると、發行期日の迫りたるに因る、機會再び來り、幸ひに天の冥助を得る日あらば、謹んで後編を作りて、こゝに漏れたる御威徳を記述せんとなす、大方の諸君子、願くば宥恕を垂れ給へ

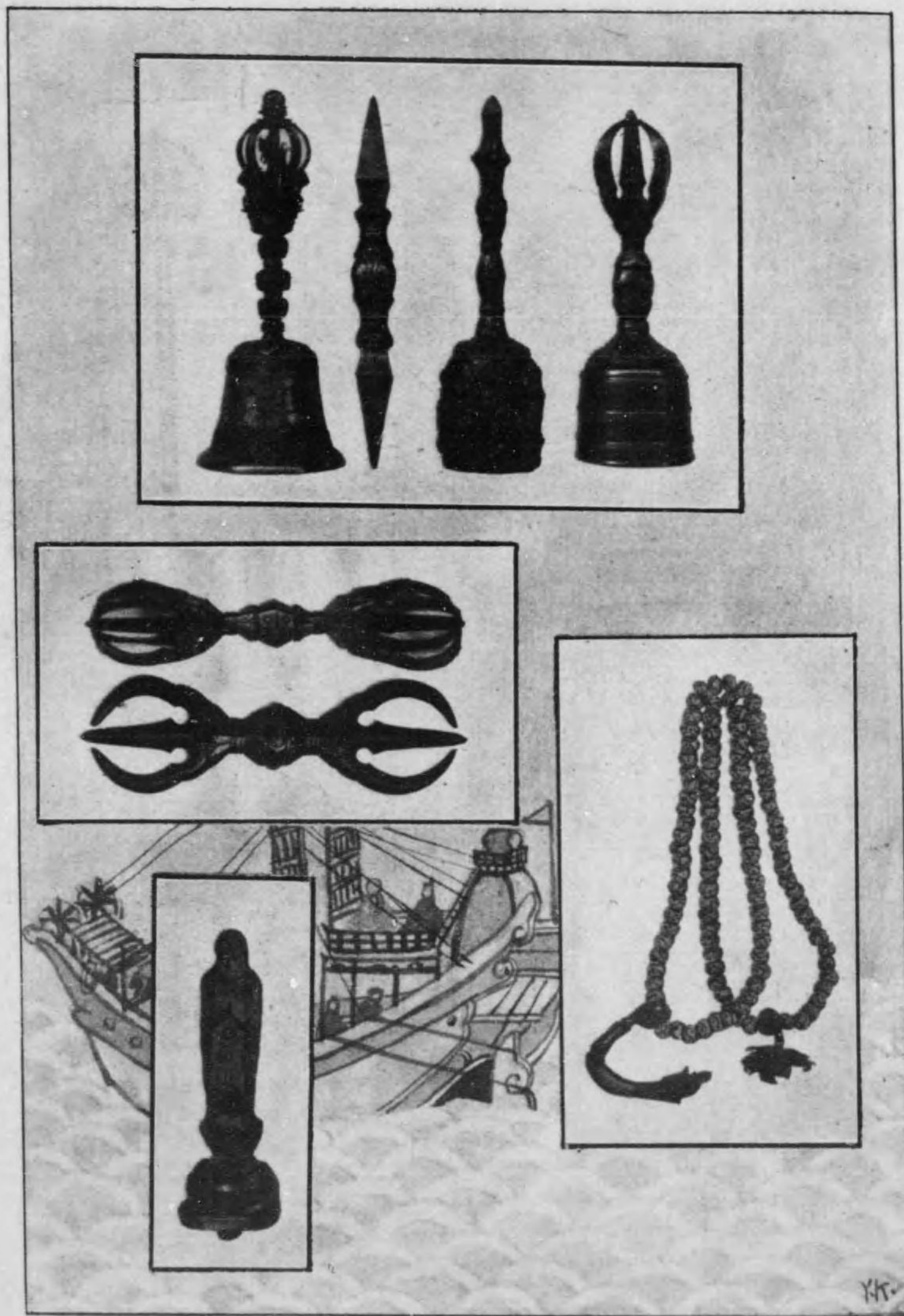
大正四年四月十一日、山櫻咲き匂ふ南窓の下、
高祖大師御影の前に香を炷きつゝ

渡邊霞亭謹記

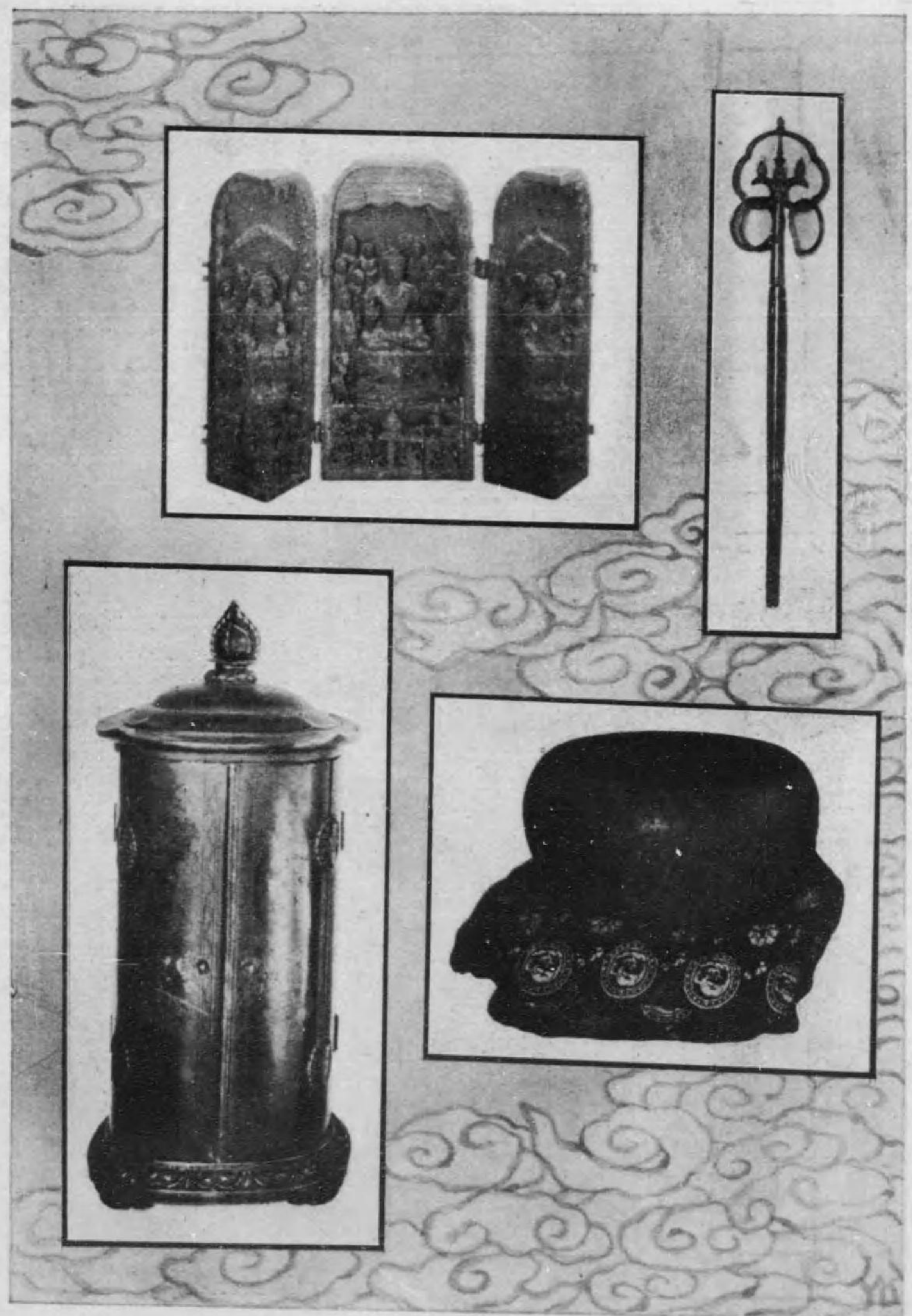


弘法大師御影

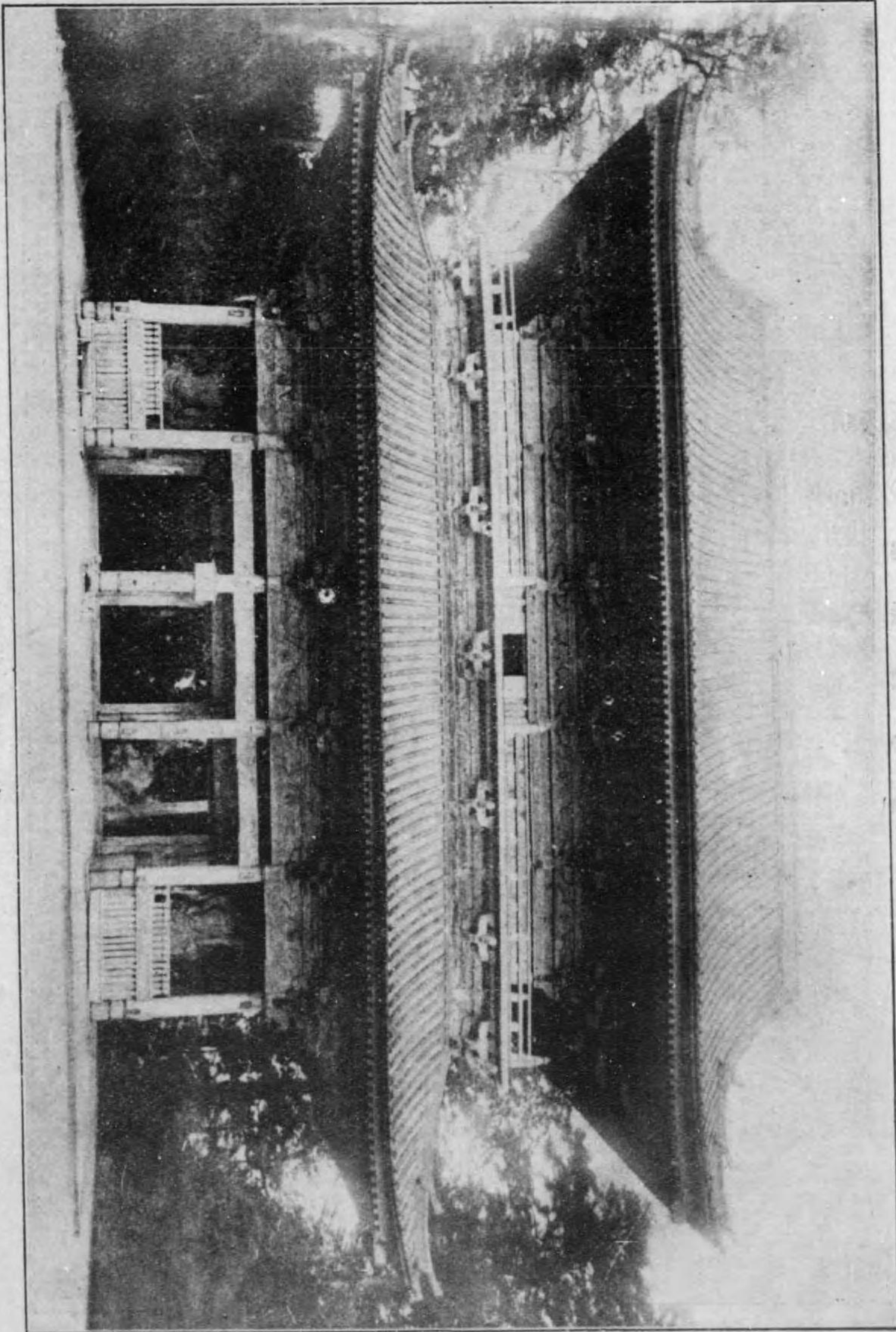




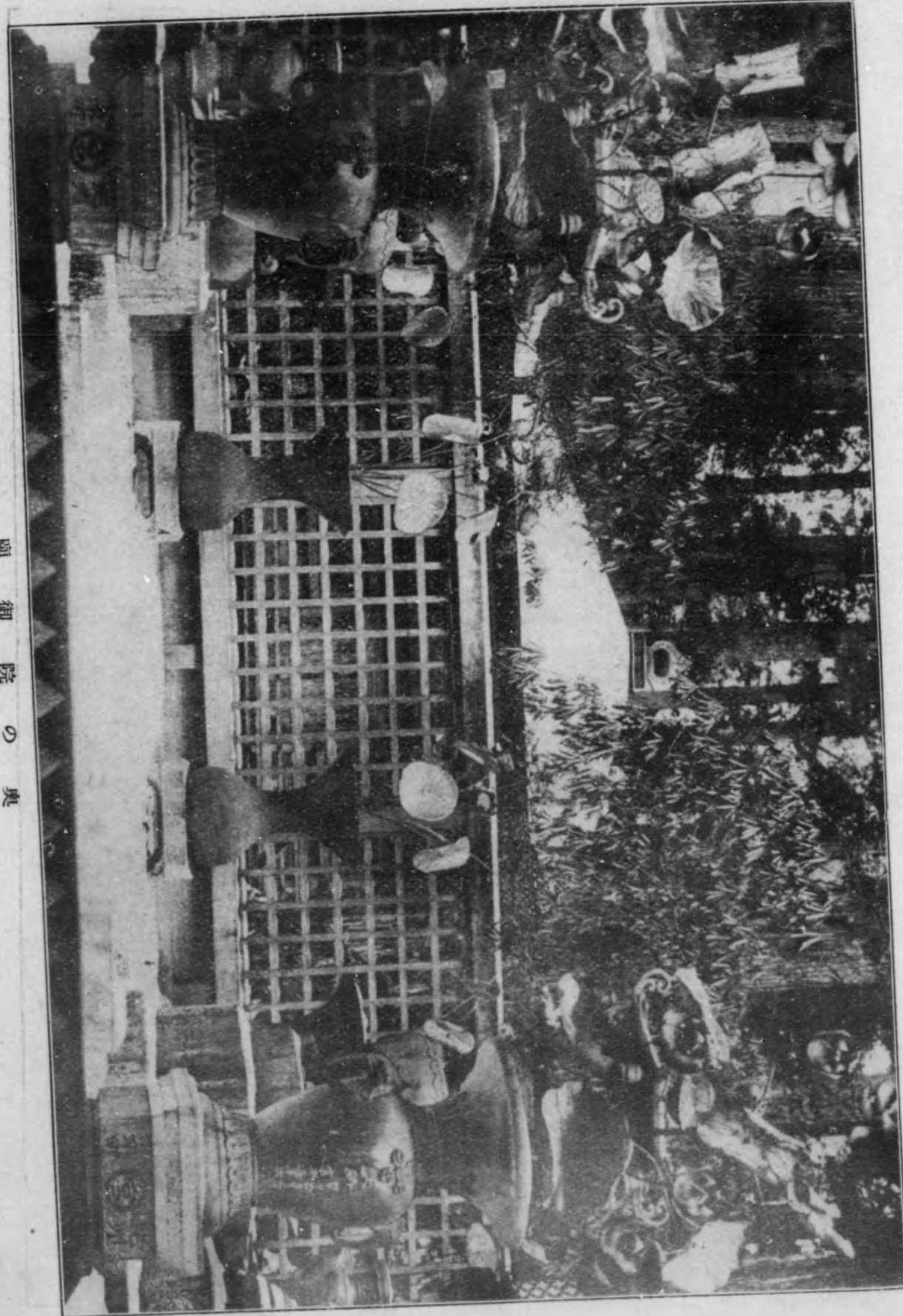
弘法大師傳來の國寶
 (一)三鈷鈴 (二)獨鈷鈴 (三)獨鈷 (四)五鈷鈴
 (五)水晶珠數 (六)五鈷杵及び三鈷杵 (七)御持佛



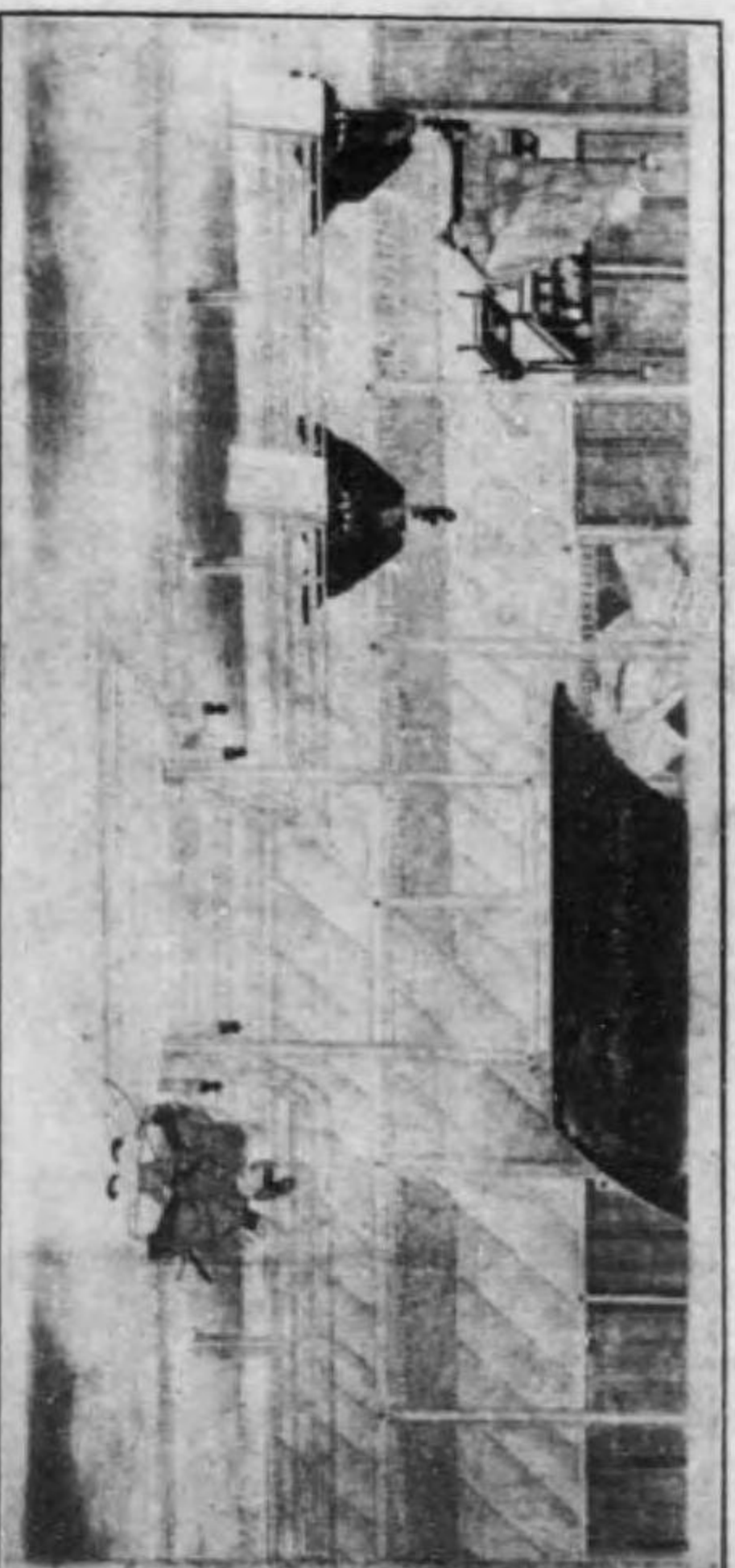
弘法大師御所持の物 (國寶)
 (一)錫杖 (二)鐵鉢 (三、四)枕本尊



高野山大門

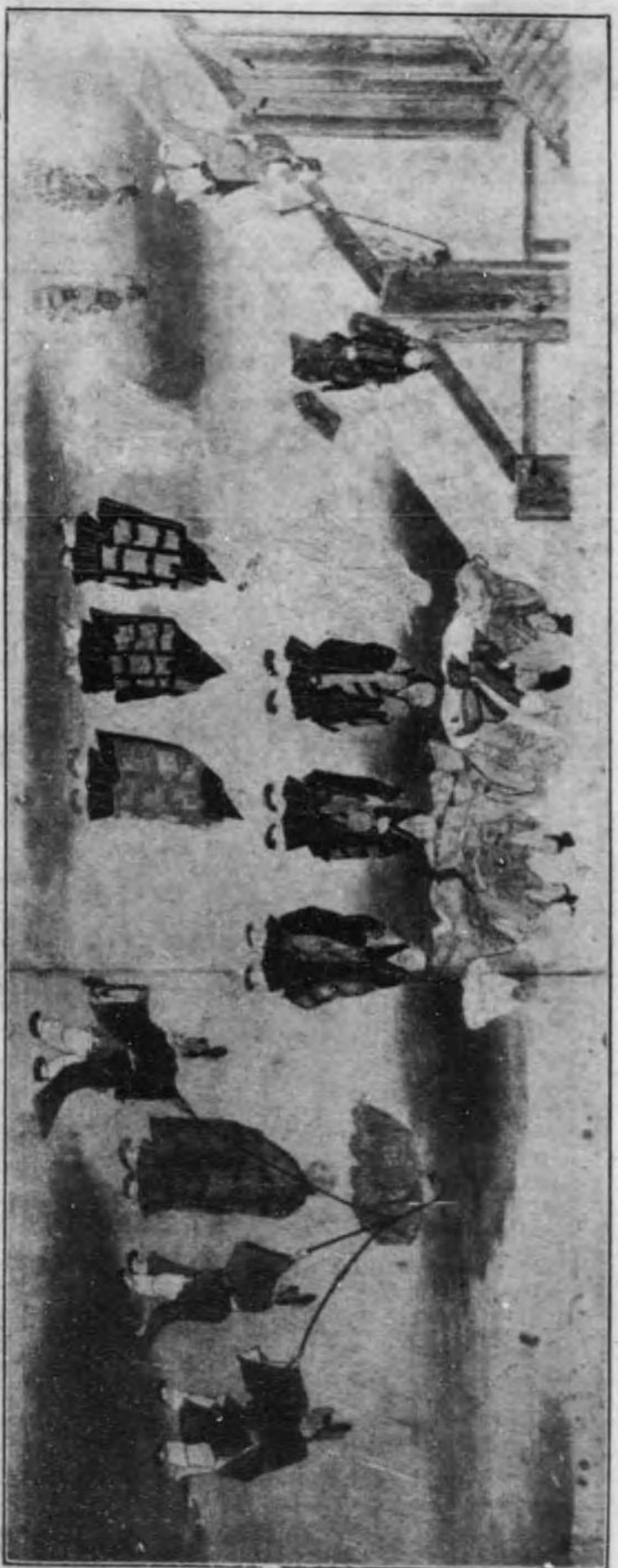


奥の院御廟



弘法大師行狀記 (國寶)
 共一

弘法大師行狀記 (國寶)
 共一



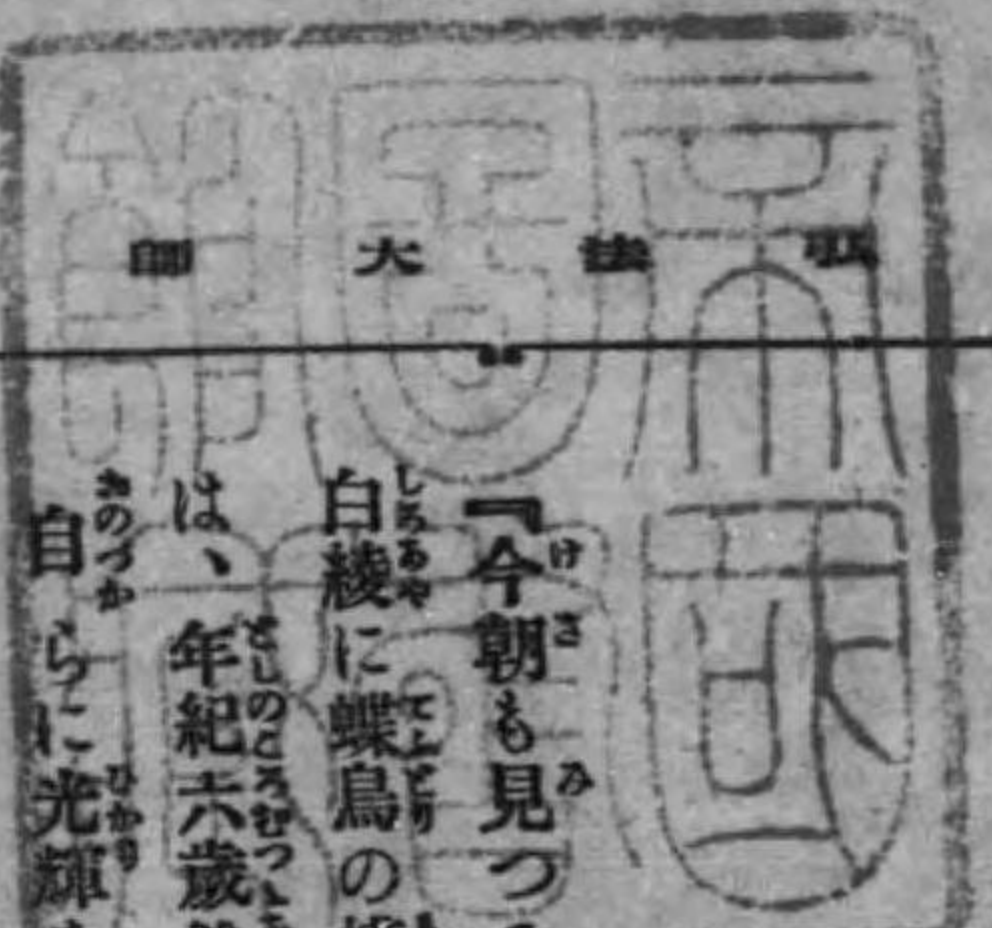
共二

弘法大師

渡邊霞亭著

第一章 貴物

(一)



「今朝も見つる、あな不思議、今朝も同じ夢を見つる」
 白綾に蝶鳥の模様を緋と藍とに染め出せる戸帳の切目を分けて、徐に歩み出でたるは、年紀六歳餘りと見ゆる美はしき稚兒なりき、白玉もて彫み成せるが如き面は自らに光輝ありて妻戸の中宛らに明うぞ見わし
 つか〜と黒格子の下に進みて、目を如月の天に放てば、晴れたる空、碧に澄みて朝日朗かに東の山を軌り出づ、赫々たる靈光四海を射て、白虹高く中天を貫く、稚兒は格子の間よりさし入る光りを、黒漆の如き髪の上より浴びて、若楓の葉とも

見ゆる愛らしき手をはたと合せぬ

泉水に春風渡りて、汀に咲ける紅梅の花朝日に匂へば、香氣漣の間を流れて、中嶋に一株高き松の根も薫るが如し

稚児は両手を合せたるまゝ、心に御佛の御名を念じぬ、心に日の恩の深きを謝しぬ、父母の安穩幸福を願ひぬ、一門一族の家運長久を祈りぬ

然る時、日は瞳々として山を離れぬ、稚児の姿は、その麗しき光明の中に包まれぬ、一樹紅梅の花より出づる馥郁たる香氣は、一に集りて稚児の身を取り巻きぬ、朝日の光りは稚児の氣高き心に通ひて、小き身軀、やがて日の姿なりき、紅梅の香り悉く稚児の心に滲みて、狭き袖皆な薫りぬ

稚児は思ふまゝに念じ終りて

「昨夕も見つる、その前の夜も、その前の前の夜も、同じやうに彼の夢を見つる」と、格子の前に身を置きて、幻の影を追ふが如くに考へぬ

「われ八の葉の蓮華の上に坐りて、諸菩薩と御物語り申し上げつる、あのお姿、

歴々と目にぞ残る、彼の朗かな御聲、あり〜と耳にぞ留まる、常事にはあらず、あれで……あれで……他に物語る事では無きに……、秘めてや置かう、御二柱にも……さうよ〜、況いて他し人々にはよ

獨語て、妻戸押し開け、釣殿の方へ歩む

稚児の此の様を、中門よりさし覗きて、貴げに伏拜める下々の雑人二三あり、互にひそめき語り合ひつゝ、稚児の姿の塗籠の影に見えずなりしを、尙懐しげに見詰めて去りも得ず佇みき

此の稚児を誰と加する、讃岐國多度郡屏風が浦の住人、佐伯直田公(名は善通)の二男眞魚なりき

(二)

「幸福好う、貴物を拜んで来た、今日一日は心もすが〜晴れてあらうぞ」

垣屋の外より斯う呼びて、草履の音静かに入り來れるは、代々佐伯家に雑仕して垣屋の一構を住居とせる下司なりき、妻にやあるべき、細布の二重合せたる黄色

の衣服を裾短に着て、笑しげに端近く出迎わたるが、夫の快げに語るを聞きて
「好い事喃、貴物君拜む日は、家の中に事も無う、睦じう過ぎ行く氣な、さればこ
そ御前も、眞魚君と御名は呼ばせられて、地下の者と同じ様に、貴物と宣はする、
常人にはおはさぬ、いつであつたか喃、唐の聖人様お越しなされたは……彼の法進
様といふ……」

「貴物のお生れなされた時ぢや、六年前の……暑い時であつた喃」

「貴物様は甲寅のお生れぢや、たしか六月十五日の……」

「麗かな日であつた、お館の家棟に、紫の雲が棚引いたと、隣の鹿太夫が云ふて
あつた、今から六年前、恰と寶龜五年の事ぢや」

「法進様がお越しなされたは、それから十日程経ての後ぢや」

「天霧山に初秋がおとづれてあつた、六月も末であつたわ喃」

「法進様、鹿太夫の家にお泊りなされた時、終夜佛頂陀羅尼の聲をお聞きなされた
氣、有難い佛頂陀羅尼の喃」

女房はそれを口にするさへ、恐れと貴さに襲はるゝ心地して、詞の切れ目ごと
に、佛の御名を唱へき

「爾うであつた、天明けて法進様不思議に思召して、鹿太夫にお訊ねなされた時、
それが貴物のお泣き聲と知れて、殊の外仰天なされた、昔が今に至るまで聞きも及
ばぬ奇瑞、これ常人にはおはさじ、必定御佛の再来に疑ひ無しと仰せて、鹿太夫が
案内、お館様にお目通りを願はせられた、彼の時のお館様、眞に御満悦と見受
け申した」

「わしも忘れぬ、お乳の人お抱き申して、法進様のお前へ出た、法進様つくづくと
御覽せられて、この和子生れながら大徳の相を具へたまふ、將來天下を安んずる大
聖にならせたまはんと申し上げ、三たび伏し拜んで去なせられた、法進様御眼力は
淨玻璃、ちこの相違もなく、四五歳から凡下の子ではおはしまさぬ、玉のやうに美
しいお身体から、宛ら御光が映すやうぢや」

「さればこそ、眞魚の君と命けさせられた、御名を呼び參らする者は無くて、草芥

る童まで、貴物と敬ひ云ふ、屏風が浦に玉ぞ現じつる、瓊藻歸る所の島に、果いて瓊の光り見ゆると、心あるは皆な云ひ囃す、お館千萬歳の御榮に、申すもおろかぢや、法進様の觀相に過失無くば、やがて天下の貴物にもならせられう、明日は其方もお姿を拜み參らせ、朝風うお帳臺を出させられて、お黒格子から日輪様を拜ませられる、彼のお姿ぢや、神々しく美しうて、自然に頭が下る、これ見」と胸毛生ひたる胸を見せて「この中に、貴物の御光りが宿りてある、清々と水のやうぢや」まだ幼き眞魚に對する下々の尊敬は此の如く深かりき、鳳凰は雛にして啼く聲好く、旂檀は嫩葉にしてその香四方を包むが如し

此の下司の噂に上りたる法進は唐僧にして、天平勝寶六年（寶龜十年を距る二十六年前）鑑眞和尚と共に日本へ渡りたる大徳なり、聖武天皇の御歸依深く、寶龜七年南都東大寺に御受戒ありし時、鑑眞は戒師を勤めて法進は戒和上となりき、法進が諸國を遍歴して、諸人の教化に勤めたるは、天平寶字の末年より十數年の間、讃岐國へ杖を曳きしは、大師出生の寶龜五年頃なりしならんと想像せらる

多かりき
されば法進の名は津々浦々至る處に残りて、下々の雜人原にも、その徳を慕ふ者

御 遺 告 其 一

夫れ以れば、吾昔生を得て父母の家に在りし時、生年五六の間、夢に常に八葉の蓮華の中に居座して、諸佛と共に語ると見き、然りと雖も、専ら父母に語らず、況んや他人に語らんや、此間父母偏に悲んで字して貴物（多布度毛能）と號す、年始めて十二なりき、爰に父母曰く、我子は是れ昔の佛弟子なるべし、何を以て之を知る、夢に天然國より聖人の僧來て我等が懷に入ると見き、是の如くして産胎して産生せる子也

第二章 捨身

(一)

翌寶龜十一年は、陸奥の國々兵亂打ち續きて、白河の關の西に、黒雲間なく立ち騒ぎたれど、四國の海は穩かにして、瓊藻寄る島々に、秋霞長閑に棚引き、岸の汀に鷗眠りて、その上を朝日照り敷く、取り分け屏風が浦は、佐伯氏代々の徳治く行はれて、館の庭に年古りし椽樟の葉蔭に覆はれぬ地下人も無く、日ごと太平を謳歌する聲、象頭おろしの風に傳はりて、遠く都に届くかと嬉しく見ねぬ

眞魚は七歳なりき、去年の春より習ひ覺わし孝經論語の素讀進みて、誰れ教へねど、文意の大概を解するまでとなりぬ、今日しも論語に不審の條ありて、父の教誨を受くべく、對屋の妻戸の外まで來かゝりし時

「前世からの因縁でがな、到頭俗人では果てもすまいに……」

父田公の斯う云ひたる聲、金鈴を振るが如く清く聞こえぬ、眞魚は一步後へ退りて、後に續く詞を待ちぬ、續いて母の聲として

「有理もく、貴物は前生の佛弟子にてやおわさん、夢に天竺の佛聖人飛び來りて懐へ入らせたまふと見、懐妊しつる、成人の後は佛の御弟子になるべき瑞象とこそ存し申せ、然るべき大徳を見立て、剃髮の身となさせたまへ、將來天が下に名を揚ぐるごと、法進和上のトはせたまひたる如ならんも知れじ」と、滲々と語るが漏れぬ、妻戸の隙間に風通ひて、田公の炷くらん香の烟、鼻々と棚引き出づ

眞魚は父母の物語を聞くに齊しく、手に持てる論語の巻を懐へ納めて、びたりと兩手を合せたりき、己の心に結び付けたる願ひの糸の一端に、圓りなく父母の手觸れたるなり、その身の大願と、父母の希望とが、宛ら符節を合せたる如く一致せるなり

眞魚の黒瞳勝なる眼の底に、嬉し涙湧き出でぬ、一昨年の夏頃より、八葉の蓮華の中に坐して、諸菩薩と物語する夢を續け見るは、よくく佛縁に深きが爲めならん、まだ誰人にも告げたる事なけれど、生涯を御佛に捧げ奉りて、恣に衆生を濟度せんとは、彼の奇しき夢を見始めたる時よりの覺悟なり

然も、兩親に我と同じ御望みあり、われに前生の因縁あり、夜ごとくに見る夢は、われの將來を幻に証したまふ佛聖人の御告ならん、あな有難や、あな嬉しや、われの大願やがて就りて、正法眼藏を得る日來らん、あな〜貴とや
兩手を合せたるまゝ、寶子のの上に立てば、小さく愛らしき渡り鳥、透廊の簾の外に群がりて、口々に秋花の散りたるを啄み鳴く、眞魚の心の歡びを餘所ながら謳歌するが如し

(二)

明け難き秋の天も、東の方白み渡りて、眞萩の花に露溢れぬ、蕭々たる風、孫廂の軒を吹きて、曉の色はの〜と出で來る
眞魚は帳臺の中を出て、例の如く東の天を伏し拜みたるが、平生よりは一晌あまりも早かりき、残月は淡く白菊の上に照りて、暗は尙樟の繁みに迷ふ、いつも中門外につどゐて、眞魚の氣高き姿を拜むを、一日の吉象にする雜人達も、此の朝はまだ影を見せず、人よりは早く起きて、前栽の稚松に千代を啼く雀も群を出でず、匂

欄の下に集く蟲の聲のみ絶わ〜に淋しかりき

眞魚は心ありて此の朝を早く起きつるなり、寢殿の庇を出て、徐に中門へ進みながら、幾度も父母を伏拜みて、且つ後髪を牽かるゝ思ひ、一歩行きては見返り、又た一歩行きては振り返る、黄花庭に満ち、紅葉溝に盈ちて、蕭瑟たる秋風鬚を掠めて吹く、折柄

「貴物、貴物」

消魂しう呼びて、透廊の簾の裙捲き上げ、匂やかに美はしき姿を見せて、心許無げに見遣りたるは姉の千枝姫なりき

「姉君」と眞魚は沈着きて「昨夜申しつる如に、今から筆の山へ參る、兩親起きさせたまは、姉君より善きに托言けたまへ、午時までには飯り候はん、さらば此にて……」

口こそ云はね、心の覺悟はそのふくやかに、きつと締りたる唇にぞ仄見わたる
「お父様、お母様、早や御目を覺ませせつらうに、今暫時待ちておはせ、彼のお山

自らに動きはせし、彼の御寺の御棟に、日は何日も照りておはす……」

「心願の事候ふ、今朝疾う起きて、只一人彼のお山へ詣でん事、昨夕の中に、御許可を受けて候ふに、よも御咎めはおはすまじ、姉君御目を覺まさせ給はぬ中に、つとめて早く出でつるを、その効なく驚かし奉る、怒させたまへ、深く思ひ決め候ふに……御許可は昨夕の間に申し請ひて候ふに……」

真魚は語清しく云ひ切りて「さらば」とばかり歩み出しぬ、天は姉弟が云ひ交す言の葉の一語ごとに明け行きて、雀の聲も躁しく聞こ初めぬ

「只一人にて候ふ喃、鹿太夫も伴れさせたまはぬ喃、お山までは道も遠いに、途中異變ごもおはしまさぬか喃」

「御懸念無う……云ふ間に飯り参らう、心願あつて詣づるなれば、供の者など路次の妨げこそなれ、何の用も在しませぬ、早や、さらば……」

中門外へ踏み出だして、不覺に後を見返れば、姉姫は兩手に掲げたる簾の裙より、濡む目に沈と見送りぬ、優しき女心に、只一人山路を行く弟の行程を案じ煩ひ、切

て魂影身に添ひて、往來を守護せん心なりき、弟の安穩を祈る心なりき

(三)

「御両親は、われを佛の御弟子に爲さんと願はせつる、われの望みもそれに協ひぬ、一昨年春初めて見つるより、去年も、今年も、宵々ごとに八葉の蓮花に坐りて、諸菩薩と物語りする様を夢みる、起きては儒家の書を繙げど、寢ては佛の御聲を聞く、よくよく佛縁深き身ならん、よくよく出家の前生を享けたるならん

されど、徒に頭を圓めるばかりが出家にはあらじ、徒に黒染の法衣を着けるばかりが僧にはあらじ、頭と共に心を圓くせでは協はじ、法衣を着ると共に、心を清淨にせでは協はじ、圓滿清淨の心を持ちて、生涯を御佛に参らせでは協はじ

あらず、あらず、圓滿清淨の心を持ちて、御佛に仕へ奉るばかりが、出家の勤行にてはよもあるまじ、佛は覺なり、一切の種智を覺り、又た能く有情を開き覺ること、宛ら夢の覺めたるが如くせでは協はじ、一切の種智を覺り、又た能く有情を開き覺れば、自らに人間の苦を絶つことならう、人には生病老死の苦勞あり、怨憎

の苦あり、求めて得ざる苦あり、哀別離の苦あり、五盛陰の苦あり、生ある者には苦勞伴ひ、息ある者には障礙従ふ、人界は是れ火宅、怨憎は是れ地獄、人は火宅に苦惱して、地獄の底に迷惑する、この凡惱を脱離して、衆生を濟度するは、實に御佛の本願なり、やがて出家の勤行なり

われの母の胎に宿る時、天竺國聖人の僧來りて母上の懐に入りしと夢みたまひたる氣、然らばわれは前生より佛の御弟子となるべき因縁を持ちて生れぬ、兩親の御心已に然り、われの願望又た已に定まる

されど御佛の御弟子となりては、一生に成佛して、恣に衆生を濟度せでは協はじ、上は皇運の長久、國家の安泰を守護り奉り、下は萬民の障礙を攘ひ、衆生の苦惱を救はでは、佛門に入る甲斐も無く、并びに兩親の御望みに副ひ奉ることも協はじ、徒に頭を圓め、徒に法衣を纏ひ、徒に經典を誦し、徒に坐禪觀法するを、僧侶の本分と思はゞ誤れり

思へばわれの任は重く、われの望みは大し、百歳までの壽を保たば、願望よく成

就して、皇室を泰山の安きに置き、國家を穩なる海と鎮めて、億萬の衆生を濟ふことなるべきか、任の重きに堪へ難ねて、中途に挫け折れる事なかるべきか、願望遂に成就せず、徒に頭圓き僧侶にて終るべきか

一期の心こゝに決まる、一生の歸依こゝに定まる、さはれ、われの淺き智恵に遠き未來を計ることは爲らじ、偏に世尊の御袖に縋りて、その証明を待たではならず今日の登山は、願望の成就する時有るか無きかを知らんが爲めなり、生死を天に任せて、遠き未來を占はんとするが爲めなり、或は此れが賑る時なき冥途の首途なるかも知れじ、昨夕お父様、お母様の御前に平伏して、今朝參詣の御許可を受けたる時、つくづく御顔を拜み參らせき、兎もすれば永の御別れとなるべきを思ひたればなり、されど御兩親は、われの心を知らせたまはで、御佛詣を止めはせじ、只怪我するな、朝露に心を濡らすな、往返に氣を付けよ、と慈愛深き御詞を下したまひきその御聲、今も耳の根に残りてあり、その御面ざし、目前にちらちら見ゆる殊に姉上、精神が知らずるか、透廊の端近くまで出でさせ給ひて、しみじみ別れ

を惜ませたまひぬ、斯る御慈愛に背き奉りて、こゝに危き験を試むる、不孝の罪は萬死も容れじ、只生きて現世に益なからましかば、一日も早く身を捨て、來世の幸を待たんこと、近頃の大願なり、恕させたまへ、お父様、お母様、姉君も恕させたまへ」

眞魚は筆の山の頂に立ちて、我家の方を望み見る、朝の烟漠々として、漁村遙に白帆の掛るが見え、破風作りの屋の棟、小さく霞みて立てる傍に、樟の樹高く亭々として翠深し

彼の下に御両親はおはす、姉上は在す、而もわれの此の覺悟を知らせたまはで頻りに歸りを待ちてやおはさん、あはれ、歸りを待ちてやおはさん

悵然として立てば、雨の如く涙下り、無然として考うれば、雲來りて胸を鎖す、菩提寺の大門脚下に聳わて、樹の間吹く風の音蕭々と磬の音に交る

(四)

兩掌を立てたる如き峻崖に稚松繁りて、その間より白雲湧き出づ、眞魚は崖に臨み

て立ちて、遠く西の方を伏し拜み

「われ今深き覺悟をもちて、此の崖より身を捨て申す、幸ひ一生に成佛して、弘濟の本願を達することを得ば、世尊現はれて證明を垂れたまへ、不幸にして將來望み協はぬに決まりあらば、此のまゝ命を取らせたまへ、我身を諸佛に供養し參らせ、後の世を期し申すに……」

兩手を胸の上に合せて、一心に祈念を籠めつゝ、ひらりと身を躍らせて、千仞の谷底に身を投げぬ、一陣の西風さつと吹きて、満山の樹木撞々と鳴り動く、眞魚の足、崖を放るゝ時、紅の玉中有に轉ぶが如く、雨の袖蝴蝶の如く翻へりて、落葉紛々と軀を撲ち、深黄染の袈雲の如く揺れて、秋霞淡く掛る、岩石一たび皮膚を打たば、玉は忽ち微塵に碎け、大木の梢一たび身に觸れば、花は忽ち二つに裂かれん、落つるに従ひて速きこと礫を投げるが如く、流星の北に向ひて走るが如し、斯くして谷間に落ちたる時、眞魚の軀は何とかならん、あはれ、あはれ、珠玉は原の形ならじ

只見る、纔に中天に至りし日は、澄みたる秋空の氣を透して、五色の光りを眞魚の上に投げぬ、光芒一圖に巖間に集りて、暉々たる白虹眞魚の落ちたる邊りに輝き、紫の雲、淡紅の烟、樹々の間に簇りて、忽ち眞魚の身を裏み、天人の柔き腕、下において抱き、釋尊の貴き御影、紫雲の間に現はれて、赫灼たる光明の中に眞魚の頭を撫でたまひぬ

眞魚は恙がなかりき、珠玉は微の瑕をだも受けざりき、眞魚の落ちたるは、錦の菌とも見る紅葉の散り葉堆く積りたる處なりき、眞魚は一たん倒れたるが、直ちに起きて合掌したるまゝ、散紅葉の上に坐りぬ、日の光りは紅葉に映りて、自らなる紫の雲、立ち上る烟に現じて、將來幸ある眞魚を取り巻き、美しく愛らしき渡り鳥、樹々の間を鳴きつれて、光輝ある童子の心を慰むる音楽の如く囀りぬ

眞魚の大願は成就しぬ、眞魚は一生に成佛すべき示現を蒙りぬ、氣高き心は大干世界に遍通して、國家鎮護の望みを遂ぐべく、恣に衆生を濟度して、心からの願ひ協ふべき験を見ぬ、今は心安し、御両親の御意を空しうすることはあらし、長く佛

弟子となりて、佛の御心に副ひ奉る事を得ん

眞魚はいよく心を決しぬ、出家して國恩の萬一に報ひ奉るべき大決心こゝに定りぬ

一時の間谷間に端坐して、心行くまで佛恩の深きを謝し、やがて徐に山を出て、いそぐと屏風が浦の家に歸りぬ

然も、此の事は絶て他に語らざりき、心に秘めて修行を怠らざりき

御 遺 告 其 二

然れば此子を養て、將に佛弟子と作さんとす、吾れ若少の耳に聞き喜んで、泥土を以て常に佛像を作り、宅の邊に童堂を造つて、その内に安置して禮し奉るを事としき、此の時に吾父は佐伯氏、讃岐國多度郡の人なり、昔し敵毛を征つて土を班たれたり矣、母は阿刀氏の人なり、爰に外戚の舅阿刀大足太夫等が曰く、佛弟子と爲さんよりは大學に出して文書を習はしめて身を立てんには如かじと.....

第三章 四天王の擁護

(一)

「直魚、來ませ、今日も童堂作りて遊ばんに、疾うく、來ませ」
春の日は長閑に照りぬ、遠霞は四方の山々を裏み、色奇しき百種千種の花は、見る限り錦を織りぬ、真魚は十二なりき、斯く呼びて土門を駈け出づる
真魚が筆の山の頂より身を捨て、未來入道の運命を試みたる時、まだ直魚は襦袢の中に養はれたる赤兒なりしが、今は成長して八歳なりき、真魚とは五歳違ひにて、愛らしく清き童なりき

「お、兄上」と懐し氣に呼びて、車宿の蔭より駈け出で、土門より雑舎の前へ出て、棟門外に兄の後を追はんとする時、北の對の孫廂に姉千枝姫の姿見わた、

「直魚、お母様召させつる、好い物給らうとて……早や、來ませ」

直魚は前より兄に呼ばれ、背後より姉に呼ばれて、何れに従へべき様もなく立ちたるが、忽ちに母の命の重きを思ひて

「兄上、待ちておはせ、いつもの原に待ちておはせ、お母様御用を承はつて、後よりぞ參らうづる、やよ喃、やよ喃」

大聲に呼び立て置いて、千枝姫の立てる孫廂を目覓け、礫の如く駈け戻りぬ
千枝姫は「よくぞ」と垂髻を撫で、簀子縁より妻戸に入る、後には春風吹き敷きて、落花雪の如く軒を撲ちぬ

真魚は棟門を一間ほごも離れて、直魚の出で来るを待ちてありしが、暫く待てども出で來ぬに望みを失ひて、只一人西の原へ足を向けぬ、陽炎の立つ處葦匂ひて

潤々たる暑影、偏に真魚を裏むと見ゆき
青草薔の如く生ひ茂りたる中に、名も知れぬ紅く白く黄なる花咲き交りて、春色燎爛たり、真魚は道邊の枯枝を拾ひ來り、これを四隅に建て、堂を作り、青草を摘みて家根を音き、土も三重五重の塔を捏り、そを程よく按排して、その中に土製の佛像を安置し、花を供へ、水を手向けて、一心に禮拜す、真魚の遊戯はいつも此なりき、讀書習字に疲れを覺わたる時は、屋敷の外の草原へ出で、佛塔を捏り、

佛像を作り、花を供じ、水を手向けて、餘念無く嬉び遊ぶ、同じ年頃の童來りて、石打、竹馬の遊戯を鞠むる者ありても、見向いてだに見ざりき、里の子等は海邊近くに出で、魚を捉へ、貝を拾ひ、野山遠く狩りくらしして、土筆を摘み、草蕨を採りて遊べど、眞魚は絶わてこの群に入らざりき。

「貴物が今日も御佛作りて遊び居つる」とは、土地の人が驚嘆して、語り傳へる詞なりき

(二)

「貴物君、今日も青草原に出させられて、例の御遊びなされつる、都より賓客もあらせられるに、さて御歸りの遅きことかな」

鹿太夫は獨語つゝ垣屋を出て、眞魚の様子を見るべく來りぬ、今日あたり、按察使の來着あるべきを知りたる里人は、里の長の命するまゝに道の掃除怠りなく、一路春風長く續きて、落葉一枚だも見わざりき

鹿太夫は路邊に立ちて、彼方此方を眺めつゝ、疎に白き髯を撫でぬ

只見る、眞魚は已れの作りたる佛堂の前に座りて、一心に掌を合せ居れるなりき
一心に經偈を讀誦し居れるなりき

上には春の日麗に照りて、晝霞紫に匂ひ、下には蓮華草愛らしく咲きて、宛ら玉の臺を作るが如し

「彼のやうに爲されてある、彼のやうに樂く遊びておはします、驚かし奉るも恐れちや、暫くは見であらん、此方より心を傾けて、和子の御手づから作らせられたる御佛を拜み申さう」

鹿太夫は樹蔭に立ちて、口の中に陀羅尼經を讀み初めぬ、鹿太夫の目よりは、幼

眞魚の身より、金色の光明照るが如く見たりき

兎角するほごに、がやくと人の騒ぐ聲して、先供の雜人が突き鳴らす金棒の音

鏘々と響き渡る、鹿太夫は驚きて

「呀、按察使の君ちや、按察使の君の御下向ぢや」

慌てたるやうに眞魚を見れば、一間と距てぬ大道を、按察使の行列美々しく通行

するに心も付かず、寂然として元の處に座り居れり
「呀、呀、貴物君、氣付かでおはする、按察使の君の御通行に氣付かでおはする」

鹿太夫は氣を揉みて、眞魚に告げ知らせたく思ひたれど、大道は距ちたり、前供の雜人は「下に居れ〜」と呼びながら過ぎ行く、樹陰を出づるも恐しく、一縮みとなつてそのまゝに蹲踞りぬ

按察使は國守の政績を視察し、地方人民を巡撫すべき職なり、養老三年(延暦元年を距る六十五年前)諸國に此職を置かれてより、年毎に管内を巡檢して、民庶の苦みを問ふを勤務としぬ、阿波、讃岐、土佐の按察使として、伊豫守高安王を置かれたるは、この後ならん

行列は長く續きぬ、按察使は鞍鎧立派に置きたる三歳駒の太く逞しきに乗りて、肅々と來かゝりしが、道の邊の草原に坐りて、手づから製りたる土佛を伏拜み居れる眞魚の姿を一目見るより、驚きて馬より降りて、恭々しく禮拜しぬ

鹿太夫は夢に夢見たる心地なりき、和子の御身に光明さして、按察使の眼を射たりとも、朝廷の御旨を畏みて、三國の中に只一人置かれたる大官が、態々馬より飛び降りて、恭々しく御拜あるべき所以なし、こはそも如何に、こは常事とも思はれず、と息を屏め、目を睜りて、按察使の爲んやうを見詰め居たり

「こは、何と爲されつる、見る影も無い童を、何と御覽じて斯くは拜ませつる、つや〜心を得難く候ふ」と供人の一人は異しみ問ひぬ。

按察使は眞魚の背後より五六歩を退きて、驚き恐れたる目に彼方を見つゝ、

「お主には見ぬか、彼の童子の身の周圍にある不思議が見ぬか」と叫びぬ

「何も見ぬ申さぬ、上には春日輝き、下には草花咲き亂れて、その間に愛らしく氣高い童子の坐り居れる外、何も目に入るものござり申さぬ」

供人は、他の同僚の顔を見ながら答へぬ

「いよ〜貴や、われの目にのみ入りて、お主達の目には入らぬ、凡人にてはおはさじ、あれ見、あれ〜見、四天王白傘を捧げて、前後より擁護あらせられる、

紫雲空に靈鷲き、光明おのづから身を包む、前生の聖人にておはさうぞ、有り難や、貴や、あな、あな」

按察使は、真心より湧き出づる聲を絞りて、供人を戒め抑へつゝ、下座するやうに伏拜みさ

然も眞魚は、見向きても見ず、胸の上に合掌して、頻りに經偈を誦し居たりき

(三)

按察使はやがて去りたれど、此の噂は土地一ぱいに残りたりき

『何んと聞いたか喃、熊手八幡宮の御前でも、馬上から拜を爲されたばかりであつた、それが貴物の前では、わざ／＼お馬から降りさせられて、恭々しう御拜を爲された、四天王白傘を捧げなされて、貴物の前後をお護りなされあるといふ、前代に聞きも及ばぬ、凡人ではない、前生からの聖人、神童とは此の兒の事、屏風が浦から玉が出た、屏風が浦からきら／＼光る明玉が現はれた』

口々に斯く噂して、人皆な神童と呼びたりき、田公の館は、昔國造にてありし

時と異りて、簷にも柱にも、著しき傾きを見せられど、眞魚の出生に由りて、朽ちたる破風にも光り見ゆ、顔れ掛けたる棟の上にも瑞雲靈鷲きて、家名興隆の氣運自らに顯はれき

田公夫妻は、鹿太夫が目前に見聞させる事を物語り報告せたるに由りて、臆も潰るゝ程に驚きたりき、家に國造の名あり、おのれ能く祖先の官位を繼承ぎ居たらば、按察使の巡檢には出迎ひもすべく、面接もすべく、將た館に案内して、饗應も申し上ぐべく、家の小供等にも相應の禮儀を受くる事なきにあらざるべきが、今の身は甲斐ぞ無き、御前近くに罷り出で、一禮する格式だも持たぬを、眞魚が佐伯の子孫とは知り給はず、草原を褥にして、形ばかりの土佛を祀り居れるに、殊さら御目を止めたまふ謂れも無し

然も、わざ／＼馬より降りて、丁寧に御拜なされきといふ、四天王白傘を捧げて

眞魚の前後を御守護あらせられきといふ、いみじくも思ひ議らぬ事よ、彼果して前生からの佛の御弟子か、果して將來佛門に入るべき身か、我等凡俗の目には見ゆね

ど、官位高く、徳識共に備はれる人の目には、四大天王の御影、歴々映するか、世に有るまじき事と思へど、鹿太夫目前に見つと云へば相違あらし、里人の多くが、悉く實見せりと云へば異ふ處あらし、我身ながら貴き子を舉みつるよ
田公夫婦は互に顔を見合せて、不思議の因縁に惘れ果てき
真魚は按察使の行列の過ぎ去るを待ちて、草原より歸り來りぬ、鹿太夫を初め下司雑人は、垣屋の外に出迎わて姉の千枝姫と、弟の直魚とは、中門の内に立ちて、噂に聞ける四天王の御影を拜まんと待ち受けぬ

「直魚は來まさでありしよ、按察使の御通りもあらせつるに……」

真魚は平生のやうに斯く云ひて、千枝姫に一禮しつ、透廊より對屋に入る
「歸りしな、今噂してあつた、外舅様も待ちて在すに、御挨拶の口上せでか」

田公は羞明げに我子を見て、背後に御光や映すらんと目を睨りぬ

されど異なる事はなく、平生の如く、唯々として外舅の居間に定めある北の對の一室へ行く、我子ながら前生からの佛因を持ちてあるかと思へば貴かりき、四天王常

に身邊を擁護あらせたまふかと思へば、何處やらに光り見わき

千枝姫と直魚とは、葎の蔭に佇みてありしが、此の時姫はうしろを見返りて、

「貴物、貴物、實に貴き影見ゆる、斯様の同胞持ちたる身の幸、御佛にお禮申さ

では協はじ、直魚主、いで」
手を合せてうしろ姿を伏拜みぬ、直魚も同じやうにぞする

御 遺 告 其 三

此の教言に任せて、俗典の少書等、及び史傳を受け、兼て文章を學ぶ、然して後、年十五に及んで入京し、初めて石淵の贈僧正大師に逢ふて、大虛空藏等併びに龍滿虛空藏の法呂を受け、心を入れて念持す、後に大學に經遊びて、直講味酒淨成に従ひて、毛詩左傳尙書を讀み、左氏春秋を岡田博士に問ふ、博く經史を踏しかとも専ら佛經を好む……

第四章 昔語り

(一)

日は暮れぬ、黒格子に朧月の光りさして、歸雁遠く天霧山の中腹に鳴く、田公と妻の玉依姫とは、斜に對ひ合せて坐りて、その前に眞魚は端然と坐を占めぬ

燈臺は明く照りぬ、田公は白湯に咽喉を濕ほして、眞魚の爲めに家の系圖を説く直魚は早や伏床に入りけん、千枝姫は持佛に籠りて、佛頂陀羅尼を讀みてありき

「居れ、われ、汝に家の系圖を語り聞かさう」

田公はまづ口を開きぬ、眞魚は謹みて両手を支きぬ

「佐伯の姓には二系ある、一は播磨の佐伯で、稻舂入彦命（景行天皇の皇子）より出ませり、その王子の御諸別と呼ばせられたが、播磨半國を賜はり、御子阿良都針間別佐伯直の姓を賜つて、子孫彼地に榮えおはす、なれど我家の祖先とは自らに系圖が違ふ、我家の祖先は、古く神代に興りて、忠義の名隠れなく、武勇又た併びなく稱へらる、天孫彦火瓊杵尊日向高千穂の峰に天降らせられたる御時、御前

に立ち、神駕を迎へ奉りし者に、天忍日命といふ猛者のありしを聞きつらう、これやがて我家の先祖にて、高皇産靈尊の御子ぞ、その三代の御孫を、日臣命といふ、神武天皇御東征あらせられる時、大來目部を率ゐて従ひ奉り、道を拓き、山を踏み、剩へ菟田の縣に朝敵兎狛を誅したる勳功、尋常ならず見れば、やがて勅して道臣命の名を賜ふ、道臣命より七代、武日命は日本武尊、東の方蝦夷を征したまふ時、隨身して武勳を樹てたるが故、當讃岐國を賜はりて、私宅の地とする、武日命の子大伴武持連、仲哀天皇に仕へて、始めて大連（大臣大連と併び稱せられる、貴き官名なり）に任せられ、その子室屋も又大連として、朝廷に仕へ奉る、室屋の子の御物、宿禰の姓を賜つて讃岐を治め、その子倭故連、始めて當國の國造に任せられ、倭故の子歌連、佐伯宿禰と稱するに至つて、代々佐伯の姓を名乗る、歌連からわしの代まで十四代、血脉綿々として絶わぬ」

田公はこゝまで語り續けて、暫時は詞なく暗然として頭を垂れぬ、燈臺の火は徒に燃わ、玉依姫は袖かき合せて、昔語に耳を傾けぬ、此の時まで妻戸の外に立ちて

田公の談話の切れ目を待ち居たる阿刀宿禰は、戸を排きて入り來ぬ

『宿禰殿まづ來せ、今夜思ふ事あつて、眞魚に昔語聞かせ居る』

田公は座を譲る如くにしぬ

(二)

阿刀氏は佐伯の一族にして、讃岐國の名門なりき、大伴佐伯の門葉、つぎつぎに京洛へ召されて、左右の京職に任せられし時、共に京洛へ往りたれば、阿刀宿禰を給はりて、一門の繁昌云ふばかりなかりき、今の主大足太夫弘信は、田公の弟にして幼きより阿刀氏に養はれ、家の女玉依姫、田公の妻として佐伯氏に縁付きたれば、一族なるが上に重縁なり

田公は名聞を求むる心も無く、官職に就く心も無ければ、代々住みなれたる屏風が浦の館に住みて、風月をのみ友とし暮らせど、大足太夫は早く學問に志して、三齋出車の譽れ高かりしかば、やがて召されて伊豫親王(桓武天皇の皇子)の學士となり、從五位下に任せられき、學問をもて生命とする高士の風、自ら眉宇の間

に現はれて、同じ腹には生れたれど、田公には優りて堂々たる品格を備へたりき、徐に座につきて

『昔語と見申す、兎角に人は先祖の勳功を知らで協はぬ、先祖の勳功を知るは

やがて我身の將來を知ると同じぢや』

『宿禰殿も同意と見ゆる』と田公は心快げに笑ひて『眞魚よ、聞け、さまでに繁昌して、大君の御覺愛愛かりつる家が、如何なれば斯う家連の傾きを見つるかど

.....』

眞魚は爛々と照る燈火に面を向けて、桃の蕾を見る如き唇に微なる戰慄を見せた

るが、遂に何事も云はず又た垂頭きぬ

『されど、先祖の御餘光は、尙輝きて、歌連の子平古曾連、その子平彦連、その子伊能連までは、國造の職を繼ぎて來つれど、孝徳天皇の二年丁未の歲、唐國の制を學びて、京より國司を遣はし、それ等の手に由りて、國々を治めたまふ事となりたれば、國造の威勢も衰へて、遂にその名も止めずなりぬ、されば伊能連

が子、大人の代に至りては、宿禰の尸をも賜はらず、京へ召さるゝ事もなく、一族縁類それ〴〵に官職を授けられて、京洛へ移る者すら多きに、我家のみは草深き片田舎に埋れて、徒に系圖のみを藏むる、これ抑も人の罪か、將た世の咎か、われは知らじ、只知りたきはお身の覺悟ぞ、兄は家を繼ぐべき身、姉は當國瀧の宮の宮司菅原氏に婚約調ひぬ、お身は二男、兎角は家を繼ぐべきにあらじ、母人は出家の道に入れて、將來大徳智識にも爲さん、志止み難きさま、且は前生の因縁もあるべく覺ゆ、これに宿禰殿もあらせられ、學問もて世に立つか、それとも先祖の先蹤を逐ひ、武をもて朝廷に仕へまつるか、今年は早や十二、心に望む處あらば、裏む處なく申せ』

田公は我兒の心の底を問ひ探る様に云ひぬ、玉依姫は謹しやかに口を添へて

『お父様の仰せ、あだにな聞きそ、お身の心にも望みはあらん、されどお身の前生は佛の御弟子ならんと思ふ、いみじく貴き証據としては、夢に天竺國の聖人、懐に入らせたまふと見て、懐妊しぬ、學問武藝にはその人あり、優れて貴きは佛

の御教へぞ、母の願ひは御佛の前に身を捧げて、衆生濟度の望みを遂ぐるにある、よく考へて御返答申さうぞ』と心付けぬ

大足太夫は黙して姪の答への如何なるべきかを待ちたりき

『さればにて候ふ、先祖は神武天皇に従ひ奉りて、道を拓き、山を踏みて、天兵の御嚮導を爲させられしと承はる、われは法を究めて人の心の道を啓き、億萬衆の前に立ちて、人の行くべき山阪を踏み坦げんと思ひ申す』

真魚の聲は黄金の鈴を振るが如くに鮮なりき、將た石磬を打つが如くに清く力ありき、田公は我意を得たりとやうに手を舉げて

『よく云ひつる、我が心もそれであつた、我が願ひもそれであつた、母の満足もさこそあらう、さらば急ぎ吉日を選んで、佛の道に入れうづるぞ』

満面に溢るゝばかりの笑を見せて云ひぬ、玉依姫の眼許にも歡喜の色漲り濺ふ

『なれど……』と大足太夫は思はず遮りぬ『佛の御弟子にするも好からん、殊に前生よりの因縁免れ難しとあらば、真魚の望み、御兩親の御願ひを協へたまふも宜

しからん、但だ急ぐことにはおはさじ、佛の道にも學問文章の入用は在さう、まづ彼の教へを授けたまへ、さすれば聖教、心の底の土臺となりて、修業を資くる本ともならうに……」

田公は有理と領きぬ、眞魚は望みの協ひたる嬉しさに、思はずも合掌して、心に佛菩薩を伏し拜みぬ

夜は深けて、簷に春の露のしとくと落つる響す

御 遺 告 其 四

恒に思ふ、我が習ふ所の上古の俗教は、眼前都て利禰なきをや、一期の後、此の風已に止みなん、眞の福田を仰がんに如かじと、因て三教指歸三巻を作り、近士と成つて、號を無空といふ……

第 五 章 首 途

將來は佛の御弟子となるべく、さしづめは經典を學ぶに定りて、眞魚が専ら學の窓に身を置きたるは、大足太夫が二三年の後を約して、都(山城國長岡)に歸りたる後なりき

田公は眞魚が懷妊せし時の夢想を思ひ、眞魚が生れながらにして、佛菩薩に深き因縁を持ち居れるが如き態あるを思ひ、成人の後には必ず佛門の貴物と爲るべきを豫期しつゝも、尙一面に大足太夫に云はれたる語を棄て難ね、或は學問文章をもて、朝廷に事へ奉る身にならんも知れし、この希望も持ちき、出家沙門の身となりて、一生を衆生濟度に委ぬるも、大博士となり、侍講となりて、公卿雲上人の師傳と仰がるゝも、家の名を揚ぐるは一なり、所詮は己の好む處に由りて進退し、因縁の繋がる處に由りて運命定まらん、將來何れの道に進まんども、杖となる普通の智識無くては協はず、暗を照らす心の光なくては行かれし、それには幼きより素讀を授

けたる孝經論語を研ぎ究めさせ、まづ腹の底に聖賢の教へを刻み付けて、然る後己の心より進路を決めさせる方法を採るには如かじ
田公は此の主意に基きて、眞魚に孝經論語を讀ませ、又た近く唐より渡來せし顔眞卿の柘本を授けて、手習を勵ませぬ、然も眞魚は學問に一を聞いて十を知る才能あり、習字に天來の妙を具へて、大人も舌を捲くほどの字を作ること屢次あり、貴物よ、神童よと云ひ囁す里人の噂、美しき霞となりて讃岐の海を覆ひたりき
斯くて足掛四年の間を、温き家庭の中に送りぬ、姉の千枝姫は萱原氏に嫁ぎ、弟の直魚も大きくなりて、眞魚と共に學問修業に勤めたりき
田公の家は平和なりき、遠き昔の權勢と榮華とは離れて、垣屋の壁も頽れ勝なれど、その頽れたる壁の間に、不斷の春風そよ／＼通ひて、日も夜も、總て長閑なりき

(二)

眞魚が家の學問成りて、年久しく忠實しく奉公したる鹿太夫を供につれ、叔父の

大尼太夫を頼りて、海路を都に出でたるは、延暦七年の春も老ひて、忘れるにも忘れ難き筆の山の頂に、濃き霞、紫を單むる頃なりき
掌の珠とも愛で育しみて、近頃殊に暴風にも當てまじく寵愛せる可憐兒を、遠く都へ手放すなれば、母の玉依姫は身も世もあらぬまでに別れを惜しみて、袂の頭に纏ひ付きしも、一度二度にてはあらざりき
「寒い風に身をな痛めそ、悪い物食べて、腹をな害ねそ、叔父上は在しませど、雲の上の皇子に仕へませば、思ふやうに御手も届くまじ、己の心に己を守りて、ゆめ他をな待みそ」と繰り返し／＼同じ言を云ひ聞けぬ
眞魚は孝心深かりき、玉藻の海の底よりも、父母を思ふ心深かりき、母の心を推量りて、不覺涙に暮れながら、斯くては果てまじく、又たこゝに母を慰むべく、思ひ立ちたる首途を延引することも、それが至き孝行と云ふにはあらず、父母に享けたる身体髮膚を苟にも傷くることなく、學問成り、望み協ひて、名を揚げ、道を行ひ父母の名を揚ぐる時、永遠に、長久に、孝道を全うする事を得ん、今の御嘆きに幾

百千陪する御悦びを見せ參らせ、今の御涙に光明宿りて、まことの珠を聯ぬる如き御満足を捧げ參らす時、やがて今日の不孝を償ふを得ん

「今の間に歸り申さう、寒さ、暑さを厭はせられ、早や船の用意も成きて、水夫揖取口々に、芽出度き首途を祝ひ申す、さらば母上」

取られたる袖を徐に拂へば、おぼろに染めたる絹の袂より、はら／＼と露溢れぬ三五個は母の慈愛、五七個は我身の誠、それが同時に轉び落ちて、簀子上には一團になり、見る／＼中に消に散せて、後に思ひの霧残る、玉依姫は泣くまじと齒を切りて、血の氣もなく青褪めたる唇を慄はせ

「おゝ、さらば……」と只一言

紫の帳、水に臨んで、離情波の寄するが如く漾ひ、朝の嵐、朝日を吹いて、別恨影の伴ふが如く裾に上り来る

兼てより覺悟はしつゝも、いよ／＼の別離となれば、人々皆な腸を断たるゝ思ひして、真魚が門を出づる時、忍びかねてわつと泣く聲、此處の廂、彼處の勾欄の蔭

に聞こぬ

真魚は多くの里人に前後を圍まれて、柳の枝翠を罩むる野の徑を真直に、舟濱へ歩を運びぬ、今日を名残の山の姿、水の態、一際に優れて晴々しう見渡りぬ

(三)

「和子、和子、和子様の」

群り立てる里人の間に、血を嘔く如き聲聞こえて、宙を馳するが如く駈け來りしは四十ほどの女なりき、心は急げど、歩は後れて、兩手を廣げ、聲を絞り、乾きたる目を圓う睜りて、真魚の姿を見詰めたるまゝ走り寄る、里人は氣の毒氣に

「乳母ぢや、乳母ぢや、朝霧ぢや」と口々に云ひ罵りぬ

「媼ぢやわ喃、和子様、媼ぢやわ喃」

云ふ中に近寄りて、今しも舟に乗らんとする真魚の袖に取り縋りぬ

穩かに白き波は、ちろ／＼と岸を管めて、海鷗の飛ぶ翅の下に、雲の影幾重も疊る

「媼、よく参りつる、今日が首途ぢや、これが暫時の別れとある……」

朝霧は、眞魚に乳を参らせたる媼なりき、代々佐伯家の恩徳を蒙りて、その慈悲の下に住む雑人の女、姿形は美はしからねど、心極めて美はしき媼なりき

眞魚が五歳の時暇下されて、今は人妻となり、二人の母となり居れど、眞魚へ對する眞心は舊のまゝ衰へず、月の中五六度づつは尋ね行きて、眞魚の日に成長し、月ごとに修業の功の積まれ行くを、此上あるまじき幸福として、玉の如き膚を擦り、黒漆の如き髪を撫で、血の一滴にも、息の一呼吸にも、清く美しき慈愛を單めて勞はりぬ

設し、身体に障ることありても、眞魚の姿を一目見れば、立ち所に快くなりて、身も心も清々と軽うなるを覺ゆるが常なりき、設し、心に面白からぬ事ありても、眞魚の聲を一言聞かば、立ち所に憂は忘れて、身も心も、晴々と曇りなきを感ずるが例なりき

然もその可憐兒は、今日を首途に、長亭短亭六十里の旅の上る、芽出度き出世の

首途とは思ひつゝも、さし當る悲嘆に身の置き所も無く、心は常暗の境へ引き入れらるゝ如く悲みて、朝よりは姿も出し得ず、御面を見れば息や絶えん、御聲を聞かば胸や潰れん、今日の別離を送り奉るは、身を淵川へ投ぐるも同じ、今日の嘆きを悉く身に占むるは、細布もて吭を締むるに齊し

御別れは致し得じ、御暇乞ひの口上は出し得じ、只平生の如く家に居て、切て目に見ず、切て耳に聞かぬのを、心の控ね綱として忍ばん

斯く思ひ詰めて、沈と持佛堂の前に坐り、一心に念佛してありしが、家の子、近所合壁の者、口々に、別れを告げ、思ひ／＼に名残を惜みて、早や出させつる、早や濱邊へ赴かせつる、御舟には帆も張られつると、云ひ囁し罵るを聞くにつけ「これが暫時の御別れ」と思ふにつけ、一たん抑へ付けた心又た騒ぎて、珠数を片手に爪繰りながら、轉ぶが如く立ち出で見れば、人垣作りたる野邊道の邊に霞棚引く間より、和子の姿のちら／＼見ゆるを、一目見るが否な駈け出して「和子よ、和子よ」と呼び續けながら、飛ぶが如く駈け付けたる乳母の情、潮も甘き程なりき

『早やこれが……これが現世の……』

朝霧は聲も慄ひぬ、聲の出る咽喉も詰りぬ

『海は長閑ぞ、この風は浪花へ通ひて、舟とわれとを恙く送り届けう、浪花の風は都へ通ひて、路次には花も咲いてあらう、好い鳥も啼いてあらう、嘆くには及ばじ、こゝを照らしたまふ日の御光は、やがて都も照らしたまふ、來ん日も、來ん日も、わしと媼と、幾百人の里人と、同じ御光の下に住む、時々は消息せう、長う生きてあれ、いつまでも恙う生きてあれ』

眞魚は斯く云ひつゝ、朝霧の手を撫でぬ

『和子様、そのお身体に錦召して、再び此地へ歸りますまで、媼は生きて居ります、假へ軀は骨になりても、魂は死にませぬ、一日も早う歸らせられ』

『一天四海皆な我住ぢや、何の處に歸り、又た何の處に往かう、軀は幾百里を距つども、心は中有に満ち充つるが故、媼の傍にも在らう、御二柱の御側にも添ひ奉らう、鶯小禽の啼く聲には、わしの心算ると聞き、花にも、月にも、わしの妾宿る』

と見よ、淋しうはあらじ、この海にも、彼の山にも、わしは心を残いて行く』

『さりとて……さりとて……』と朝霧は堪わやらぬやうに呼んで『山や、海やが懐しい時の思ひ遣りともなり申さぬを……況いて花には散る時もおはします』

『さらば此に常住不斷の物がある、これをわしの妾と見、これをわしの心と見よ』眞魚は供人に持たせたる手箱の中より、手づから製りて、西の草原に祀り居たる土佛を取り出で、朝霧の手に渡しぬ

『あな、貴と、斯る御物給はらせうと……』

嬉し涙と共に受くる、土佛に靈や宿れる、掌の肉、びりり／＼慄ひて、眞魚が心眞魚が魂、宛ら糸を繋げる如く、胸の底に響きぬ

『わしと思へ、その御佛をわしと思へ』

眞魚は云ひつゝ、舟へ乗る、ゆら／＼と揺ぐ波、そよ／＼と吹き來る南風、舟は揺げど、見送り來れる里人は動搖を打てど、眞魚は舷頭に立ちて動かざりき、寂然として動かざりき

『あれ、あのお姿、貴物のあの有様、艶かな御髪から、御光が輝き見ゆる、あな
あな、あな』
中には掌を合せて、伏拜むもありき
日は瞳々として、真魚の脊に輝く、田公と直魚とは、小高き丘に駆け上りて、勇
ましく榮ある首途を送りぬ

御 遺 告 其五

名山經猷の處、巖岫孤岸の原、遠然として獨り向ひ、倦留苦行す、或は阿波の大瀧の
嶽に上り修行し、或は土佐の室生門の時に於て寂靜す、心に觀する時、明星口に
入り虚空蔵の光明照り來りて菩薩の威を顯し、佛法の無二を現はす、厥の苦節は則
ち嚴冬の深雪には、藤衣を被て精進の道を顯はし、炎夏の極熱には艱業を斷絶して、
朝暮に懺悔する、こ二十年に及べり……

第 六 章 修 業

(一)

長岡の都、造築新に成りて、大極殿の樽風の上に、初夏の風緑く薫り、八省院の
檐の下に、長き暑影穩かに照り爲く、公卿百官それたゞに殿舎を賜はりて、大歳の
社の森に、君が千代呼ぶ鳩の聲長閑なりき
阿刀宿禰大足太夫の家は、苧畑川(一に乙訓川)の堤に面して、いと莊嚴に作ら
れき、晝夜絶間無き水の音は、忠勤懈り無き主の心に暢ひ、ちよろ／＼と汀を聳
める浪の色は、深山の落花に彩られて、主が靜寂なる行ひに伴ふ、伊豫親王の學士
殿と云へば、半追ふ童も徳に懷きて、門前を過ぐるごとに頭を下げぬはあらざりき
真魚は二十日程前に着きて、叔父が温き袂の下に掩はれぬ、最初の三五日は珍ら
しき新都の見物に忙しかりしが、後には大足の意見に従きて、専ら經學の研究に餘
念なかりき、且つ暇々には、文を作り、字を習ふに、天來の名器、物として容れざ
る無く、文を作れば金玉の章忽ち成り、字を習へば鳳鸞の形自ら調ふ、文には

近唐の餘韻ありて、駢麗華美の文字、巧まざるに出づること、藕の糸の盡きざるが如く、書には顔真卿、王羲之の骨髄備はりて、紫紵變態の妙、手に随つて現はれ來る、例へば真魚の持てる毫の端に、神佛の靈籠りて、自然に思ふ處へ運び至るが如く、流石の大足も舌を卷いて驚くこと頻りなりき

大足は真魚の器の尋常ならぬを見て、前途に望みを屬すること極めて深く、やがては大學に入らすべき下心ありて、日ごとに教訓、日ごとに指導、連城の壁にも比ぶべき明玉に研ぎ上ぐべく、用意おさく／＼怠りなかりき

されど真魚の眞意は彼にありて此にあらざりき、學問文章をもて一世に傑出するよりは、一生に成佛して、恣に衆生濟度の實を擧げんとするにありき、されば外舅の前にありて、熱心に指南を受くる間も、師とすべき高僧の探索を忘れざりき當時は佛教興隆の盛時、高僧善智識、彼方此方に聞こわたるが多くありたれど、進みて大覺の道を聞かんとするには、餘りに街氣多かりき、名のみ高く、譽のみ盛んにして、徳の伴ふ高僧は稀なりき

只一人、真魚の心に「此ならば」と思ひ決めたる大徳あり、南都岩淵寺の住僧勤操僧都それなりき、真魚は人傳に僧都の爲人を聞きて、懐慕の念絶ゆる時なかりきいつかは訪ね行きて、その高風に接し、その教を受けんとは、真魚が獨り心に決めたる願望なりき

(二)

こゝに勤操僧都正の經歷を畧記せん

勤僧は秦氏、大和國高市郡の人なり、その父母子なきを愛へて、駕龍寺の玉像に祈りたるが、或る夜母の懷に明星躍り入ると見て懷妊し、天平勝寶二年出生しぬ(真魚の出生せる寶龜五年より二十四年前)夙く父を喪ひて、母一人の手に成長したるが、幼きより出家の志あり、十二歳、大和大安寺の信靈和上を師と頼みて戒を受け、十六歳潜に南嶽の頂上に登りて坐禪修練の功を積みしが、母の心配深しと聞きて歸り、更に東大寺に入りて三論宗を學び、慧解科を踰わたりき、今にて云ふ學課試験に及第せる如きものならん

かくて神護景雲四年、年二十一、光明天皇の勅に由りて、宮中及び山階寺に一千人の僧侶を得度し、學を以て緇衣を承け、更に大極殿に陞りて、最勝五經を講じたるが、畢りて紫宸殿に諸宗の高僧を集め、各宗義を論議せしめたまひぬ、勤操實にその座首なりき、三論を尊んで君父とし、法相を臣子に譬へ、やがて論じて、無著龍猛の中觀を釋し、護法提婆の百論を注するに、並に歸命闍梨と稱するが故に、理義膽博にして辭句珠玉より清し、と主張し、法相宗の宿老達をして、悉く屈服せしめたるは此の時なりき、朝廷深く御感ありて、僧都に任じ、東大寺を兼管せしめたまひぬ、岩淵寺を創立せしは、此の後なり
されば徳望一世に秀で、寺門の薨自らに香るが如く見ゆき

(三)

眞魚が大足太夫の許可を受けて、三五人の供人引き具し、勤操僧都に參禪すべく長岡の京より、遙々奈良へ來りしは、その年の秋も老ひて、手向山の紅葉の錦、眞魚が美しき心の底に照り榮ゆる時なりき

やがて執次もて、僧都様へ御目通り願ひたき旨を云ひ入れぬ、便宜は携へたる大足の添書なりき

執次の若僧は眞魚の様をつくく見て

「暫く待たせられでは協はぬ、只今法華經の御講釋を爲されてある」と云ひぬ
眞魚は導かれて對面の間に通る、山茶花憐れに咲きて、春日山の翠の色、障子の隙間より座に上り來る

本堂には、多くの僧侶集ひて、一心に僧都の講談を聞き居れるが如し、若僧は次の間に畏りて、眞魚の爲めに、今日の談席の由來を語る、眞魚は好き機に來合せて僧都明心の一片を知ることを得、懷慕の念の彌増しに増し來るを覺わたりき

「聞かせられ、憐れに氣高い事の候ふに……」

若僧はまづ云ひて、法衣の袖をかき合せぬ、眞魚は耳を傾け聴く

「僧都様、まだ大安寺に在らせられた時、隣の房に榮好法師といふがおはした、此の法師、世にも稀なる孝行兒でおはした」

「耳の清々と……好いお物語り聞き申す、孝行人の話聞くほど、嬉しく歡ばしい
ここに在るぬ」

真魚は膝の進むを覺わざりき

「その法師に只一人の母人おはした、寺よりは程遠からぬ處に草舎を設けて、そ
こに母人を住はせ參らせ、日々の奉養懈怠無く、真心の有る限りを盡し申す、され
ど勤行に違無ければ、おのれ母の起居を訪ひ參らす便宜無きに由り、十二はか
りの童子を使ひて、日に三度母の草舎を伺はする、齋を受くる時は、それを四に分
けて、一分を母に參らせ、一分を自ら食ひ、一分を童子に與へ、残る一分を丐兒に
施して、母の老後の福を享けんと希ふ、母の草舎に齋を運ぶは、やがて召使はるゝ
童子の勤めに在り申した」

若僧はこゝまで語りて、急しげに珠數を爪操りぬ、真魚は謹みて聽問す

「されば童子は日ごとに齋を運びては、いそぐと歸り來る、法師は見るより、
何と、母人御機嫌好う喫らせられたか、とまづ問ひかけ、童子が、さればにて候ふ

今日も恙く召し上らせ候ふわ、と答うるを聞く、さて心安や、われもお相伴
仕ると、こゝに始て箸を取りて、微ばかりの齋を參る、然も十年の間一日の如く
聊の懈怠もおはさであつた、僧都様その孝心厚きを見させられ、人の子たる者、皆
が榮好法師の心懸無うては協はじ、友として長く交はるは、彼の法師に外あらじと
仰せて、深き交りを訂したまふた、それは幾年も前の事、また僧都の位を得させた
まはぬ幾年も前の事ござり申した、さるに賓客、果敢無いは人の命でござるよ、さ
しも孝心深かりつる榮好法師に、壽命の幸いと薄く、假初の病心に入りて、遂ひに
空しく逝去り申した、廣い世界に、母一人、子一人、肉身とて他はない、その一
人の母を残して、一人の子は白骨と化り申した、この事母親聞き知らば、いかに悲
み嘆き申さう、いかに浮世を果敢なみて、返らぬ嘆きに沈み申さう、ゆめ告げなせ
そ、忘れても榮好法師の臨終を告げなせそ、只いつまでも生ける如くして、母の心
を安んせよ、十年が間、雨に、風に、懈り無く運びたる如く齋を運びて、一心に介
抱せよ、法師の爲めに、此れほどの冥福はよもあらじ、母の爲めに、此の上の慰藉

はよもあらじ、と僧都様殿に仰せられて、葬送の儀も湿かに、亡骸は寺中に葬り、日ごとく丁寧に冥福を吊はせられた」
云ひかけて若僧は目を屢叩きぬ、當時の儂なさを思ひ浮べて、不覺懷舊の涙に咽ぶなりき

「斯くして母人は……その母人は何んど爲されつるか喃」

真魚は更に膝を進めぬ

「母人は法師の最後を知らであつた、童子は前々に渝り無く、日ごとに齋を運びて行く、八條の市(奈良の京の辰の方位にあたり、市を立て、物品を交易せるを云ふなり、辰の市とも云ふ、今は村の名となる、大安寺の南にあり)に商人の罵る聲来る日も渝らぬ如く、宅布世の御社(今の鉢伏八幡宮)に、春日烽火の焔いつの夜も渝らぬ如く、童子は齋を運んで行つた、母は法師が勤行に遑無く、來り訪ふ事無しと思ひ、童子が運ぶ齋の中に、我兒の真心は籠りあると思ひ、歡び著るを付くること、さて幾年でおはしつらう、此のまゝに過ぎてあらば、僧都様御志

母人の血ともなり、肉ともなりて、長く華舎の月花を見ておはさうもの、御佛御心ありて、現世の縁を絶たせたまひしか、將た法師の靈魂、長く僧都様の御手に、母の面倒見さするを恐れ思ひて、我身の側へ迎へ取りしか、或る夜童子酒に酔ひしれて、法師入寂の事を口走り申した、母は一言斯くと聞くより、さて死後れき、榮好に死に後れき、前つ夜より、月の光り薄きを覺わ、花の散り際身に滲みて憐れを感じたるが、心早くもそれと知りて、我子の後を逐へりしならん、あな、物憂や、あな、悲しや、さりとて僧都様御情を報し奉る時來まじきに……いつまで生きて、方々に手數掛けん、いつまで斯くて惜しからぬ命長らへんど、繰り返し〜かき口説きたるが、悲み遂に胸を鎖して、その夜の中に空しくなる、僧都様本意無く思召せど、命數は是非も無し、切ては後世を安樂にせよとて、亡骸を此の御寺の裏に埋めて、四日二座の談席を設け、法華經八卷を願ちて、各一卷を講じ、母人の爲めに冥福を修したまふ、今日はその満願ぢや、満願の日に來しましたも、宿世の御縁と存じ申す、暫時がほど待たせたまへ、やがて僧都様對面あらう、由も無い長話し

て時の移るを忘れ申した、宥させられ、さらば耶』
若僧は慌て聲に云ひて、本堂へ駈け行きぬ、後に残るは袂をこぼるゝ香の匂ひなり

真魚は活きたる孝經を見聞きする思ひなりき、幾巻の聖經を繙くよりも、圖らず聞きたる榮好法師の孝養と、勤操僧都の真心とに啓發さるゝ所多きを感じぬ
われはこの徳高く情深き僧都の御前に参りて、具に道を聴く幸あり、孝心厚く慈悲饒なる法師の靈魂に觸れて、忽ちに教誨を享くる福あり、今日は如何なる吉祥日ぞ、十五里の道を馬上に踰りて、舊都の僧房に活きたる教へを聞き、更に進みて天下の大徳に見えんとする、入道の大願、やがて達すべき瑞相、偏に諸菩薩御嚮導の賜、有難や、貴や、と一間の中に平伏して、一心に御佛を念じたりき

(四)

勤操僧都は、燃ゆるが如き緋袈裟に、紫色の法衣を着て、徐々と入り來りぬ、時は早や申刻を過ぎて、暮れるに易き秋の日は、照り後れたる楓の繁みより黄昏れて

狭き客殿に淡き暗蔓りたれど、僧都の姿一たび見えて、赫々たる光明宛ら坐に普きが如きを覺わき

僧都は三十餘り、四十には爲らせまじ、光澤なる頬は、紅絹に白玉を包みたるが如く、皓き齒は寒玉を併べたるに似て清かりき、言ふたびに、朱をさしたる如き唇開きて、花の香とも聞かるゝ心の薫、馥郁と溢れ出づ、真魚はその光りに包まれ、その香りに取り巻かれて、端然と相對しぬ。

ふつてりと肥れた肉、何處と無く氣高き姿、かき合せたる袂に法の雲自ら湧き手頭に掛けたる水晶の珠數に、心の月明く輝く、真魚は幼く夢に見たる佛聖人を、眼前に見る心地なりき、兼ての心願透徹して、早くも佛の道に入りたる感ありき
僧都は真魚を一目見たる時より、此の稚兒に聖人の器量備はれりと驚嘆しぬ、阿刀大足は舊くより入魂にせる人、當時天台宗の最澄和上(後の傳教大師)一宗の大徳と敬はれ、朝廷の歸依又た淺からず、比叡山に延曆寺を開かんとて、已に手斧の式も挙げぬ、學深く、徳備はりて、聽慧絶倫、行表法師を師とし従ひて、唯識を

習ひ、諸經論を探り、天台の奥儀を極めて、人の爲めに講座を開けど、常に師なきを憾みとす、されば一宗の尊敬云ふばかりもなく、佛縁に疎き人々すら、最澄和上の名を聞けば、必ずまづ敬意を見する、さほど大徳、都近くに住寺するを訪はず、十六里の路を馬蹄に踏みて、われを南都に訪ひ來れること、前生に縁あればならん大足太夫の添書に對し、此の稚兒の志に對し、行くく徳器を成し與へてはならじ、殊に相貌の優れて異なるをや、眉目清く、品格高く、生れながらにして佛心を得たる如きを見ゆるをや

僧都は斯く思ひつゝ、まづその志を聞き、まづその眞意を叩き、眞魚の返答自然道に協へるを知り、眞魚の志操極めて堅く、如何なる艱難痛苦に遭ふとも、中途に挫折する如き事あるまじきを識り、心の中に歡びながら

「斯くて在せ、當座は寺に泊りて在せ、入道の枝折して進らするに」
僧都の機嫌極めて好かりき、心の友榮好を失ひて、その母の菩提の爲め、法華經の講座を聞き、こゝに首尾好く終りを告げたる時、圖らず名珠の轉び入りたるは、

榮好母子の手引きなるかも知れじ、彼に失ひたる心細さを、此に得させん佛意なるかも知れじ、疎畧にな爲そ、枯野の中に梅檀は芽を吐きつる、やがて茂りて佛法を擁護せん

僧都は寺中の人々にも心注けて、眞魚を丁寧對待しつゝ、大虚空藏並びに能滿虚空藏(求聞持法)を授けたり

此の法は、役小角の孔雀明王の秘法に於けるが如く秘密なり、曾て大安寺の大徳道慈律師が入唐せし時、善無異三藏に逢ひ奉りて幽旨を授かり、我朝に歸り來りて大安寺の善議大徳に傳へ、善議大徳より勤操僧都に傳へたるなれば、系統極めて正しく、法燈つぎ／＼に光りを放ちて、密教の一大事となりたるなり

「若し人此の法に由つて、此の眞言一百万遍を誦すれば、一切教法の文義を暗記することを得ん」と云ふ、これ求聞持の法なり、修行功を積み、持法旨に協はひ身は樹下石上にありて、心は幾千尺の高きに昇り、端座して目を閉ぢて、弘く世界を達觀し得るに至る、密教の妙こゝにあり、密教の極こゝにあり

眞魚は授けられたるまゝを身と心とに行ひぬ、然も期満ちたる時、頭腦の底に一道の輝きありて、何物かを照らすが如く、疑ひの雲ながらに晴れて、虚空遙に諸佛の御影を見得たる心地しき、殊に目の光り一段さどく、耳の動作一入優れて、豁然と修法より覺めたる時、耳に一切を見、目に一切を聽き得るが如く感じき、信念もし上達し得ば、目もあらず、耳もあらず、五官一つに動きて、遠く千里の外をも見深く地の底の音をも聽く、光明世界目前に開くが如く思はれて止まざりき

修行終りて、僧都の前へ出でたる時、僧都はその目の色をつくく見て

「佛法の大根器成らうとする、修行を怠るまい、信心を忘れまい、一心已に通ずれば、佛菩薩汝の爲めに、光明十方界へ御導き下さらうぞ」

頼もしげに語り示しぬ

眞魚は有難さに平伏してありき

(五)

眞魚が石淵寺を辭して、勤操僧都に再度の日を約しつゝ、鞍馬徐かに長岡の都な

る外舅の許へ歸りたるは、その年も暮れんとする十二月の初旬なりき

思ひの外に歸宅の後れたるを、大足は苦き顔もせざりき、學問は一日の後れを厭ふ、三月近くを石淵寺に送りたれば、佛法の大畧を究め得て歸りしならん、年の内に大學の敷居を跨ぎて、規則正しく學問の科を覆めよ、これやがて汝の心を珠に爲べき第一の道なり

大足は待ち難ねたるやうに斯く云ひぬ、眞魚は深く決心の臍を堅め居たれど、われのを珠にせんと宣ふ外舅君の御志を無にすべき道無しと思へると、一生を佛菩薩に捧げて、恣に衆生を濟度せんには、儒家の學問も又究め置かば協ふまじと覺悟せることにて、一議にも及ばず、大學寮に入り、直講味酒淨成博士に就きて毛詩、左傳、尙書を學び、更に岡田博士に就きて、左氏春秋を研究したりき

岡田博士は、讃岐國寒川郡岡田村の出にして、大足太夫とは同國の誼あり、共に文學をもて京に出で、大學寮が奈良の都に在りし時より、外従五位下を賜はり、博士として出仕しき、原の名を佐婆部首牛養と云ひしが、故郷なる岡田村をもて姓と

せんことを奏請し、やがて許されてその姓を賜はりしなり、後に大博士となりて、一代の大儒と立てられき
されば眞魚は學問に於て、味酒岡田兩碩學を得、佛法に於て石淵寺の勤操僧都を得たるなり、日ごとに心を玉と研く

原より一を聽きて十を識る才智他に優れたれば、學問の成績も又た衆に抽んでき數多き大學寮の生徒中にも、學問文章は云ふに及ばず、書にも、繪にも、眞魚の上に出づるはなかりき、眞魚が大學寮に遊びたるは、僅に足掛け四年なりしが、上達速なれば、八年十年の長き間、懸命に修業せし者よりも、深く堂奥を探ることを得き、美事なる成績を修むることを得き、故郷屏風が浦にて贏ち得たる神童の名は、花の都に於ても又た同門の子弟を脚下だにも寄せ付けざりき
文學出身の大足は、眞魚の成績尋常ならぬを見て、佛門に歸依するを最と惜く思へりき、眞魚の器量を以てすれば、後には大博士ともなるを得ん、學問を以て、朝廷に召さるゝ譽れも得ん、田公公御夫婦は、只管に入道の望みを持ちたまへど、

われの思ふ處は異へり、とて、時には眞魚を側近く召し寄せ、佛弟子となる望みを擲て、大博士の名譽を得べく、只管學問に出精せと勸めたりき
眞魚は大學寮に在る中も、勤操僧都の御許に消息を絶たざりき、年の中に一二度づつは、外舅の許可を得て訪ね行くが常なりき、訪ね行きて道を問ふを限り無き樂みとし、慰安としき

御遺告 其六

爰に大師石淵の贈僧正召し率て和泉國横尾の山寺に發向し、此に於て髻髮を剃除して、沙彌の十戒七十二の威儀を授け、名を教海と稱し、後に改めて如空と稱しき、此時佛前に誓願を發して曰く、吾れ佛法に従つて、常に要を求め尋ねるに、三乘五乘十二部經心に疑ひあつて、未だ以て決を爲さず、唯願くは三世十方の諸佛、我に不二を示したまへん.....

第七章 聾 瞽 指 歸

(一)

眞魚をして長く儒門の人たらしめんとの希望は、大足一人が持てるにはあらで、眞魚の師たる大學寮の博士達は、悉く同じ様の意志を持って行き、されば機會のあることに、眞魚を呼びて

「御邊は將來佛門に身を投じて、出世間の人たる望みありといふ、佛弟子も悪くはあるまじ、衆生濟度も善き事には相違なし、されど聖賢の道を究めて、大博士となるには如かじ、學問を利鎌として、道を拓き行く事が、いかに世道人心を裨益すべきか、佛門には自らその人あり、御邊の祖先は武をもて立ちて、遂に讃岐一國を領知したれば、御邊は文をもて志を立て、先祖の御名をも擧げたまへ、只管聖經を學びたまへ」と忠告する者極めて多かりき

又た中には、眞魚の志佛門にあるを知りて「御邊の望み道に違ふことなきか、われ之を聞く、天地の尤靈、その首たる者は

これ人ぢや、人の勝れた行ひは、維孝ぢや、維忠ぢや、その餘の行狀千差萬別なれど、要はこの二を出でじ、されば生きて遺体を毀けず、危きを見て命を授け、名を擧げて先を顯はす、此の一を怠るも不可とある、又た一生の娛樂は惟富、惟貴ぢや百年の友も、誰か妻子に比せん、今御邊親もあり、君もあり、何爲ぞ養はざる、仕へざる、早く心を改めて速かに忠孝に就き候へ」と説き勸むるも多かりき

眞魚が夫等の人々に對して、おのれの志を正當に告ぐべく、將た最後の覺悟を宣示すべく、聾瞽指歸三卷を著述せるは此の時(延暦十年)なりき、聾瞽指歸三卷を著して、大足始め、師なる博士達に志のある處を示したるは此の時なりき眞魚は常に、われの習ふ所の上古の俗典は、眼前にして一期の後の利弼無し、此の風を止めて、眞の福田を仰がんには如かじ、と思ひ決め居たれば、外舅及び博士達が強て學問に身を委ねさせんと説き勸むるに際し、慨然として筆を執りて、その信する處、その思ふ處、その發明する處を述べぬ

聾瞽指歸は眞魚が最初の著述にして、一生の所信を明かにせるものなり、文章極

めて絢爛、字句極めて婉麗、而して考証該博、而して意味深長、殊に文字の巧なること、流石の大足をして後に控若たらしめき

三教指歸は延暦十六年宛月始日再訂して三教指歸と改め題しぬ、その詞に

『朝市の榮花は念々に是を厭ひ、巖頭の烟霞は日夕にこれを願ふ、輕肥流水を見れば、即ち電幻の嘆き忽ち起り、支離懸鶉を見れば、則ち因果の哀み日ごとに深し、目に觸れて我をすゝむ、誰か風を係かん、こゝに一多の親識あり、我を縛るに五常の繩を持ってし、我を斷るに忠孝に乖くといふを以てす、余おもはく、物の情一にあらず、飛沈性異り、この故に聖者の人を驅るに教網三種あり、所謂釋李孔なり淺深隔ありと雖も、並びに皆な聖說なり、若し一の羅に入れなば、何ぞ忠孝に乖かん』

とあり、此の書著述の意味を知るべし

(二)

三教指歸は『鼈毛先生論』『虛亡隱士論』『假名乞兒論』より成る、左にその大要を

摘記せん

或る處に鼈毛先生といふ學者あり、兼て惡意にせる兎角公と呼ぶ大身の館へ赴きたるに、その外甥の蛭牙公子といふが放蕩無賴にして、心は狼の如く、性は虎の如く、禮義に羈がれず、博奕を業とし、色に荒み、酒を嗜み、毫も人間らしき行爲なければ、先生の入來ありしこそ幸なれ、此の放蕩兒の爲めに、一場の訓誨を垂れたまへと依頼しぬ

こゝに於て鼈毛先生は、日頃蓋蓋へ居たる儒學を根底として、親に事うるの孝、君に事うるの忠、友に接するの美しき心、後の榮を計る慶び、身を立つるの本、名を揚ぐるの要を説き聞かせぬ、蛭牙公子はその教へを聞き、始めて前非を後悔して、爾今以後心を專にして習ひ奉らんと誓言しぬ、兎角公も喜悅に堪はず、雀變じて蛤となるの諺を、今日前に見申せり、蛭牙の鳩の心は忽ち化して鷹と作り候と、鼈毛先生を再拜しぬ

折柄そこへ來合せ居たりし虛亡隱士といふ者あり、鼈毛先生の説く所を聞きてか

らくと笑ひ、さてく異な薬の用ひやうかな、もし卿の病を療するが如くならば
 寧ろ全快せぬを喜びとすと云ひぬ、鼈毛先生愕然と驚きて、さらば教へを聞かん、
 乞ふ春雷を秘する莫れと云ひぬ、隠士即ち曰く、赫々たる太陽も、盲瞽には耀り見
 えず、殷々たる霹靂も、聾耳には響き聞こえず、矧んや、太上の秘祿、言ふ所凡人
 の耳に遠し、強て我説を聞かんとならば、血を翫つて盟ひ、骨に鏤めて信を示せ、
 と迫りぬ、一座ますます驚きて、隠士の云ふがまゝに誓約す
 隠士はやがて領きて、老子の教を根本とし、虚無の説を土臺にして、徐に不死の
 神術を授け、長生の秘密を説き、身に臭き塵を離れ、心に貪慾の念を絶ち、目に遠
 きを視ず、耳に久しきを聴かず、口を慎み、舌を謹みて克く孝に、克く信に、且つ
 仁、且つ慈、千金を塵芥の如くに蹶り、王位を脱躡の如くに捨て、美人を視ること
 惡魔の如く、爵祿を見ること腐れたる鼠の如くにし、然る後學に志せば萬事に通
 じて掌を指すに異らず、忽ちにして仙術を得ん、既に仙術を得ば、地の下を徹して
 視、水の上を能く歩まん、鬼神を隷とし、龍驤を騎と爲し、刀を呑み火を呑み、風

を起し雲を起す、何れの願ひか満たざらん、符を呑み氣を餌ふの術、地を縮め体を
 變するの奇、推して之を廣うすれば勝て計ふべからず、もし彼の道に叶はば、下は
 形を改め、髪を改め、壽を延べ、命を延ぶるを得、上は蒼穹に跨つて翺げ、心馬に
 鞭つて八極に馳せ、思ふまゝ天上の樂みを作すことを得ん、懼怕として慾無く、寂
 寞として思ひ無し、天地と與に長く存し、日月と與に久く樂む、吾師の教と汝が説
 く所の言と、汝等が樂む所と、吾類の好む所と、誰かこれ優劣なる、孰れが其れ勝
 負なると、諄々として説きたれば、鼈毛も兎角公も蛇牙公子も、並びに啓いて、始
 めて金石に隔あり、薰蕕比ぶるなきを知り申した、今より後は心を專にして神を
 練り、永く御教へを味はんと誓ひ云ふ
 假名乞兒は佛法の大道たる所以を説くべく、最後に出でたる體形叢爾き人なりき
 鼈毛先生と虚亡隠士の説を駁して、具に釋尊の教へを演ぶ、此の一編、眞魚が眞髓
 を云ひ現はせるにて、筆々活動、文字金玉の聲を作る、滔々數千言、悉く眞魚の大
 抱負なり、要は、儒教道教盛んに忠孝道德を説けど、云ふ所淺薄にして採るに足ら

す、本来忠孝の眞意義は宇宙の眞域に到達したるもの、始めてよく味ひ知るを得べし、面を怡ばせ顔を俛ひ、心に先つて力を竭し、出入に勞り告げ、夏冬に温清して定省色養するを、孝の極みとは云はれじ、上は天文に達し、下は地理を察し、古を稽へて、今に擬し、四海に紀綱として、一人を匡弼し、榮々後々におよび譽れ千歳に流る、此れ果して眞の忠か、と喝破し、小孝は力を用ひ、大孝は置きすと聞きぬ是のゆるに泰白は髪を剃つて永く夷俗に入り、薩陀は衣を脱いで長く虎の食と爲るその爲めに父母は地に倒るゝの痛みを致し、親戚は天に呼ぶの歎きあり、もし儒家道者の云ふが如くならば、此れに優る不孝はあるまじ、然も泰伯は至徳の號を得、薩埵は大覺の尊と稱せられる、苟くも其の道に合はゞ何んぞ近局に拘はらんと説き進む

されば佛教は人生の眞意義を究むるをもて本とす、人生の眞意義を究むるには、富貴權勢の如き世俗の慾望より脱離するにある旨を説き明して、人々に深き感動を與へ、遂に鬘毛と虚口とをして、自今而後、皮を剥ぎて紙と爲し、骨を折りて筆を

造り、血を刺して鉛に代へ、鬪を曝らして研に用ひ、恭々しく大和上の慈海を銘して、戴ち生々の航路に充てん、と誓はしむるに至りき

老壯の道を斥けて神仙の小術とし、孔孟の教を排して、俗論の微風と斷じ、庶幾ば擾々の輩、速に如々宮を仰げといふ、幾年の學問修業に由りて得たる處を基礎として、佛法の意味深遠なるを説く、儒家道者が生命とし日月として唱道する忠孝の二道も佛法に由るにあらずば、その眞意義を得べからずとなす

即ち眞魚は、佛道に分け入りて、兩諦の殊る處に非ざるを悟り、一心に塞融あるを知り、修練修要を積みて、此の動かざる教義の上に、國家を安置せんと發意し、覺悟し、決心して、こゝにその大抱負を發表せるなり

故に「聾瞽指歸」三卷は、眞魚が佛門に入る宣言書なり、儒道を捨て、佛教に身を委ぬべき理由を説示せる天音なり

眞魚は此の書を外舅の家に殘して飄然と都を去りぬ、三蓋の山の麓なる舊蹤を尋ねて、勤操僧都の教を受け、五六歳の頃より發願せる出家の望みを遂げんとするなり

第八章 求聞持法

(一)

眞魚は直に石淵寺に走りて、勤操僧都の近士となりぬ
 近士はやがて優婆塞なり、優婆塞は在家の僧にして、猶居士といふが如し、髪を
 蓄へて五戒を持つ、眞魚を改めて「無空」と呼びたるは、此の時なり
 その年は斯る中に暮れて、明れば延暦十一年、無空は十九の春を迎へぬ、髪こそ
 おろさね、法衣こそ纏はざれ、心はやがて出家にして、一念只三界の縛を脱れん
 と勤めぬ、然も胸中一片の疑團いよ／＼深うして、いよ／＼解けず、鳥は啼いて森
 林の中に入り、花は散りて流水の上に浮ぶ、鳥の啼くや諧々として樂みあるもの、
 如く、花の散るや繽紛として憂を識るものに似たり、そも／＼鳥は啼いて何を求め
 んとし、花は散りて何處に行かんとする、十九年の經歷、回顧すれば茫として夢の
 如く、三年の研學、歸する所、文字の數を識りしに止まる、胸に疑ひの雲満ちては
 涅槃の月求むるに難く、心に六塵を止めては、寶樹千朶の花を見る由無し、口に經

を誦し、法を説くとも、心に寶珠の輝きを見ずば、遂に安敵を得る時なからん
 好し、われ一身を雨露に曝らし、足に險山を超ね、心に大海を踏み、經文以外に
 眞理を求め、談論以外に聲を尋ねて、山又山を踏破せん、すれば嵯峨たる險峰、や
 がて優曇の大阿闍梨たる時あるべく、潺湲たる溪水、やがて出世の最訓を示すこと
 あらん、簀子の上に兀座して、諸佛善神を祈ることも、皮破れねば紅き血出でず、肉
 割けねば白き骨を見る事難し
 山水は是れ我が師、星辰は是れ吾が經、人無き峻嶺の頂に昇りて、東の天に最
 初の月の光りを見ずば、眞に月のさやけさを語ること能はざるべく、長く現欲を離
 れて、心から松風の颯々たるを聴かずば、眞に大千世界の機微を窺ふことあるべか
 らず、口に萱の膏を嘗め、身に温き衣を被て、一心の修要いつか成らん、一念の修
 練いつか遂げ得ん
 名山大澤至る處に吾を待ちてあり、雨露風雪何の時か來らざらん、いで雪の笠を
 戴き、雲の裾を翻へして、絶嶮の山に遊び、嵯峨孤岸の原に行き、只獨り淹留して

命のある限りを苦行せん、而して即身成佛の秘鍵を得ん
無空は斯く覺悟して、勤操僧都の許可を得、手に錫杖を突き、口に佛頂陀羅尼を誦しつゝ、飄然として石淵寺を出で、餘寒まだ去り得らぬ如月半の事なりき

(三)

無空が寺院を出で、山峯深く分け入りしは、彼の求聞持の法を修して、心神を鍊らんとする爲めなりき、堪む難き寒雪の間に坐し、忍び難き極暑の峯に立ちて、おのれの体力と、忍耐力とを試し且つ養はんとする爲めなりき、即ちまづ大和大峰山金峰に登る

大峰山は一代の偉人、役小角の力を持つてすら、頂上に足跡を著くるを困難とせし峻嶺なるを、無空はさのみ苦痛を見ることなくして、絶頂に攀ち上りぬ、四天王先に立ちて嚮導あらせしかと嬉しかりき

風は東より吹けど、崔嵬たる積雪、千丈の玻璃の如く結び凍りて、寒威宛ら骨に徹し、天風森々と吹き荒みて、孤巖の上に獨り坐せる無空の体軀を谷間に投げんと

す、夜は満天の星溢れ落ちて、葛の衣に露氷り、朝は一山の樹木雲を吐きて、亂れたる鬢髮に鬼氣を引く、されど無空は寂然として行ひ澄ましぬ、千萬朶の雲態に簇り來りて、時に無空を襲むことあれど、心眼明に煌々と輝きて、修法の一息を懈ることあらざりき

斯くて法を修すること三十五日、多少は得る處ありてか、欣然として山を下りぬ山靈別れを惜むが如く、麓には春風渡りて、洞川あたりに櫻の咲くが仄見ぬぬ

此の邊の峰々山々を跋涉して、長きは一七日、短きは三五日、木芽を摘み、木實を拾ひて、僅に飢を凌ぎつゝ法を修すること式の如く、行きく紀州の山々を經廻り、更に海を超えて阿波に入りぬ、音に聞く大瀧嶽に登りて、更に深く修行せん心なりき

無空は此の時、高野の山の勝地を過ぎて、此の山必ず佛縁あらんと感せしよし一書に見ぬぬ、或は然ることもありしならん、こゝに記して疑ひを存じ置く

(三)

阿波國那賀郡大瀧嶽は加茂和食二村に跨がりて、巍然たる山容孤り青空の上に聳ゆ、翠の樹雨に映じては、哀猿の叫ぶ聲遠くに青く、藤の棧橋雲を出でては、怪禽の啼く音、おぼろに白く、峭壁路絶えて、溪水静かに通じ、懸崖日落ちて、凄氣忽ち山を掩ふ、蒼鬱たる密樹は千年の昔を天風の中に嘯き、磊落たる巉巖は未知の秘密を黒雨の間に包む、險しきを冒して進み入らんとするも、荆棘路を遮り、毒蛇落葉に潜れて、血の香の近き來るを待てば、命を全うして出づる者殆んど稀なり

されば古來足跡到らず、雲烟世と隔たりて、翠黛畫屏悉く禽獸の占むるに任せぬ、然も無空は滿身の勇を鼓して、徐かに草を分けて行く、丈よりも高き熊笹に露溢れて、衣の袖濡れそぼと、天地秘密の鍵を得て、自心の瑜伽に坐せんとする熱望は、胸の底に火と燃わて、一步ごとに乾き去る、亂格子の如く立ち列ねたる密樹は、さながら行頭を防ぐに似たれど、心に正等覺を見て、諸人教化の主意を貫かんとする大願は、諸佛善神の授けたまふ斧となりて、自然に間を開きたりき

即ち無空は人間の身に堪わ得まじき艱苦を凌ぎ得て、漸く南捨心を過ぎ、更に辛

うじて北捨心に登る、振り返れば暮の雲漢々として梯を作り、殘の霞霞として崖を攀づ、何れの處に路やある、何れの處にか足を投れたる

必竟これ肉身をもて攀ぢたるにあらず、一心をもて登り來れるなり、脚にて登りたるにあらず、精氣にて辿り來れるなり、されば石の筈にも比ぶべき絶壁を經來りて、さのみの疲勞無し、日は落ちんとして落ちず、山上の冷氣秋の如く身に迫りて、涼風そよよと鬢を吹く、今一息すれば須彌山（一に彌山）に至り得べし、いで、彼の險山を踏み試みて、修行に便利なる席を探らん

無空は斯く覺悟して、更に南に足を轉へぬ、古木密集して目前に玉立するは、云ふまでもなく彌山なり

突き鳴らす錫杖の音木魂に響きて、足下に暗深けれど、夕陽頭の上を照らせば、鳥すら通ふまじき山路なれど安々と歩み行かる、山上へ着きて見れば、音に聞きし四の窟ありて、天然の工、前に開きぬ、無空はそこに流る、溪水に咽喉を濕しつ、まづ龍が窟に入る

入口は一丈餘りあるべし、十足ほど進み行けば、前に鏡の如き潭ありて、清き波太古の色を疊む、右へ折れて更に進み、天窗の如き岩穴より、一道の明りさし入るに透し見れば、左右の石に龍の鱗を彫りたるが如き紋浮きて、一種凄愴の氣、自ら人を襲ふを覺ゆ

次を不動の窟といふ、廣さ一丈あまりあらん、地を匍ふにあらすば入ること能はず、不動明王の尊像を安置するが如き奇石ありて、この上に鐘乳岩氷柱の如く垂れ下る、その次を鐘の窟といひ、その次を正知の窟といふ、鐘の窟は、鐘の形したる奇岩倒懸るが如くあり、叩く時は鏘々と鳴る、正知の窟は入口狭くして内に廣く、優に數十人を容るべし

四の窟に四の趣きあり、將た四の因縁あるが如し、無空が頂上を踏破し得たる時日は名残りなく暮れて、金碧の空に砂子したるが如く幾萬の星輝き渡る、頭を回らせば滿山皆な黒く、簷に立つ樹々の容、宛ら巨人の立てるが如し、風死し、雲絶えて、天地寂寞たり、無空はやがて頂上に座を占め、法に依りて眞言を誦し初めぬ

(四)

斯くて朝雲暮雨の間に身を置き、一身に虚空藏菩薩の法を修すること幾日なりけん、東の天白み渡りて、山禽啼を出づる時、夜の僅かに明けたるを思ひ、西の天に茜さして、千仞の谷間に暗深く蔓り、怪禽虚空を翔ける時、日の漸く暮れたるを想ふ、目を閉ぢて法を修すれば、紅花青苔も腫に入らず、心を空うして菩薩の威儀に住へば、雨も風も身に覺えず、思ふまゝに行ひ澄まして、心の大涅槃を證せんと努めき

口に穀漿を絶ちて、木實木芽を食とすれば、頬の肉も瘦せ落ち、唇の色も褪せしが、心のみは健かに、念珠爪繰る指の頭に力満ちて、刹那に覺者の境に至らんとする一念に弛みなかりき

斯くて炎天には烈々たる太陽の光を浴びるが故、肉は焦げて金色の光り、骨立ちたる額に見え、深夜には蕭條たる露の雫を享くるが故、髪は縮れて一筋ごとに信念の堅きを示す、或る夜、虚空藏の法を修して、八千遍に至りし時、閉ぢたる目の底

に陸離たる光明閃めきて、天風高きより落し來る、無空は思はずも目を開きて前を見たるに、一口の寶劍、稻妻の如く飛び來りて、不思議にも菩薩の靈應を現じたりき、無空はあなやと驚きて、見詰め居たるに、寶劍やがて不動の窟の前に落ちて、満山の靈氣一時に動くよと見る間もなく、一輪の皓月、東の天より出て、寥々たる天地の内、忽ち黄金の精を布きぬ
此の時の無空の境、嗚呼此の時の無空の感

(五)

阿波大瀧が嶽に苦行して、菩薩の靈應を感じたる無空は、更に修鍊の地を求めて土佐國安藝郡室戸の崎に出で、こゝに形ばかりの庵を結びて、求聞持の法を修しき
室戸の崎は一に最御崎といふ、西蹠趾岬に對して、巖頭高きこと四百尺、南海第一の絶所と稱せらる、渺茫たる大海、天と共に碧く、天と共に連りて極まる處無く白雲常に青松の上にかゝりて、天と共に久しく、天と共に長し、日上つては唐紅の波の中に翠の峰を浮べ、潮去つては眞白なる濤の間に青き沙を捲き去る、澎湃と

して岸を撲つ海水は、忽ち碎けて忽ちに合し、浙瀝として樹末を吹く松風は、忽ち去つて又た忽ち來る、日落ちて月出で、潮去つて岩現はる、曉には曉の態あり、夕には夕の姿あり、一日の變化際涯無く、一夜の變轉極りなれど、觀じ來れば、朝の雲は夕の雲、今日の潮は昨日の潮、昇りては雨となり、落ちては水となり、迷ひては雲となり、止まりては霧となる、天地は昨日を今日に繰り、今日を明日に返すのみ、潮の音は躁がしけれど、巖石は屹として揺かず、風の聲は高けれど、松の根は蠕まりて動かす、人は生れて死し、死して又た生る、人と潮と異なることなきか人と風と違ふ所なきか
人には苦艱あり、凡惱あり、快樂あり、聖志あり、物に觸れて感じ、事に當つて動く、宛ら海上の風光刻々に變り行くが如くなれど、天地のある限り、同じ態を繰り返すに止まりて、未だ大海の一時に涸れ盡すことあるを聞かず、人の上にも苦樂次々に現はれて、運命見る間に異り行けど、生命の續く限り、同じ思ひを重ね行くに止まる

海波は遂に何となるべき、人は遂に何んの處にか歸着すべき、谷響きを惜まねど
われの爲めに最後の斷案を與へず、明月頭に輝けど、われの爲めに疑惑を照らすに
力無し

只修要のみ、只時間のみ、一念高く天地に冥合する時、疑團立ち所に晴れ、心神
始めて安きを得ん、天は高く、地は低し、われの心いかでかよく至らん、雲來りて
裏まば裏め、雨來りて撃たば撃て、雷霆頭の上に落ちて、跪坐せる巖頭微塵に碎く
ども、悉地を得るにあらすんば、われは動かじ、疑團を解くにあらすんば我れは去
らじ

法性の室戸と聞けどわれ住めば

有爲のなみかせたぬ日ぞなき

或る時は斯く詠じて、一心に修法勤念す

然も夜に入りては怪異多かりき、秋も早や暮れ近く、月遅く夜暗くして、満天の
風露星の光りを受けて輝き、海波徒に躍りて、黒き波行法の下に群る、無空は不圖

默念の目を開きたるに、海底より異様の光り物現はれて、怪き焔物凄く現はれ來る
日々夜々見馴れたる海の上に、斯る不思議の現はるゝこそ不審しけれ、そも何の示
現なるべきを、心を鎮め、息を屏めて見入る間、指頭に繰る水晶の珠數々鳴りて
心の底に響くが如く、神氣殊に澄み渡りて、千尋の海底をも見抜き得べき心を感じぬ
有難く、嬉しく、口に眞言を讀誦しながら、怪しき光り物を睨み居たるに、稍暫
くして、暗の中に金鱗銀鱗きら／＼閃めき、逆巻く波山の如く高く上る中に、恐ろ
き毒龍 朱を流したる如き口より、焔々と炎を吐きて、見る／＼彼方へ進み來る、
二個の眼は明星の如く輝き、左右の足に濤を分けて走る、その勢ひのすさまじさ
は、巖と共に、無空を一呑にせんずる氣配なりき

されど無空は驕がざりき、端然と坐を占めたるまゝ、毒龍の姿を見極めんぞす
波の上の彼方此方に、黒き物、淡黒き物、白き物、青き物、小さき物、大きな
物、獸の如き物、人の如き物、數限りもなく現はれて、毒龍を中央に、柄物々々を
携へて、宙に浮ぶが如く、浪に漂ふが如く、うよ／＼と進み來る、無空は沈と見澄

して、口に呪語を唱へつゝ、穢はしき物を目の下に見たる如く、べつくと唾を吐
けば、その唾忽ち金色の露となり、金色の珠となり、衆の星四方に亂れ輝くが如
く、毒龍と異類異形の上に向つて、燦然と散りかゝる、その清く明く神々しき光
りに射られて、毒龍さつと海底に沈み入ると共に、異形の者又た姿を消して、海波
長閑に、潮白く寄せ来り又寄せ去り、遠き彼方に漁火の影五つ三つ、波の間に見
隠れす

斯る事屢次あり、惡魔外道無空の行法を妨げんとするにてありき
斯くてある事六十餘日、ある夜、物ありて胸を打つ如き響きを感じ、不圖眼を開
きたるに、半明けんとして未だ明けず、曉の色低く前の岸に迷ひぬ、無空は何氣無
く高く大天を仰ぎたるに、暉々として白く凄くきらめき居たる明星、忽ち飛んで口
中に躍り入りぬ、同時に胸の底清々しう、一身宛ら虚空藏の光明に包まるゝが如
く、吐く息に光輝ありて、自ら大千世界の萬象を照らし得るを感じぬ
これ豈に菩薩の威を現はしたまひしにあらずや、これ豈に佛法の不二を示し給ひ

しにあらずや、勤行漸く進みて、本尊の威儀に至らんとし、自心の瑜伽を觀せん
とす

『あな、貴ごや、あな、嬉しや、天地不思議の象、漸く將に晴れんとぞする』
無空は我が心、我が胸の、急に廣くなり行きたる思ひしたりき、天と共に廣く
天と共に際涯無く觀じ居たる大海原も、今の我心を以てすれば、忽ちにして覆ひ盡
さるべきかと思はるゝ程なりき
幾多の修鍊、修要に由りて、無空は悉地の端に手を掛けたるなり、暗き中に明く
美しき光輝を認め得たるなり

御 遺 告 其七

一心に祈念するに、夢に人有りて告げて曰く、此に於て經あり、名字は大毗盧遮那經と
云ふ、是れ乃が要むる所なりと、即ち隨喜して件の經王を尋ね得たり……

第九章 信念の光

(一)

室戸の崎の修行は、明星口に躍り入つて、こゝに虚空藏菩薩の威を現したるを
終りとし、去つて四國全部の山川を跋渉し、至る處に求聞持の法を修しつゝ、更に
錫を山陽道に飛ばし、安藝吉備の國々を巡歴して、播磨國飾磨郡より伊和の郷あた
りへさし掛りしは、冬も早や半を過ぎて、書寫山をろし肌寒き霜月の末なりき

「此の家の主に物申す、これは行き暮れた旅の者ぢや、一夜の宿を恵みたまへ」
無空は只ある草舎の軒に立ちて案内しぬ、日は落ちて、夕暎頽れたる垣に深く、
小き山茶花、三つ五つ夕陽の影を止めぬ

「入らせたまへ、供養申さう」

裡面より斯く答へたるは、五十餘りの老嫗なりき、忠實しかるべき心が、皺の寄
りたる目眦に籠りて見ゆ

「御雑作申す、さらば恕さしめ」

無空は綿鞋の紐を解きつゝ床を上る、圍爐裡に焼きたる疎朶燃に残りて、老嫗の
温き心、破れたる簀子の上に溢れて見ゆ

奥の間には、佛壇を祀りて、そこに燈明を點しありき、新らしき菓物と、清き香
を供へて、大日如來の御影を掲げありき、無空はまづ讀經十遍す

「よくぞ來しましたき、よくぞく來しましたき、嫗は御方の來らせたまふを、心が
らお待ち申してあつた、まづ此を受けさせたまへ」

老嫗は斯く云ひながら、大きな鐵鉢に白く温き飯を盛りて持ち出でぬ、無空
は、見も知らぬ嫗が、われの來るを待ち居たりと云ふを聞き、又た世にも珍らしき
鐵鉢に飯を盛りて供養せんとするを見、疑念晴れやらす膝を前めて

「さて心を得ぬ、老嫗は如何なる素性持ちてやおはす、我等絶わて見知りたる事
も無きに……」と問ひぬ

「御不審もおはしますさう、なれどこれは宿世深き御縁持つ身とござり申すに、ま
づ嫗の申すを聞かせ」

老媪は云ひながら無空の顔を沈と見詰めぬ、無空は珠敷を爪繰りてあり
「媪は行然と申す僧を良人に持ちておはしましたぞ、彼の行基菩薩の御弟子であつた……」

「行然法師がな、御佛の道に入りし身が、和御寮を妻に持ちてありしな」

「まだ出家せぬ時の妻でござります、法師俗体にてありし時、媪に伴れ添ひあつたでござります」と媪は詞強く云ひ切りて「數うれば早や十年の昔となり申した、寂滅の期を自ら覺つて、媪を枕邊近く招き、これ此の鐵鉢をさし示して、媪よ、聞け、この鐵鉢は、婆羅門僧正天竺より齎せられたものぢや、僧正から我師行基菩薩に傳へられたを、我師より授かりて一生の間雲水の旅に伴ふたれど、今は現世の縁盡きて、冥途の旅へ立ち上る、然も鐵鉢は後に残りて、菩薩の御徳を容れあらん、われ死して十年、霜月も盡きんとする末の三日に、如斯々々の菩薩來して、和御寮の家に宿を求めたまふことあらんに、その時、この鉢を出し參らせよ、我師の御徳を傳へたまふは、その菩薩の外おはしませじ、ゆめ忘れなせと、繰り返しく云

ひ置いて、永い眠りに入り申した、十年は夢の間、忽ちの間に過ぎ來つて、霜月下の三日となる、法師の遺言違はずば、貴き菩薩來しまさう、今日は必ず示現あらうと、天の明けるから待ち難ねてござります、いざ、鐵鉢をお受けなされませ、法師の心と、行基様の御光との添つて居る鐵鉢をお受けなされませ」

老媪は懐しき昨日を思ひ出す如くにして語りぬ、無空は不思議の因縁を感じながら、白き飯を玉と盛りたる鐵鉢を押戴いて

「菩薩傳來の寶、法師遺愛の寶、有り難く受け申す」

老媪は深く満足して、有りし世の昔を語り、白粥、乾蕨、心の限り待遇して、夜の更くるも知らざりき

無空は翌る朝當家を發足せんとする時、老媪の志に報はんとして、家の柱に「天地合」の三字を大書しぬ、筆力蒼勁、宛ら鑿もて削りたるが如く、屢次削るも墨痕滅せず、時氣瘴病に胃されたる者、この文字に水を注ぎて服めば、忽ち本復すと云ひ傳へて、諸人の歸服大方ならざりき

「媼よ、さらばよ、いつまでも健固であれ、法師の志、受けて參るぞ」
彼の鐵鉢を恭しく受けて、飄然と東に去りぬ
此の鐵鉢については數多の傳説あれど悉く記さず、口繪に寫真せるがやがて夫
なり、國寶として高野山御影堂に藏せらる

(二)

無空は行きくつて、伊豆國桂谷の修禪寺に杖を曳きぬ、桂谷は伊豆半島西北の高
峰たる達磨山の東麓にありて、狩野川の清流、この右を繞る、果隣和上修鍊の名蹟
として、當時無双の靈地と稱せられき
無空がこゝに始めて温泉を開きたるは此の時なり、里人は無空の凡人ならぬを見
て、心より待遇ぬ、或る日、無空は達磨山の頂、番太郎の險を探りて、例の如く心
を鍊りつゝ下山したるに、五六人の村人、土よりも蒼き顔して、只ある森の樹蔭に
平伏し

「お恕しなされませ、二度と御不禮は致しませぬ、命ばかりは、どうぞくお助

け下さりませ」と聲を限りに叫び居たりき

無空は心得難く側へ寄りて

「やよ、何を左様に泣き悲むぞ、お身達の前には、古りつる樹木立ち居るばかり
で誰も居ぬ、氣を付け〜」と呼び覺す如くにしぬ

里人の一人は恐るゝ顔を擡げて

「旅のお方、温泉をお開きなされた旅のお方、何も御存じござりませぬ、狗寶様
お通りぢや、御不禮してはなりません、これでお詫びなされませ、狗寶様は魔性、
虚空から太い手をぬつと出いて、襟笥掴み、木の股へお掛けなされます、恐や〜
思ふても戰慄する」

云ふが否な大地に額を擦り付けて

「命ばかりはお助けなされませ、お願ひでござります」

無空はその様憐れに、同情の念火と燃わて

「可し、さらば、村人衆の爲めに、魔性を退け進じ申さう、誰そ、修善寺方丈に

筆借りて参られうぞ』

底力のある聲、直然と立ちたる態度、宛ら大地より生れたる如き姿

村人は温泉の開創に由り、見るから凡下の人ならぬ品格備はるに由り、無空が普通の旅人ならぬ事は夙く知りぬ、月の中に二三度づゝは、必ず魔性の通行に會ひて村の者悉く生きたる心地も無きまでに怯む恐れる事が、此の凡人なるまじき旅の修行者の力に由りて、立ち所に除き去らるゝを得ば、これに越したる歡びなからん、地の底に清き靈泉の湧出するを見決めたまひたる功力をもて、空に住む恐ろしき魔性の者を退治さるれば、土肥、狩野、桂谷村々の住民、死地に生を得たる歡びなり、早の田に水を得たる満足なり

『さらばお寺で、お筆借りて参らうぞ、魔性の者を退治するは、太刀、鉾、弓矢などこそ入用と存せしに、お筆ばかりを御所望と仰せられる、それが早や普通で無い飽くまで無空を信じ居れる村人は、宙を飛んで修善寺へ駈け行きぬ、而して暫時の後に、太く美事なる筆を借りもて来りぬ。』

無空はその筆を受け取りて

『大儀ござつた、而て魔性の者、何れから参り申すな』

『達磨山の頂、番太郎に住んで在らせられます、白衣を召した御老人、自由に虚空をお飛びなされます』

急に詞を改めて、魔性を尊み敬ひ云ひぬ

『達磨山の頂に、七日の間閉ぢ籠つて、今下つて来た處ぢや、魔性などは見であつた、されど、皆が目に見、心に恐れを抱くと云へば、この筆で退治して置かう、それにて見やれ』

無空は斯く云ひながら、一心に佛を念じて、大盤若魔事品を虚空に書きぬ、と見る間に、文字一々虚空に現はれて、六書八体點畫亂れず、燦然と光りを放ちて、達磨山の絶頂に飛び去りぬ、人々は目前に此の不思議を見て、開いた口も塞がらず

『有難や、有難や』と云ふまゝに伏拜みぬ

無空は笑を含みて、金色の光り羞明く、星の流るゝ如くに飛び去る文字の行方を

見つゝ

『魔性の者は退散した、此の地長く平和あらう、此地長く繁昌あらう、皆が家業を興みてあらうぞ、皆が天恩佛恩を忘れまいぞ、わしの書いた文字が光つたで無い民百姓を憐れませたまふ大御心の御光ちや、衆生濟度の御本願を立てさせられた御佛の御光ちや』

『有難うござります、辱うござります』

まことに無空の信念光り輝きて、魔性に惱まざるゝ里人の夢を長へに覺ませるなりき

御 遺 告 其八

大日本國高市郡久米の道場（註）の東塔の下にあり、此に於て一部紙を解いて普く覽るに、衆情滯りありて障問する所無し、更に發心を作して、去る延暦二十三年五月十二日を以て入唐す.....

第十章 剃 髮

(一)

近畿より四國中國關東諸州を巡歴して、名山絶巖の處、嵯峨孤岸の原、遠然として淹留苦行せる一年有餘の間は、實に骨と肉とが離るゝほどの艱難なりき、雪深く降り頻りて、寒き風肌を疋す如き冬の夜も、身には藤の衣を着て、偏に精進道を現はし、炎暑熾くが如く、烈日金を熔かす如き夏の日も、口には穀類を絶ちて、朝暮に懺悔を怠らず、偏へに自心の瑜伽を得んと志しき、もし勤操僧都の使者に會はずば、無空は更に東して、奥羽の邊境までを跋渉したらん

僧都は、兼て捧げ置きたる無空出家の願ひ、漸く允許せらるべき時機の到來を知りたれば、無空を途中より召し還すべく、立て置きたる使者、修善寺修行の折柄に邂逅ひて、具に僧都の口上を傳へたり、無空は歡びと懐しさに堪はず、直ちに錫を返して、石淵寺へ走せ歸りぬ、これ延暦十二年、無空二十の歳なりき

僧都は無空の姿勢を見、無空應接の態度を見、心の修業略成りしを知りて、歡ぶ

こと大方ならざりき、此の珠璣かば、必ず光り出づべしと信じつゝも、清き美はしき光輝の燦然として目を射るにあらずば心落着かず、無空必ず大徳となりて、天が下に名を揚ぐべき聖量ありと見究め居つゝも、今日の姿を目前に見るまでは、多少の苦勞無きにあらずりき

一年有餘の難行苦行が、いかに無空を珠にせしか、僧都は一目見て、修行の功の偉大なるを感じ得き、手を取るばかりに歡び迎へて

『よくぞ、骨が砕けであつた、血が涸れであつた、願望空しからず、出家の願ひ聽された、修業修要の功も積みしと見ゆる、剃髮の道場として、和泉國和泉郡檳尾山を定め置いた、檳尾山は四岳八峯、峰又た峰と重なりて、その狀蓮の花の如く見ゆる、施福寺は行基菩薩の開基、古今の靈跡、剃髮の道場として、此の上もなき處ぢや、いざ、行け、我も同道せう』

(二)

まことに慈父の子に對する如き愛なりき

斯くて無空は檳尾山に上りて、恙く鬘髮を剃り除き、沙彌の十戒、七十二威儀を受けて、無空を教海と改め、更に如空と稱し、いよく心を發して苦節苦行を勵みたりき

その年も、翌年も、修行修要の中に暮れぬ、延暦十四年四月九日、嫩草山に青草萌わて、山脚躑躅處々に色好く咲く時、名を空海と改めて、東大寺戒壇院に具足戒を受くべく定めぬ

沙彌の戒壇に上りて沙門となるは、佛教には嚴なる儀式をもて行はるゝ大事なり勤操僧都は如空の勤念日夜に怠りなく、一意向上の路に進むを見、元興寺の泰信律師に周旋して、こゝに戒を授けらるゝに至りしなりき

即ち泰信律師を傳戒の和上に、東大寺の安禎律師、同じき貞良律師、同じき藥上律師、西大寺の勝傳律師、同じき平福律師、興福寺の信命律師、同じき靈忠律師、招提寺の安琳律師を尊証に、東大寺の安暨律師を羯磨に、招提寺の豊安律師を教授に奉請して、戒牒文を上りき

法式の壯嚴なる何んに譬へんやうも無し、此の儀恙く行ひ終りて、空海は沙門となりぬ、押しも押されぬ一人前の沙門となりぬ

一たび戒壇に上りてよりは、鍊行學業會て一日の懈怠も無かりき、或る時は高山に上りて、求聞持の法を修し、又た或る時は勤操僧都の前へ出て、丈を函れ、端を問ふ、されば寢食も安き事無く、専ら龍樹提婆の遺教を精鍊し、兼て毗曇成實の法相を研きたりき、されば空論有宗の幽旨、三諦十玄の妙技、心に隨つて實相を捉へ得べき筈なるに、如空が前より抱けりし一團の疑ひは研鑽を積むにつけて深くなり行く、世界はこれ屢樓幻化の行宮か、そもく又た鵝王眞實の實例なるか

究めざるべからず、問はざるべからず、然らざれば何んの處にか即身成佛の妙境に到達し得べき

空海は年々その事を願はぬ日ぞ無き、然も教義の疑團晴れやらぬ間に年暮れて、翌れば延暦十五年、空海は二十三の春を迎へぬ

第十一章 不二の法門

(一)

法燈光り明くして、胡摩燒く烟暗く佛龕の中に迷ふ、九天人間の夢未だ覺めず、三世石上の魂轉た冷かなり、空海は去年の春具足戒を受けてより、一心に不二の法門を求めて、東大寺大佛殿の中に籠りぬ、一切の經藏讀み盡さるなく、多數の佛典目を通さる物なれど、尙心に疑ひありて、不二の法門を探るに由無かりき人に就いて問ふ道無く、書に頼りて究むるに法無し、即ち身を大佛の前に伏して、只管御佛の御心に絶らんとするなり、一向に神通の妙域に至らんことを冀へるなり深く誓願を發して

『われ佛法に従つて、常に要法を尋ね求むるに、三乗、五乘、十二部經、心神に疑ひありて、未だ決すること能はず、唯願はくば、三世十方の諸佛、われに不二を示したまへ』と日夜の差別なく祈り念じぬ

されば肉落ちて身は苦行に瘦せ、眼は凹みて、心は苦惱の中に寢れぬ、然も空海

は貴く有難き示現を蒙るにあらずば、此の座は一寸も動くまじとの覺悟をもて、佛前に冥想しぬ、燈の花散りて音無く、松風の響き佛頂の上に落ちて、寂寞の氣次第に加はる

空海は兎角する間に勞れて、心にもななくうとと夢に入りぬ、此時、白衣の神仙、むら／＼簇る紫の雲に乗りて、枕頭に現はれ

「汝が願望克く滿つる時來る、大毗盧遮那經を繙くに由りて、一切の疑ひ氷と解けん」と宣り示しぬ

空海は喜悅に堪はず、感涙さへ漂はせて

「まだ聞きも及ばぬ、左様の御經、何れにおはしますやらん」と問ひ返しぬ

「善い哉、問や、大毗盧遮那經は汝が要むる處の物なり、大和國高市郡久米の道場の東塔の下にあらん、夙く探り出して疑ひの雲を晴らせよ、ゆめ疑ひなせよ」白衣の神仙は斯く云ひ終りて、搔き消す如く見ゆななりぬ、空海は天にも昇る心地して、尙深く問ひ見んと思ひ付き「やよ、やよ」と呼び絶らんとする、我と我聲

に驚きて、豁然と夢覺むれば、身は大佛の御前に伏して、兩手を合せたるまゝなりき、風露法衣の袖に滴りて、明星清く珠數の上に輝く、正しく靈夢なり、御佛われの願望を容れさせられて、こゝに圖りなく秘密經文の在る處を示させられたるなり

「あな、有難や、あな、辱けなや、然る上は一日も早く久米の道場を尋ねて、覺めての後も歴々と耳に残る大毗盧遮那經を見出し來やう、斯くて久しく解けやらぬ疑團を解いて、佛敎の奥に上らん時、われの願望やがて成就せん

佛恩の深きに報ひ奉る時はそれ、天恩の高きに報ひ奉る時もそれ、いで」

空海は佛前に三拜九拜して、決然と起ち上る、濃き眉に向上の光滿ち、清き眼に進取の輝き溢れて、脚下に簇る夜の烟、神仙の乗り捨てたる雲の名残と思はれて嬉しかりき

(二)

久米寺は當時已に國內の名刹として知られたる伽藍なりき、檀原の久米にあり、

神武天皇の軍將たりし大來目命の邸趾に建立したるが故、久米寺と呼ぶとも云ひ、久米の仙人の遺跡とも云ひ傳へて、何人の開基なるかを知る者無し、畝傍山の若翠金色に茂り、來目川の水の音清涼の響きを絶たず、昔ながらに日は照りて、淡霞大内裏の跡を包めど、禽の音淋しき里は荒れて、堂塔高く春の最中の空に聳わぬ

空海は、長閑に春の日の照り渡る時、錫を曳きてこの寺の門を潜りぬ

「さて、美事な御塔喃、何日の世の建立ぞ、知りあらば知らせたまれ」折柄境内の草を摘み居たる年若き僧の前に立ちて、空海は問ひ試みぬ、若き僧はそこにある捨石に腰掛けて、麗に照る曇影を仰ぎつゝ

「沙門知らせ給はぬか、この寶塔には、面白き由緒在す、むかし中天竺の三藏善無畏、南天鐵塔の半を遷して、こゝに建立あらせられた、稀代の靈場ござり申す」

「東の塔とは此か」

「正しう……」と若き僧は又た答へぬ「三藏善無畏、ひそかに密機の熟生を試み、秘法の行藏を知らんが爲め、遙に大唐を辭して、本朝へ渡らせられ、初めは東

大寺西南の阿に着き、やかて國々を經巡りて、大日經七軸を安置すべき靈場を求めたまふた、然も此の御寺の境、最も御意に愜はせられて、東院の側に廬を結び、こゝに三年七百二十日を修行して、遂に一寶龕を立てさせられた、東塔院がやかて夫ぢや」

「風説に聞きつる、大聖の舊縦を問ひ奉る嬉しさよ、斯くて大聖、いかに終らせたまひしな、苦しからずば、大畧を告げさせられ、有難う聽問せうに……」

空海は錫杖を突きたるまゝ、大海の底に眞珠を探る如き態度にて問ひぬ

「されば、時來らねば名玉も土中を出ぬ、三藏善無畏三ヶ年の説法も、土俗たゞ空有乳蘇の法味を知りて、未だ秘密甘露の妙薬を嘗むることを知らず、誰一人道に入らんとする者なければ、三粒の佛舍利をもて寶石の底に納め、七軸の大日經を寺の柱の下に埋めて、馱都はこれ釋尊の遺身、經王はこれ遮那の全体なり、然れども小國片域、大機未だ熟せず、仍て此法を此地に留めて、將に時を待ち、機を待たんとす、來葉には求法利生の菩薩來りて、此の教を世に恢むることあらん、と記し置

き、舟を浮べて震旦國へ歸らせられた、その後幾十年を過ぎて、求法の菩薩現じたまはず、松風空しく粉碧の壁を吹き、蘿月徒らに欄干の端を照らして、柱も朽ちるべく見ゆ申す、善無畏の誓ひ、いつの時にか果て申さう』
若き僧は語り終りて、悵然と空を仰ぎぬ、空海は徐に聞きて
『いで、佛舍利を拜み參らう、御僧のお蔭にて東塔の由來を知り申した、嬉しうこそ、恕させたまへ』
斯く挨拶して東塔の中へ進み入り、幾度も伏拜みて後、只ある柱を叩き試みたるに、果して異様の響きあり、鏘々として胸に通ずるを感じたりき、空海は飛び上るほど歡びて

『靈夢の御告違ふ處無し、いで此の柱の下を探り見ん』

斯く思ひ決め、住僧に相談して、柱の下を掘り發きたるに、三藏善無畏が埋め置きたるに相異なるべき大日經現はれ出でぬ
然も燦然たる光輝に包まれて、馥郁たる香氣に覆はれて、玉の臺に御佛の在しま

すが如くに置かれて

(三)

空海は、夢想空しからず、大毘盧遮那經を獲て、急ぎ東大寺へ歸りたるが、普通の教文を讀むとは異りて、解し難く、辨へ難き義理多く見たれば、やがて寺の南隅に形ばかりの庵を結びて籠り、朝夕に讀誦してその眞諦を究めんと志しぬ、精力人に超ね、智慧學問群に抽んで、一たん斯うと思ひ立ちし事は、飽くまでも爲し遂げでは止むまじき大勇猛心を持てるなれば、寢食を忘れ、旦暮を分たず、心を潜め、思ひを罩めて、懸命に研究したれど、空海の心と、經文との上に、一むら雲立ち迷ひて、理義に惑ふ點つぎ／＼に出で來る、例へば研ぎても磨きても、眞の光を見ること難き珠玉を抱いて苦悶するが如くなりき、幾度か根盡き精疲れて、巻を覆ふことありたれど、斯くては果てしと思ひ返して、更に最初より讀み初む
斯くて一歳を此の小庵の中に送りぬ、大毘盧遮那經の研究に、三百六十餘日を消しぬ、然も得る處絶わて無かりき、迷惑より迷惑を生みて、疑ひの雲深く胸を鎖しぬ

「雙誓指歸」を訂正して「三教指歸」と改題したるは、此年の暮なりき、身を教疑の中に置きながら、時には思ひを紛らす心にて、舊作を取り出し改訂しつるが、やがて完成しつるなり

明れば延暦十七年、空海は二十五歳となりぬ、僕うれば出家の望み止み難く、外舅大足夫太を頼りて、瓊藻寄る處の嶋を後に、父母同胞の涙、下人雜仕の情、里人の切なる離恨を捨て、浪路遙に都へ出でたるより、早や十歳の年月を過ぎたりき、一身は御佛に捧げて、只管に最初の望みを遂ぐる事に焦思りながら、故郷を戀うる一片の至情、時には西に歸る雲を見て、消魂の念を催さるにあらす、父母同胞を思ふ萬腔の熱情、時には東より吹く風に罩めて、切々の心を傳へんと冀ふこと屢次ありき

されど教文の疑ひは雲の如く前に横はる、その真意義を釋くにあらずば、佛乘の奥を伺ふこと能はざらんと思ふにより、足一步も門を出でず、日夜諸佛に祈念しつゝ、一心に理解を求めき

折から五月上旬、今上天皇御願あらせたまふにより、阿波國司藤原朝臣文山に勅して、大瀧が縁に一字の伽藍を建立させたまふ事ありき

國司は謹んで綸旨を奉じて、當に伽藍を建立しぬ、舍身山大龍寺やがて此なり此の地空海には行法修要の舊蹤、捨身果生の靈地なり、即ち自ら諸佛諸尊の形像數個を彫刻して、山上山下五か所の伽藍に安置しぬ、これやがて弟子多生の宿願に酬ひ、皇帝永代の歸依を致さんが爲めなり

空海の所作所行には、必ず皇帝永代寶祚萬歳の祈念置らぬ事無し、空海本願のある處、空海一心の存する處、推量するに難からず

(四)

大龍寺落慶の後、空海は路を讀岐に取り、屏風が浦の古館を尋ね、老ひたる父母に絶わて久しき對面を遂げたりき、懷妊の當時より、此の子必ず佛生を得るならんとの心は、父の田公にも、母の玉依姬にも在したれど、剃髮入道の報告を得て、僅かに五年を過ぎたる今日、斯程までに智識を備へて、郷に歸り來らんとは思ひ掛け

ざりき

「貴物君が歸らせられた、昔の貴物君が、美々しい沙門になりて歸らせられた」
今は頭に雪を戴く鹿太夫も、夢寐の間にも、育君の事を思ひて、東の空をのみ見詰め居たる乳母の朝霧も、斯くと聞きて駆け集りぬ、幼き時、貴物の遊び友達なりし里の子も、朝な／＼中門の影よりさし覗きて、貴物の氣高き姿を拜むを、一日の吉祥としたる下人原も、宛ら天より鳳凰の下りたるを見んとするが如く駆け来りぬ
空海は夫等の人々に、温く美はしき挨拶して、こゝに久濶の情を叙すること深かりき

此の時、さきに當國阿野郡瀧の宮の別當萱原氏に嫁ぎたる姉の千枝姫は、已に三人の母にてぞありける、總領は智泉と呼びて、空海が幼かりつる頃、近所の人々より、神童と敬ひ貴まれ居たるが如く、年齒に似げなく伶俐しさを持て囃されて、第二の神童と呼ばれ居たるが、母に伴はれて、叔父なる沙門に初見參せんごて来りぬ
千枝姫は弟の眞魚が見違へるほども大さう立派になりて、墨染の衣映り好き沙門と

なりしを、涙含むばかりに歎びて

「よくぞ歸らせつる、御噂は外舅さまのお消息にて承はり、蔭ながら歎びてこそおはせしが」と手を取るばかりに云ひぬ

「姉様も恙がなう、殊には可憐い小供達を、幾人も育てさせつる、此の上の満足はおはし申さぬ、殊に智泉は將來好い器ともなるべう見ゆる、大切に養ひたまへ」
宿世深き縁あればか、空海は智泉のいたいけなる姿を一目見るより、我生の子の如く可憐く思ひ、絶えず側に引き付けて、垂髻を撫で、脊を擦りて、我掌の温みに肉も肥ねよと勞はりぬ、千枝姫は見

「智泉の上にも、奇しき物語りおはします、此の兒の幼名然るべう命付けてありしを、二歳の舌の廻り難ぬる時、自ら智泉と呼びしに因みて、今は皆が智泉々と沙門らしい名を唱へ申す、それさへ例無き不思議おはすに、生れて以來、一目だも見たることなき御身を、都の叔父上と戀ひ慕ひて、物心付き初めし頃より、叔父上は叔父上は、とせがみ聞かぬ日とはおはさぬ、父が戯れ半分、智泉は何とて叔父

上を斯くは慕ふぞ、叔父上に逢ひ奉りて、何とせう心ぞと問ひ見たる時、わしは叔父上の御弟子になりて、出家致しまするといふた、誰に教へられたでも無く、自らに爾う云ふた、行く／＼はお側にも置かせられ、前世から佛縁深き者どこを見申すに」

『訝、さては、汝にも佛生の縁ありつる喃、父様の命けさせられた幼名の他に、自ら智泉を呼びたる喃、出家らしい好い名ぞ、二歳の心に何とて思ひ付きあるべきぞ、諸佛諸菩薩の御暗示なること疑ひ無し、十三にもならば、叔父を尋ねて、奈良の東大寺へ参らうぞ、山城葛野の新京には、外舅宿禰の殿在しませど、都は人氣騒がしければ、修行修鍊の場とはならぬで、奈良へ参れ、三蓋の山の麓にぞ鍛心の道場はありつる』

空海が斯く物語るを、智泉は心の底より嬉しげに聞きて、只管に頷き聞きぬ、生來佛生を得たるならん、生れながら佛音を聴くべき好き耳を持ちたるならん

空海と智泉との法縁は、不用意の間に斯く結ばれぬ、空海がまだ幼く宵々ごとに

奇き夢を見つゝ、朝夙く朝日の御光を伏拜みて、清しき心を深翠に放ちたる椽樟は昔ながらに榮え、日ごとに童堂作りて、土佛を安置したる西の原には、青草滋々と繁りて、名も無き草花錦の如く咲き満ちぬ、然も空海は忘れても忘れ難ねたる故郷より、夜光の名珠を拾ひ得つるなり、將來片腕となりて、總ての事業を幫助すべく密教弘通の宣傳者たるべき名珠を拾ひ得たるなり

最初の捨身の道場たる筆の山にも登り、釋迦堂にも参詣して、秋の季奈良へ歸りぬ、勤操僧都の喜悅斜ならざりき

(五)

空海は大龍寺落慶の報告を果したる後、再び東大寺の小庵に籠りて、久米寺の塔下より現はれたる秘經の神髓を探らんと苦行しぬ、されど遂に効ぞ無き

その年も暮れ、明年も過ぎ、延暦十二年には智泉約の如く讃岐より來りたれば急ぎ師の僧正に紹介せ、此の稚兒の眼を開かせたまふこと、やがて我の心を開かせたまひたる如く爲させたまへ、と頼み置き、その身は又た秘教研究に取り掛りたれ

ど、幾度念じても示現を得ず、幾千遍繰り返しても、衣一重を剝ぐことならで、暗は何處まで進みても續き、疑ひは何處まで探りても晴れざりき、此上は日本の總産神、朝廷の御先祖にて渡らせらるゝ伊勢大神宮の御利益を待たんとて、延暦二十一年、二十九歳の時只一人小庵を出て、伊勢國へ首途ちぬ、朝熊嶽に登りて、虚空藏菩薩の法を修めたるは此の時ならん

朝熊嶽より内宮までは二里餘りなり、御裳川に口を嗽ぎ手を洗ひ、千年の翠神々しき杉の梢を吹きおろす神風に心を清めて、大神宮へ禮拜しぬ、神樂の音心耳に響き、神燈の光肝を射りて、尊く有難き事云ふばかり無し、即ち八羽石太夫が遠祖の家を借りて住み、日々の參籠他意も無く、偏に願望成就を祈り奉る、願望は秘教の解釋にあり、不二の法門に分け入りて、衆生濟度國家鎮護の實を擧げんとするにあり

一夜、拜殿の下に坐りて、夜もすがら祈念を籠むれば、嵐氣翠を撲つて法衣の袖に逼り、杉風露を溢して念珠の上に濺ぐ、時は丑の刻を過ぎて、潺湲たる水の音心

と共に澄み、颯々たる山の響き思ひに伴れて遠く爲り行く、空海は兀坐せるまゝ、眠ることもなく眠りに入る

此の時虚空遙に紫雲靈變きて

「空海々々」と呼ぶ聲したり、思はずも目を開きて見れば、美はしき天女、花の如き顔に笑を含みて、雲の間より鼻々と降り來る、空海は動じたる氣色も無く坐り

「我名を呼びたるは汝か」と問ひ試みぬ

天女は近く寄りて

「われ、辱くも神勅を奉じて、佛法興隆の檀那とならんが爲め來る」と云ふ聲

金盤に玉を轉ばすが如く鮮かなりき

空海は神勅を奉じ來れる旨を聞くに齊しく、両手を大地に支きたりき

「汝の願望、日本に在りて成就する時あるまじ、唐土青龍寺の惠果和尚こそ密教の奥を究めて、汝の渡來を待つこと久しきに、疾く勅許を受け奉れ、時機は早や目前に迫りあるに」

斯く告げ似させ給ひたる御聲、耳の根に深く残りて、夢は空しく覺めたりき
さては伊勢大神宮の御示驗よ、空海の志を憫ませて、渡唐の時節到來を告げ示
したまひしよ、唐土は道遠し、然も教の上よりは比隣なり、青龍寺の惠果和尚の宣
はせた、神々しき御聲、骨と身に刻まれある、尊くも有難き御示しを受けつるもの
かな

びたりと掌を合せて、一心に禮拜す、満身の血は喜悅に湧き立ち、大巖石の中
に籠められたる秘密にても、探り見では止むまじこの勇氣、骨の節々に漲り來る
神も、佛も、在す世なりき、空海は心の限り御禮を申し述べて、翌日直に神地を
去りぬ

御 遺 告 其九

初めて學習せんが爲めなり、天應應勅にして勅を載せて海を渡る、彼の海路の間三千里
あり、先例は揚蘇州に至り買りなし、而るに此度七百里を増して衡州に到り、凝り多し、
此間大使たる越前の國の大守正三位藤原朝臣實能自ら手書を作つて衡州の司に呈す……

第十二章 渡唐の首途

(一)

空海は奈良へ歸ると共に、勤操僧都を訪ひて、日頃の願望、伊勢大神宮の參籠、
有難き御夢想を蒙りて、渡唐の志を決したる旨を述べ

「恐れながら師の御坊より、空海渡唐の志切なる旨、奏聞あらせ給へ」と冀

ひぬ

僧都は空海の心火よりも熱きを感じつゝ、

「よくぞ心を決しつる、叡山の最澄法師は去年渡唐の勅許を得つるよし聞けど、
まだ發足はせまじと思ふ、今年三月、從四位藤原朝臣葛野麻呂卿を遣唐大使に、從
五位石川朝臣道益卿を副使に任じたまひたれば、恐らくそれと同行せんか、最澄法
師は天台の大徳、彼地へ着したる後は、天台山に入りて修行あらんも、汝の學ぶ所
は他にあらん、花月の趣き自然に異り、修業の道程やがて差へば、朝廷の御詮義、
汝の上に幸あらんも知れず、諾し、直に執奏の文を認めんと、快く承諾ひて、直ち

に用意に取り掛りぬ

當時最澄の名望、信用、學徳は、實に一世に超越して、比叡の嶺月高く、朝廷の御覺に愛く、佛教界の第一人と稱へられ居れば、誰一人その右に出んと思ふ者も無く、學問、大徳、信用、名望の巷に馳せて、輪贏を争はんと望む者も無かりしが勤操僧都のみは、最澄の匹儔に空海あり、と堅く信じぬ、空海は入道に一日の短あれど、智慧、學問、修行修練の點に於て、優ることも劣る處無しと信じぬ、最澄渡唐の主意は、日本に於ける台教を究め盡し、日に講演の場に臨めど、師承とすべき人なければ、遠く唐土に渡りて、天台山の奥深く入り、台教の眞意義を求め歸らんと云ふにあり、されど空海の望む處は、更に深く三論の奥儀を究めんとするにあらで、靈夢に感得せし密教の疑義を問ひ、衆情の滯りを解かんとするにあり、彼は有る物を求め、此は有るまじき物を探る、その間の遠近深淺、同じ日をもて語るべからず、最澄の望みは山上にあり、空海の祈願は幾千尋の海底にあり、山上の玉は獲易く、海底の眞珠は獲難し、然も二傑僧、山と海とに別れて進み、深と淺とに分

れて入る、佛教界の偉觀此の上無し、空海幸ひに秘密の底を探り得て歸らば、比叡山獨り高きことあらじ、斯くて毘盧舍那經の意義、日本に根を下して、互に研鑽琢磨せば、二顆の名玉千萬歳の後々まで光り輝かん

勤操は空海をして最澄の上に立たせたりき、一念もし到達せば、必ず克く雄を稱し得んと確信せりき、即ち執奏の文を作る

奏シテ曰ス、右十四年戒壇ニ登ルトコロノ僧空海、諸佛ノ指授ヲ受ケテ温タル所ノ經、大和國久米ノ道場ニ在ツテ、善無異三藏ノ游趾ニ得タリ、彼ノ三藏織シテ曰ク、此地大機未ダ熟セズ、經ヲ止メテ時ヲ待ツ、來世弘法利生ノ菩薩アツテ此ノ經ヲ依ムベシ云々、然ルニ空海、諸佛ノ指授ヲ受ケテ、古聖人ノ織文ニ當ル、今國家此ノ靈ヲ産ム、天下太平ノ豫標乎、伏テ乞フラクハ陛下勅シテ求法ニ擢テ玄珠ヲ異邦ニ攻メシメ、大厚ノ材ヲ致サシメヨ(原漢文)

此の執奏文は治部省を経て、宮闕へさし出されき

然も、勅許の御沙汰未だ下らず、遣唐使出發の報つきくに至りぬ、即ち葛野麻呂道益等の一行は、四月十日參内御暇乞を申し上げたるに、節刀を授けられて、同じき十四日に難波津の頭より船に乗り、十六日進發したるに、暴風激しく吹き頻り猛雨盆を覆すが如く、夜に入りて竭む間も無く、舟は木の葉の如く、高く山かど見る怒濤の中に弄ばれ居たるが、遂に楫を打ち折られて、渡航の道全く絶たれば、五月二十二日空しく都へ還り來りて、先に賜はりたる節刀を上つるなご心に懸る事のみ多かりき

空海が大和國佐原に立ち、辻占の法に由り、渡海求法の願望違ふ所なく遂げ得べきか無きかを、卜ひたるは此の當時なりしならん
その内に年改まりて、延暦二十三年甲申の春は來りぬ、空海は渡唐の願望成就して、一日も早く求法の途につかんとのみ冀へるほどに、三月五日去年命せられたる遣唐使參内、御餞を賜はりたりとの報聞こねぬ、空海は心自らに躍るが如く暁の雲漸く明くなり行く天に、日の出現を待つ心にて、都の御沙汰を待ち居たる

に、四月七日、その頃大安寺に住ひ居たる勤操僧都の許へ、治部省の符到りて、沙門空海同道、參内致すべき旨を沙汰せられぬ

天は麗はしく明けたるなり、日は忽ち空海の上を照らせるなり、喜び勇みて、新京へ同伴す、空海が平安の宮城へ入りたるは、この時を始めなりける

帝(桓武天皇)は内院に出御ありて、勤操に調を賜ひ、空海をも御床下へ召させられて、入唐聽許の勅あり、空海まことに昇天の歡びなりき、謹んで天恩の優渥なるを謝し奉りて、師と共に退り出でぬ

一昨年勅許を蒙りたる最澄法師も、同時に入唐すべしと聞こね、留學生橋逸成も、此度の遣唐使に従ひて、遠く唐土に渡るべしとなりき

正使藤原賀能(葛磨の事)は正三位に陞り、參議左中辨兼越前守なるが上、金紫光祿大夫をも授けられぬ、副使は石川道益、判官は菅原朝臣清公、録事は朝野鹿取なりき、萬事の用意滞り無く調ひたれば、五月十二日難波津より舟に乗り、第一船は大使藤原賀能の乗船にて、空海及び橋逸成同乗すべく、第二船は副使、第三

船は判官の乗船にて、最澄法師同乗すべく、第四船はやがて録事の乗船なりき、時に最澄は四十歳、空海は三十一歳なりき

空海は四月七日大安寺を出でたるのみ、都に止まりて渡海の用意怠りなかりき、智泉は十六歳、師に従つて入唐したき望み頻りなりしが、萬一の時、我志を繼ぐ者は汝の外あるべからず、僧都の許に留まりて、且は海上の安穩を祈念し、且は行法修要して、両親の名を揚ぐることを努めよ、と云ひ聞けぬ、智泉も師の心を克く覺り、強て請ふ處もなく點頭きぬ、されば入室の弟子堅惠侍者として見送りぬ
舟は恙く穩かなる波を分けて、豫定六月の半、豊前の津に着きぬ、内海の航路こゝに終りて、更に外洋に泛び出づべきなり、即ち船を肥前國松浦郡田浦に廻して嚴しく艤ひする定めなり

空海は古例に由り、宇佐八幡宮に參詣して、海路の平穩を祈禱すべく、自ら心經一百卷を寫して奉納したるが、田浦にての艤ひ、尙時日を要すべく見わたるに由りその間に杖を黒髮山に引き、白檀の薬師佛を彫刻して、船中に奉ずる事としぬ、こ

れも又渡海の安穩を祈る爲めとぞ聞こねし、白檀の薬師如來は、今京都仁和寺喜多院に在り、諸人の尊敬殊に深し

(三)

空海は彫み上げたる薬師の尊像を抱きて、黒髮山を下りたれど、舟艤ひはまだ調はざりき、さらばとて旅亭の一室に閉ぢ籠り、鏡に對ひて筆を執る、こゝまで見送れる堅惠は、側に在りて、忠實しく給仕しぬ

『冷々と風の身に滲むを覺わまする、我師は昨夜も寝ませられであつた』

『秋の旅は淋しいものぢや、汝故郷を思ひ出しはせぬか』

空海は世にも懐しみある柔き聲にて問ひぬ、梓張にせられたる絹には、等身の影像半成りて、宛らに生けるが如き面、宛らに珠の如く輝ける眼、朱を點じたる唇開きて、今にも聲を出すかと疑はれき

『折に觸れては思ひ出しも致しまする、故郷の山も川も、時には夢に見ることござります、なれど還りたいとは思ひませぬ、師の御側に付き添へば、御慈愛雨の如

く注ぎ掛らぬ日ござりませぬ、御聲も無く、御示も無き自然の御教誨、有難く受けぬ日はござりませぬ、これがもし御側を放れて、遠くに旅しある身とあらば、師の御許懐しく、一日の安堵も得られまじけれど、幸ひに御側を離れませぬ、萬里波濤の上、一片渡船の中、寝ても覺めても、御側に仕へまする、師の御心には……恐れながら師の御心には……両親の御慈愛も籠りまする、故郷の山水草木皆な籠り居りまする』

まことに堅恵が空海を慕ふことは、赤兒の慈母を慕ふが如く切なりき、あらず、堅恵のみにはあらず、空海の弟子となり、空海の門人となり、一たびその熱き同情の氣に打たれんもの、皆な一身を捧げて仕へぬ、皆な滿腔の誠意を披いて従ひぬ、空海が諸弟子を思ふ心と、諸弟子が空海を慕ふ心と、融通冥合離れても離れ難く調和するなり、肉と骨と搦みたるが如く同体になりて、血の通ふ如く靈魂通へるなり
空海は、堅恵の詞、意を得たるやうに頬笑みて、影像の左松山の上に、釋迦如來影現の像を描きぬ、今までに見も知らぬ書様なれば、堅恵は不審の眼を敬めて

『此の御影、普通の御作と覺なませぬ、温容生々大慈悲の御目眦を垂れさせられて、釋尊の御光をお頭の上より浴びさせられる、世にも導き御影こそ拜み奉れ何れかの御寺へ納めさせ給ふのでござりまするか』

「いね、宮寺へは納めぬ、遠く唐土へ舟出するなれば、航路の安否覺束無く、母上憂慮深くおはさん、さればこゝに等身の影像を描きて、告面の孝とはする、汝歸る時、讃岐の館へ托けたもらぬか」
空海は心を籠めて繪筆を揮ひながら、心の中を具に語る、堅恵は今に始めぬ我師の孝道深く且つ厚きを感じて、己れの行爲を顧みつゝ、不覺感涙に咽びたり

『此の御影、御母儀様御手に入る時、いかに御喜悅あらせられう、我師の圖りなく還らせたまふを見たまはんやうに、此のお口から御聲の聞こゆるやうに……此の御影の中にこそ師の御心は籠りて在せ、遠く海路に泛ばせられても、御心は御母儀様御側に残りて、朝夕御無事を祈らせられう、恐れながら堅恵の魂は萬里の波濤に添ひ参らする身は、此の御影を奉じ奉れど、魂は従ひて、諸共に唐土の天へ

お供申さう」

堅恵は斯く云ひて、影像の前に平伏しぬ

初秋の風は冷かに簾を吹けど、師弟の熱情一室に籠りて、暑影淡く簀子縁のあたりを射る

此の影像美はしく成りたる時、四艘の舟楫ひ漸く調ひて、出船を促す貝の音、澄み切りたる秋天に響き渡りぬ

出船は七月六日なりき、四艘の巨船、船楯相含みて纜を田浦に解きぬ

初秋の風帆に孕みて、浩蕩たる波の中を走れば、夕月影碎けて銀波翠嶂の上に漾

ひ、明星光り淡うして、白浪曉の雲を撲つ、舟進みて郷國の山遠く、帆翻りて故

山の草木次第に小さく、旅情切に人々の胸の鎖す、然も舟は離恨と別情とを載せて

渺茫たる大海原の中を走る、第一船より第四船まで、遠き時は火をもて合圖し、近

き時は舷に出て詞を交ゆ、板一重下は底のなき幾千尋の海なれど、板一重上は祇

園淨土に比ぶべき樂境、風穩かなれば笑ひ聲満ち、日長閑なれば郷談つき／＼に興

深く、夢の間に三日三夜を過ぎて、今は見ゆる限り際涯無き瑠璃一碧の中に在き
堅恵は岸邊に立ちて遠く師の船を見送りながら、彼の影像を抱きて泣きぬ

御 遺 告 其十

州司披き見て即ち此文を收て已了す、此の如くする事阿三度、然りと雖も船を封じ人を
追ふて瀟沙の上に居らしむ、此の時大使述べて云く、切懸の今也、抑も大徳は筆の主なり
書を呈せよと、妾に吾れ書機を作り、大使に替つて彼の州の長に呈す、披き覽て笑を含み
船を開き間を加ふ、即ち長安に奏するに、三十九箇日を経て、州府の力使四人を給ひ、且
つ資糧を給ふ、州の長好問し、借家十三烟を作つて住せしむ、五十八箇日を経て、存問の
勅使等を給ふ、彼の儀式極り問し.....

第十三章 海陸の難

(一)

海路や、半ならんとしたる時、西の空に一むら雲の分けて黒きが現はれしよと見る間も無く、一陣の風さつと吹くと共に、篠つく如き大雨驟々として降り来る、水夫揖取は、素破颯風よ、素破暴風よ、と叫び罵りつゝ、右往左往に駆け廻り轟き働けど効ぞなき、海氣は昏々として日を遮り、波浪は澎湃として舟は濛はす、濁れる瀟、山の如く高く狂つて、更に谷の如く低く落す時、江海流れを同うするかと怪まれ、蛟龍怒り捲いて、坤軸を揺かす時、水雲時に腥さを覺ゆ、斯くて波濤の間に濛ふこと一晝夜、天地暗ければ、舟と舟と影を認むること能はず、濤聲間なく猛り狂へば、人と人と詞を交へんやうもなし

やがて雨は帆を破り、風は舵を折れば、人々生きたる心地も無く、只管に風雨の鎮らんことを願ふ中も、舟屢次覆らんとして、魂も身に添はず、顔の色は蒼ざめ目の中は血走り、海に馴れたる船頭すら、忙然として爲す處を知らず、一圖に運を

天に任せて、波のまにまに深ふ外術無かりき

空海は天候甚く變りて、波濤高く、風雨又た激しかるべく見決めたる時より、これ人力の計るべき所にあらず、偏に冥護に因るにあらずば、素願の遂げ難きを感じて、猛雨降り頻り、暴風怒り狂ふ間、水晶の珠數爪繰りつゝ、舟の舷へ立ち出で、一百八十七所の天神地祇に祈願し、金剛般若經の眞文を寫し、誦讀開講して、神ごとに一部づゝを法施し奉るべき旨を誓ひ、一心不亂に禱りたれば、水月の感應忽ち現はれて、さしもの暴風見る／＼中に鎮まり、猛雨何日とも無く晴れて、今の今まで怒濤を捲きさらる海の上、さながらに鏡を開きたるが如く、碧波蕩漾たる中に、朝日美はしく照り輝きぬ

大使賀能を始め、逸勢も、その他の者も、初めて愁の眉を開きて、有難涙にくれながら東の方を伏拜みぬ

斯くて僅に覆没の難は免れたれど、第三第四の船行方知れずなりて、第二船大破せる骸を横へつゝ、遙の彼方に浮ぶが見ぬ、水夫は手を擧げ、舷を叩きて、聲を

限りに呼びたれど、波幾重、潮路遙に隔たりたれば、それに應ずる答へも無かりき

(二)

海上に漂ふこと三十四日、八月十日の朝早く、忽ち雲の峰青く、目睫の間に迫るを見て、人々蘇生の思ひをしぬ、中には欣悦極まりて、聲を放ち泣き出すもありき。これも偏に一百八十七所の天神地祇、空海師の誓願に感應ありて、利益の驗を垂れたまひしに因る、さて有難や、と思ふ間も無く、舟は辛うじて福州長谿縣赤岸鎮巴南の海口に着きたりき、元來日本より唐土へ渡るには海路三千里、而して蘇州揚州に至るを最も平易の行程としたれば、遣唐使の一行も、皆な航路を夫に取る決めなりしが、途中の風難は第一船を思はぬ方へ流して、海路險惡の聞ある福州衡州へ路を取るの止むを得ざるに至らしめたれば、航路に於て七百里、時日に於て五日程の損失となりたりき。

されど九死に一生を得て、恙がなく陸路へ着きたる幸は七百里の航行を徒にしたる損失を償ふに餘りあり、數日の延着何程の事かあらん、まづ土地の役人に、我

々來着の事を告げ知らさでは協ふまじとて、直に譯語を上陸させ、鎮將の杜寧と、縣令の胡延斫とに、事の次第を訴へさせぬ。

役人は斯くと聞きて、大使副使を迎へたるが、折柄當州の州長柳冕、病の爲め辭し還りて、後任の者未だ着かず、杜寧も、胡延斫も、長谿縣の政を管理するのみにて、日本の遣唐使を處分すべき職權なければ、風波大難の勞苦まだ癒わざるべきも、更に海路を衡州へ取りたまへ、彼の地には萬事を心得たる役人も在しませんが、とて体無く上陸を謝絶しぬ。

大使は謹みて、仰せ御有理とは聞けど、衡州へは陸路あらん、三十四日の海上、殊に風波に苦められて、船の破損云ふばかりも無し、願はくば陸路を取るを許させたまへ、海には心弱き者も、陸は足強く幾百里を踏む行くべきに、と據なげに頼み聞こねぬ。

然も彼等は承引の様無く、衡州と福州との間は險路絶峻至る處に連りて、他邦人の歩行容易なるまじければ、やはり海路を取らるゝ方安全ならん、この理由を以て

拒みたれば、今は詮ん術なく、再び舷を泛べて衡州へ廻航したりき

日本よりの使者は、從來蘇州もしくは揚州へ上陸する規定なりしを、假ひ風波の爲めとは云へ、古くより例無き衡州へ着きたるなれば、州の役人が疑惑の目を注ぎたるも無理ならじ、殊に舊刺史辭し去りて、新刺史未だ赴任なき折柄とて、上陸も許さず、款待もせず、兎もするに「國書を見ん」と通り「印契を出せよ」と催促すれど、國書印契は難船の混雑に海中へ取り落しやしけん、判官録事の手には保管やされけん、大使の手にも副使の手にもあらざりけり

由て事情を具して、勘辨を求めたれど、疑惑の上に疑惑を生める役人は「此の人の眞の遣唐使にてはあらじ、名も無き商人輩風浪の難に遭ひ、寄る邊無きまゝ、官名を詐り稱して、我々の憐みを受けんとぞするならん」と思ひ癖み、遂に船内を嚴封して、一行の出入をも許さざりき

人々天に嘆き、地に悲みたれど効ぞなき、海に泛びては、龍神の祟り甚しく、風雨黒く、海天腥く、今にも腹魚に葬られんとし、陸に着きては役人の疑念深く

誠意通せず、衣冠累を作りて、殆んど囚人同様の扱ひを受けんとす、抑も此れ何んの爲めぞ、天神の逆怒を蒙りしか、地祇の御罰を受けたるか、還らんとするに海路遠く隔り、往かんとするに關山途塞がりて、空しく海口の潮に浮ぶ、朝な夕な東の天を出でたまふ日輪の御光、昔ながらに紅く燃わて、一片の丹心を照らせど、身にかゝる雲の晴れる時なきを何とかせん

時には人々手に手を取りて、死ぬるも死なれぬ不運薄幸を恨つ程に、五十餘日を夢と過ぎて、今日は十月三日となりぬ、初冬の習ひとて、外國の海邊にも、時雨淋しく、目に見ゆる山々骨現はれて、北風蕭颯と空を吹く時、黄葉蛛蜘蛛の子の散るが如く散りて、滿天愁に鎖され盡す

『陸の上、騒々しう、人々の罵る聲聞こえまするで、そつと斥候の者使はしてござりまするに、新州長着到の模様ござりまする氣、早々御詮議なされては何うござりまする』

日ごと、旅情の切なるに堪はず、只管に故郷懐しく、頬の肉は落ち、鬢髪的光澤

は褪せて、現世の人とも思はれぬ姿したる船頭は、當日の午時過斯く云ひて、逸勢の前へ出でたり、切て新州長着任あらば、事情を訴へ、究を告げて、上陸の便宜を得んとのみ願へりし船中の人々は、思ひ掛けぬ報告を聞きて、躍り上る程に歡びつゝ

『さらば急げ、急ぎて模様を調べ來れ、果して夫に決まらば、手書を作りて新州長の手許へ參らすべきに』

賀能は力無く嘆れたる聲を振り絞りて、そこに居合せたる譯語の者に命じぬ、譯語は直ちに舟を出て、城内へ駈け行きぬ

『様子は何うあらう、新州長果して來着しつるか、夫とも何かの間違ひか、生死繋りて報告の如何にある、また歸らぬか、譯語はまだ歸り來ぬか』

船中は此沙汰にて持ち切りぬ、交るゝ舷へ出て、譯語の歸りを待つほどに、やゝ半响餘りを過ぎて、譯語は喘ぎゝ歸りぬ、滿面に笑を見せつゝ、活々したる氣分を目の中に深へつゝ

『お歎ひなされませ、新州長兼觀察使閻濟美殿來着、城内城外の者一同出迎に聲を限りに萬々歳を唱へ居ります、早やゝ御書を書かせられ、早速新州長お側近く捧げ參らするでござります』と身振まで交へて云ひぬ

(三)

あはれ、天は尙我等を見殺しになされざりき、此も偏へに諸天善神の御惠みぞ、賀能は東の方を伏拜みつゝ筆執りて、陳情の一書を認む、暗涙筆に従つて注ぎ、新愁字に伴つて催す、海上の困苦、着到後の艱難、具に陳べ、細かに記して、偏に大官の慇懃を待つ旨、丁寧懇懃を極めたり

即ち譯語は賀能の書を携へて、恭しく新州長に參らせたれど、唯一見したるのみにて、一言の返答も與へざりき

譯語は望みを失ひつゝ、船に還りて、その日の首尾を物語りつゝ

『事情まだ閻州長の心に徹らぬと見えます、今一書を書かせたまへ、一兩日を待ちて返事なくば、もう一度呈らせ見ます』と力を付ける如く云ひぬ

新州長よりは日を経ても沙汰無かりき、賀能は再び三たび書を認めて、切に事情を訴へたれど、遂に一言の答も無く、却て暴々しく武装せる役人出張して、理不盡にも船中の検分を行ひ、厳しく封を施したる後

『船中の住居相成らぬ、觀察使の命令ぢや、早や〜出でよ』と叫き散らしぬ

一行の中には、日本刀の切味優れたるを携へたるもあり、朝日に匂ふ山櫻の散り際好き命を持ちたるもありしが、賀能は重任を帯びてあり、空海は前途遠き道程を控へてあり、屍を異域の土に曝らして、耻を千里の外に貽すが、一向の忠義にもあらず、又たさし當る願ひにもあらず、忍び得るだけを忍ぶとも、刀には錆を見まじく、堪へ得らるゝだけを堪へることも、山櫻の色は變らじ

凌辱堪忍の外に出でなば、立ちどころに一刀を抜き放ちて、刃の續く限り切り災難みて命を捨てん、急ぐ處にてはあらし、まづ彼等の爲んやうを見よやとて、互に警め語り合ひつゝ、一行二十餘人、暴吏の云ふがまゝに逐はれて、岸邊の砂の上に出でぬ

折柄に時雨して、砂は一面に濡れそぼらぬ、入海續き沼となりし處には、枯芦高く亂れ立ちて、風漸瀝と吹き募る、一行は濡れたる袂を重く垂れて、汀近く蹲る、暴吏は快げに見下げつゝ、濕りたる砂の上を指して

『此處に居、此處に居、此處に居て寛大の御沙汰を待て』

彼等の口上は、譯語の通辯に由りて、明瞭に知る事を得るなりき

血氣の壯丁等は、州吏の苛酷なる扱ひを腹にすね難ね

『瘦せても枯れても、伊勢大神宮様の氏子、悪事をした覺わも無い、無禮した覺わも無い、これを囚人同様に待遇すこそ奇怪なれ、日本刀の前に何物あらう、城内へ踏み込んで、觀察使とか呼ぶ大將に物見せ呉れう』と腕を擦りて犇くも多かりき

賀能は夫等の壯丁を和め賺して

『まづ待て、一百八十七ヶ所の神々は、いつも我等の頭の上に宿らせたまふ、生きて皇國の耻となる時あらば、腰に佩したる一刀おのづからに脱けて、義理も法も辨へね唐土人の頭に落ちん、されど未だ其の事なきは、天神地祇我等の將來を守ら

せたまふ證據ぞ、兎まれば彼等の爲すがまゝに任せ置け」と説き聞かせぬ
されど壯丁は、堪へ遣らぬ恨みを抱いて、血走る眼に、州吏の暴虐を睨みてあ
りき

「斯うなり行くも、我等薄徳の致す所、誰をか恨み、何をか嘆かん、只悲しきは
我等の受けたる屈辱が、やがて直に皇國の恥となりて、東海の空高く聳立つ不二
のお山の一角に雲の掛る時ありはせぬかと思ふだけぢや、七月六日長閑に晴れた朝
空を戴いて、田浦の湊を舟出せしより、今日に至るまでの困苦、思ふても腸を断つ
心地とする、友船には別れ、同じ任務を仰せ付けられし友人には離れて、斯る惨虐
の境に立つ、あはれ空海殿、進退茲に谷まりて、生死の巷前に横はる、沙門は苦行
難行の人、且は文筆に譽れもある、我等の書きたる陳情の書は、再び三たび反古と
なりて、情知らぬ觀察使の靴の下に蹂躪らる、此度は我に代りて、沙門一書を認め
たまへ、一には皇國の光に微塵だも瑕を見せぬ爲め、一には一行二十餘人の命を濟
ひ得させんため、……平に頼み参らする」

賀能は空海に對ひて云ひぬ

「大使の御願、我等の意を得ておちやる、沙門の毫には、諸佛諸菩薩の靈威籠り
て、筆々に金石の響きあり、句々に錦綉の氣を包む、一字には一字の命、一條には
一條の靈あり、全偏の氣魄深く紙の背に徹りて、切に讀む者の心を動かす、我等
曾て御著作の三教指歸を見たる時、忽ちにその感起りき、一行の究を救ふ者、我等
が腰に佩びたる劍にはあらずして、沙門が手の頭に動き走る筆の力あらうと思ふ、
いで、墨擦りて参らせう、早や〜弘濟の筆を取らせたまへ」

逸勢も側より勸め告げぬ

空海は此の時まで寂然として動かざりき、濕りたる砂の上に坐りながら、玉の臺
に在るが如く温乎たりき、福州より衡州へ舟を廻す間、忍び難き冤凌をも受け、堪
ね難き疑惑をも被、或る時は飢餓虎の如く迫り、或る時は寒氣狼の如く襲ひ來り
しが、風露の下、夜月の前、只獨り舷頭に端座して、少しだも思ひ亂れたる体無か
りき

州吏來りて船を出し云へば、命のまに／＼出ること、宛ら家に歸るが如く、濕りたる砂に居れど云へば、云はるゝまゝ座に着くこと、常の梅に着くが如く、落葉露を帯んで頭を打てど黙として瞑想し、北斗影冷かに襟を照らせど、沈々と跪坐して睫毛だも戦かせざりき

然も、賀能の切なる願ひを聞き、逸勢の止み難き詞を聞くに及び、黒水晶の珠を見る如き清しき眼を開きて

「仰せ畏り奉る、大使の御心を籠めさせられたる御手書だも刺史の心を動かすに力なきを、況して愚僧の認めたる物など、何の甲斐だもあるまじけれど、一心に伊勢大神宮、八幡大菩薩、春日大明神を祈念し奉り、夫に諸佛諸菩薩の冥靈を胸の中に勸請し參らせ、神佛の御名を筆に籠めて、清き血を墨とし、生きたる皮膚を紙として、思ふ所、冀ふ所を記し、偏に州吏の疑ひを解き申さん、萬々一その爲めに疑ひ解けて、祇園淨土の中に入る歡びありども、さら／＼空海の徳にてはおはさじ、神佛の冥護、こゝに利益を顯したまふなれば、方々思ひ違ひあらせたまふ

な、いで、いで」と云ひながら筆を取りて、即座に陳情の一書を認め畢る

辭は例に由りて巧みに、文字は常に異らす豊潤なりき、即ち賀能等朝旨を奉じ、身を忘れて命を衒み、死を冒して海に入りしよりの困苦を述べ、古より大唐の日本を遇すること厚く、殊紙曲成して、待つに上客を以てし、面り龍頭に對して自ら鸞綸を解く習ひなるを説き、貴官は我々に國書無きを以て疑惑せらるれど、竹符銅契は本と奸詐に備ふ、世淳く人質なれば文契何んぞ用ひん、我國淳撲にして好隣を事とす、献する所の信物印章を用ひず、遣はす所の使人奸偽あることなし、加以、使者は必ず腹心を擇び、任すに腹心を以てす、何ぞ更に契を用ひん、と論じ、更に進みて、然るに今州使責むるに文書を以てし、彼の腹心を疑ひ、船上を檢括して公私を計へ敷ふ、官吏の道實に然るべし、されど建中以來の入朝の使船は、漂流の苦みなく、直ちに揚州蘇州に着くが故、州縣の諸司慰勞すること慇懃、左右使に任せ船の物を檢めず、今は則ち事昔と異り、一行の愚人竊かに恨みを抱く、伏して願はくば遠きを柔くるの恵みを垂れ、隣を好くするの義を顧みて、古き習俗を縦に

するの風を怪みたまふこと勿れ、と懇請す、これその文意の大体なり

空海の手になれる陳情書は、やがて州廳へさし出されぬ、もし此に由りても尙香ばしき沙汰なくば、止むを得ず最後の手段に出でんこの覺悟は、誰一人云ひ出さねど、皆の胸に思ひ決められぬ

斯くして一行は、夕暗深き濕沙の上に座り居たりき

三日の月は、利鎌を懸けて西の天に淡う照り、雲間を翔ける鴻雁は、誰が玉章を齎らしてや帛を裂く如く哀み鳴く、心無き水夫楫取は、身も心も置き所なく、起ちては見返り、見返りては座り、安き心も無く半夜を過したるが、空海の筆果して靈ありて、さしもの州吏をや動かしかん、程經て閩濟美より官吏をさし向けて、直ちに船の封を解き、大使等一行二十三人、船頭水夫の末に至るまで、速かに元船へ歸るべく命じたれば、人々始めて蘇生の思ひして、空海の恩を感謝せぬはなかりき、空海の恩を感謝して、文章の力の且つ大なるを思はぬはあらざりき

「願文の趣きは、即時長安の都へ奏聞したれば、やがて何分の沙汰あらん、それ

までは賤きを忍びたまへ、不足あらば成る限りの料品を參らせん、心置きなく申し出でらるべし』など、州吏は今までに例なき厚き詞を残しぬ、三日月の影落ちたる空に、再び月の光りを見たる心地なりき

(四)

賀能等の一行は斯くして復た船上の人となりぬ、舷頭露冷かにして、海波淋しく舟底を撲てば、舟中の夢安からねど、濕地の上に比べては、錦の褥に在るが如き心地なりき

『此も偏に空海様御蔭、まことに沙門の御筆には神佛の靈籠らせられて、鬼に等しき人の心も、佛にぞ爲させたまふ、我等の爲めには命の親ぞ、世に例も無き活佛ぞ、疎畧になせそ』と警め合ひて、尊敬前に幾倍しぬ

船上に時を待つこと三十九日、十月も盡きんとする時、都よりの沙汰として、州府の力使四人を下され、且つ食料その他日用の品々を置しからず給與されたれば、閩濟美もさながらに捨て置かん様はなく、懇に問ひ來る、一行はいよいよ暗黒に

光りを得て、天に歡び、地に喜び、出ては東の天を拜み、入りては胴の間に祀りたる伊勢大神宮を禮拜して、現當の利益を謝し奉り、末の安全を願ふこと切なりき。閻濟美は都よりの沙汰を奉じて、一行を陸上に迎わんとしたるが、思はしき家なかりしより、急ぎ十三軒の借家を作りて、大使并びに空海の一行を案内しぬ。

一行は七月六日田浦を出てより、舟上に住居すること六十餘日にして、僅に家居に膝を容るゝを得たり、長安までは遠けれど、光明已に路を照らす、以後はさのみ險阻も無からん、これ皆な空海殿文章の力なり、筆の端光り輝きて、我等の爲めに幾千里の道を照らせるなり。

嬉しきに付いては、空海の恩深きを思ひ、歡ばしきに付けては、空海の筆力貴きを思ひ、日として空海の徳を稱わぬはなき間、こゝに又十日餘りを経て、徳宗帝より存問の勅使を遣はさる、其の儀式の莊嚴なること、譬へんやうもなかりしかば、一行は皆な有難涙にくれて、夢か、現かを疑ひ思ふ者さへありき。

『お迎ひぢや、お迎ひぢや、今度はお迎ひの勅使が参られた』

譯語の者は飛び上るやうに呼びぬ、人々驚きて立ち出で見れば、霜月未の鈍き日旗さし物に照り添ひ、金銀七寶の鞍籠に輝きて、美々しき行列彼方より進み來る、州の役人は、やがて一行の住居へ出張りて

『迎客の御使ひ、只今到着あらせたまふ、一二日の中には長安の都へ御發足もあるべき筈、取敢へずお知らせ申す』と云ひ置きて歸りたり

一行は、身に掛る黒雲一重づゝ除かれて、心の光りつきくに現はれ來る如きを感じめ、上は大使より、下は雜人船頭に至るまで、發足の用意怠りなかりき

(五)

その翌日の朝、譯語は不思議なる噂を聞きて、空海の前に進み出ぬ、空海は默座して瞑想に耽り居たり、譯語は云ひ難さうにして

『沙門様、お氣をお注けなされませ、州の長は大使様ばかりを都に送りて、沙門様を此地に留め置くと云ふて居ります』と心注けぬ

流石の空海も此には驚きて

「思ひ掛けぬ、誰が申しつる」
徐に弾くが如く云ひぬ

「州の役人共、皆が申し居りまする、閻濟美は沙門様御文才最と惜しう、此方に留め置き、學問の友と致したき望みある氣に聞きまする、或は之れを口實に、沙門様を人質とし、都への忠義立に致すのかも分りませぬ」

「眞實でござらう喃」

「役人共頻つての噂、氣も無い事とは思はれませぬで、よく御詮議なされませ、長の間艱難を共にして、鮫や鯨の口の端も過ぎて参つた、山のやうな巨濤も、手を引き合ふて凌ぎ参つた、その中を沙門様お一人、残しては行かれませぬ、殊に此の度のお迎ひも、沙門様のお蔭でござります、我々が命全う、此方を發足致すのも皆な沙門様の御恩でござります、その沙門様を後に残して、我々ばかりが都へ入る之れでは義理が立ちませぬ、義理が立たぬと皆が云ふて居りまする、波一つ去つて復た來る、悲しいちやござりませぬか」

譯語は涙を流しながら云ひぬ、されど空海は暫時の間に取り鎮めて

「よくぞ知らせ給ひつる、われはわれの取る道あるで、後々には心残さず、御身達は御身達の前に開くる道筋を進み召せ、われは一身を御佛に捧げあるで、何事も御佛のお指圖に従ひ申す、只お身の眞心は忘れぬ、よくぞ知らせ給ひつる」

平生に變らず沈着きて且つ情ある詞なりき、譯語は尙繰り返しして、共に發足の便宜を受け得べく、謀計を廻らしたまへ、と云ひ置いて退きぬ、空海は人の情を滲々感じて、その後姿を沈と見詰ぬ

手に持つ珠数は憂々と鳴る、取り鎮めても取り鎮めても、不思議に心の騒立つを覺ゆるなりき、もし譯語の云ふが如く、州長われを止めて長安に送らさば、一生の望み泡と消れて、空しく白沙に骨を埋めん、われの不幸は前生の約束として諦めもすべけれど、海の如き朝廷の御恩報ゆるに時無きを何とかせん、山より高き御両親の御慈愛に背き奉るを奈んせん、われには佛典に現はれたる疑義を究めて、不二の法門を探るべき大願前に横はりてあり、この願望成就せすば、生きて故郷の人

人に合すべき面も無し、再び大海を渡るべき力も無し、われは學問の僧として來りしものを、留學すべく勅を受けて、遙々大使に同行せるものを

斯る片田舎に引き止められて、いつ學問の途に入るべき

いで、再び伊勢大神宮に祈願して、願文を州長の前に呈せん

空海は斯く覺悟して、まづ身を清め、心を淨め、而して東方を伏拜みて、一心に

伊勢大神宮を祈念しき

日は赫灼として天に輝き、照々たる光りを、清く遍く空海の頭に浴せぬ

(六)

空海の願文は例に由つて絢爛の文字を駢べぬ、華麗なる文字の中に、動かすべからざる日本魂見えて、氣根虹の如く首尾を申さぬ

願文の大意は、空海才能聞こえず、言行に取る處なけれど、留學生の末に鑑りて渡航す、年月に限りありて、學ぶべき學問多く、任重くして人弱ければ、夙夜一寸の間をも惜む、然も人の噂する所に由れば、大使に随つて京に入るを許されずと

承はる、これ實に忍ぶべからざるの痛苦、年我と與にせざれば、志望の遂げられぬ間、早く老を見るに至らん、伏して願はくは彼の弘道を願みて、京に入るを得せしめよ、と云ふにありき

閻濟美は、空海の願文を見て、志の切なるを思ひ、望の深きを察して、遂に大使と共に長安に入るを許しき

空海は云ふも更なり、一行の人々此の沙汰を聞きて雀躍しぬ

衡州より長安の都までは、山川雲遠く隔りて、道程實に七千五百二十里と聞こぬ、やがて出發の用意具に成りて、迎客の使者さきに立ち、大使賀能は七珍の鞍置きたる馬を賜はりて乗り、空海等又た馬を進めて、行裝美はしく十一月三日の朝打ち立ちて、險路難道さまんの苦行を嘗め、晝夜兼行長安の都に近き長樂の驛に着きしは、其年も暮れんとする十二月二十一日なりき

日本の遣唐使藤原賀能等、恙く洛外の驛舎に着きたるよし朝廷に聞こたれば、内使趙忠は二十三頭の細馬をもて來り迎へ、兼て佳き酒、佳き肴を出して長途の勞

を慰め、やがて先導して京に入り、威儀嚴かに宣揚坊の官宅に到着せりき
第三第四の船に乗りて、同時に田浦を發したる菅原清公等一行二十七人は、風雨
の爲めに第一第二の船と別れて、九月一日明州に着し、十一月十五日長安の京に着
き、官宅宣揚坊に宿して、賀能等の着到を待ち合せき、只最澄法師のみは、明州よ
り臺州に至り、州長陸淳の添書を得て、直に天台山修禪寺に上りたれば、長安の
京には入らざりき

賀能等の一行は、こゝに圖りなく清公等に會して『こりや世が隔つたのではない
か』と驚き喜びぬ

翌二十五日、國書及び齋せ來りたる國産の品々を、監使劉昂に托して、德宗帝に
獻らせき、劉昂は清公等が着すると共に、半ば饗應役の意味を兼ねて、宣揚坊に詰
め切り居れる唐朝の官人なりき

劉昂は件の品々を携へて、急ぎ參内したりしが、程も無く還り來りて、渥き勅
を傳へたり、そは卿等遠く來りて奉進する所の物、極めて是れ精好、朕殊に喜ぶ、

時寒し、卿等幸ひに心して滞在せよ、といふ有難き意味の勅詔なりき

賀能等は初めて眞に蘇生りたる心地して、こゝに漸く愁眉を開きつ、萬里異域の
京に旅して、年正に暮れんとする師走の風を傷みながら、その夜ばかりは夢安く枕
に就きぬ

二十五日は大使、副使、判官、録事、打伴れて宣化殿へ參上、恭々しく御禮申し
述べ、更に麟德殿へ參りて、德宗帝に拜謁し、數々の賜物と、優渥き饗應を受け
て、首尾残る方も無く官舎に還りぬ、夢愈よ安かりき

兎角する程に年暮れて、延暦二十四年の春を長安の京に迎ふ、實に唐朝の貞元二
十一年なりき

空海は朝風く起きて、宣揚坊の廣き庭に立ち出で、初鳥饒に鳴き過ぎ、若水汲
む臺所役人の笑ひ聲、まだ淡靄に包まれある時、遙に東の方を伏し拜みて、まづ主
上の萬歳を祈り奉り、引き續いて國家安穩天下泰平を念願し終る、此時初日影隨
々として、一天萬乘の大君恙く在し、師の僧正事無く在し、父上母様健かに在し

同胞親戚機嫌克く在るべき東方の碧空より昇り來る、金丸の端僅かに出で、光暉忽ち八宏に輝き渡る、此陽必ず神州第一の山の頂より現はれ給はん、而してまづ平安の新都を照らし、而してまづ伊勢の神垣を照らし、更に六十餘州の國々、隅々を照らして然る後、普く大三千界に照り敷かん、幾千萬里を隔つとも日は必ず東より出でたまふ、日の出ます處、萬世一系の大神は在し、我師、我父、我母は在します、唐土の京にありて、無事に初春の一日を迎うるも、皆な聖恩の餘光に因る、皆な師父の御蔭に基く、日の御光の曇らぬ間は、聖徳缺ぐる時無く、天恩遍からぬ機無し、願はくば空海をして、大願を成さしめたまへ、不二の法門に入らせたまへ、斯くして千尋の海の底に暗を照らす名珠を探り得ば、それに頼りて諸人を教化し、それに因りて衆生を濟度し、やがて國恩の萬々一を報ひ奉らん

一心に念じて立てば、淡紫に彩れる霞、霞々として身を包み、紅を含む朝の烟、縷々として裾に上る

空海は心神に玉を懐きたる如き清々しさを覺わたりき

(七)

賀能等の一行は、歸心箭の如く、一日も早く本國に歸りたく願ひたれど、徳宗皇帝正月二日の夜より御惱とありて、有司百官皆な憂色を面に見せぬ、初春の日は長閑なれど、宮城には雲かゝりて、今日も暗く、明日も暗く、有司は職務も手に付かず、政も緩み勝なれば、賀能等が歸國の願ひも、何れへ申し出る機無くて、一日二日と送るほごに、二十三日遂に崩御あらせたまふ、御年六十四とぞ聞こはし

續いて二十八日、順宗帝の即位あり、諒闇の京は梅の花に香り無く、柳の翠に色も褪せて、萬民悲嘆の涙にくれぬ、賀能等の歸朝はその爲めに又た後れて、二月十日長安を出發す、唐朝の役人は道中の便宜を計ること渥く、朝廷よりくさくの賜物なごあり、五十日近く馴染みたる阡陌の柳、庭の梅に別れを惜みて、朝廷より賜はりたる馬に乗る

空海と逸勢とは、留學の約束あれば、賀能等の出發に先ちて、官宅より西明寺といふ寺院に移り、長く永忠和尚の起居せし小坊に入り居たりき

永忠和尚は日本の大徳にて、京都の人、本性は秋篠氏なり、寶龜年間唐土に渡りて、佛法を究め、音律を調べ、空海が渡唐する數年前歸朝しぬ、されば西明寺方丈の隣に日本館ありて、永忠和尚の使用せし調度までその儘に爲り居たれば、人の香懐しく、故郷にでも歸りたる心地して、嬉しさ譬うるに物無かりき

されど城外の町盡處まで見送りて、賀能等の一行に手を別ちたる時は、さすがに離情胸を衝いて、暮の雲遠くに迷ひ、春の樹々露に濕りて、行列の影、茂り合ふ柳の葉に隠れ盡せしを見、何となく心細き思ひもしぬ

『さらば、道中に心を注げ、御機嫌克く歸らせられ、日本へお着あらせられるまで、日ごとに祈念を怠り申さぬ』

空海は繰り返しく云ふ、彼れ一句、此れ一句、流石に詞數は少けれど、意は長く遠くに續く、昨日生死を俱にせし人、今日雲山幾萬里を隔て、復の逢瀬付り難き別れを惜む、心の中如何なりけん

賀能等は三月二十九日、鞍馬恙く越州永寧驛に至り、五月初め明洲に着きたるが

副使石川道益は假苟の病ひ原となりて、あはれ明州の露と消ねぬ、人々悲み嘆きたれど効ぞなき

即ち懇に葬りて、追善追福殘る方も無く、標の物を建て置きて、同じ月十八日下鄧縣より船を出せしが、海上に障り無く、六月五日對馬國下縣郡阿禮村に到着せりき

御遺告 其十一

之を覽る主客、名々涙を流す、次で後、迎客使を給ふ、大使に給ふに七珍の鞍を以てし、次々の使等には皆粧れる鞍を給ふ、長安入京の儀式説き盡す可き無し、之を見る者選に滿てり、此の間大使賀能太夫途向に國に歸る、惟れ延明二十四年の電時なり、即ち大唐の貞元二十一年に配れり、爰に少僧并びに橋太夫勅に准じて留學す……

第十四章 密法の修行

(一)

長安の春色は次第に調ひて、西明寺の牌門に東風通ひ、堂塔の上に花の香吹き、浄池水暖かに、法苑翠深かりき

空海は日ごと講堂に入りて法を問ひ、佛に念じて行を修む、空海の耳根には、曾て伊勢大廟に詣でし時、夢幻の間に、青龍寺の惠果和尚と聞きたる聲、まだ歴々として残り居るが如く感じぬ、逸勢はその望み文學にあれば、道に於ては路傍の人なり、空海は講堂に法を聞く間隙、惠果和尚の消息を尋ねべく、洛中洛外の寺院を問ひ歩いて、大凡その人と爲りを知りぬ、長安に名僧多けれど、空海が師依として奉すべき大徳、果して惠果和尚の外なきを確かめぬ

惠果和尚は、長安青龍寺東塔院の住僧なり、大興善寺の大智識不空三藏付法の上足にて、真言の大祖大毘盧遮那如来七代の嫡嗣とぞ聞こねし、徳は彌山よりも高く道は碧空よりも廣くして、代宗、徳宗、順宗三代の歸依を受け、灌頂の師と仰がる

る、實に密教の長者、佛界の泰斗なり、空海は一日も早く膝下へ参りて、教化の徳に浴したく願へりき

然も、佛縁空しからず、西明寺の僧談勝法師は惠果和尚と懇意淺からざりき、空海は切に乞ふて、紹介の勞を取られたしと願ひぬ、談勝は空海の志、密教の研究に在るを知りたれば、快く承諾きて、同住の僧侶五六人と共に、空海を同道して青龍寺の大門を潜りたり

談勝はまづ入りて、和尚に事の由を告げ聞こねぬ、空海は入口に待ちてありしが談勝は程もなく出で來りて

「首尾好し、早や來ませ、大和尚待ち難ねて在します」と云ひぬ

空海は歡びて進み入る、一身寂として心忽ち道を成し、百花閑にして鳥自に啼く、一步寺門を入れるのみにて、早く龍宮に入りたる心地なりき、謹みて和尚の前へ前み出ぬ

白銀の針を植わたる如き眉は長く秀で、清しく潔き双の眼は、明星を駢べ懸けた

る如く焔々光る、身は枯木の如く瘦せられど、心は白蓮の香を包みて開きたるが如く匂やかに、まづ見る者を引き付けぬ、手にせる獨結は自らに光りを放ち、頸に懸けたる緋袈裟は自らに徳を示す、空海が跪いて禮拜するを、莞爾に見下しつゝ、
『さて久しかりつる、われ汝の來るを待ちてぞありし』と朗かに清き聲にて云ひぬ

空海は只畏りて、初對面の挨拶を述ぶること慙懃なりき、和尚は續きて

『然し、よくぞ來つる、因縁殊に深う覺ゆる、われの命早や迫りて、佛法の秘密を授くべき人無きを憾みありしに、汝の來れること太だ好し、速に胎藏金剛兩部の秘密法を授けん、早や／＼香華を辨へて、灌頂の壇に入れよ』と命じぬ

空海は和尚の此の詞を聞き、曾て感じたる夢想の不思議を思ふこと切なりき、久米寺の東塔下に、大毘盧遮那經を得てより、疑團いよ／＼深く、密雲立ち所に胸を鎖して、開くに由無く、解くに智惠無く、空しく大神宮の御前に煩悶せる時、夢幻とも辨へず、青龍寺惠果和尚の御名を聞きぬ、此度の入唐、偏に大毘盧遮那經

の疑義を明めて、眞言の奥を探り、菩薩等覺究竟して、妙覺を得んと願へるにありき、夢想必ず實現して、此の大願を成し就すべき師依の大徳に知遇せん機會あるを期待しき

然も、長安に入りて早く惠果大和尚の盛名を聞き、全唐に智識多けれど、われの師依と頼むべき人、此の外無しと決まりたるさへ、思へば不思議の驗なるに、大和尚初見參の席に於て「汝の來るを待つこと久し」と懐し氣に宣ひたるは、われ佛の御前に、惠果和尚の御名を夢想したるが如く、惠果大和尚も又た日本の學問僧空海の名を夢想したまへりしか、即自行圓滿して、千里の遠きをも目前に見たまふ大徳とて、われの今日御膝下に跪き拜するを、夙より知りて在せしか

何れにしても、佛緣彌海の深きよりも深し、雲山大濤幾千里を距て、住めど、諸佛諸菩薩の御前に捧げたる心は通ひて、互に相感し相應したるならん、殊に初對面の席、殊に初口上、まだ素性來歴をも申し上げぬ前より、速かに香華を辨へて、灌頂の壇に入れよと命じたまふ、身に餘る光榮、思ひ掛けぬ譽れ、これ然しながら大

日本一百八十七社の神々、空海の一身を擁護あらせたまふ故ならん、結縁極めて深し、日本にてはまた例無き灌頂の儀禮を得るは、世に例無き喜悅なり、榮譽なり

「命のまゝ従ひ奉る、只空海をして佛果を證するを得せしめたまへ」

空海は謹み云ふ、語は簡けれど、意味は極めて長かりき

空海は凡そ學問と名の付くほどの物、一として研鑽し、究極し在らざるはなかりき、されば最澄は譯語として、沙門義真を同伴したれど、空海は夙より音博士について、音學(今にて云ふ語學)を究め居たれば、譯語の要も無く、唐土人と談話するに差支ななき舌を持てりき、當時、日本と唐土とは交通極めて頻繁にして、彼の往來絶ゆる時なかりし爲め、朝廷特に音學の普及を計らせられ、天下に令して漢音を音ぶべき旨を仰せ出されたる程なれば、唐音研究の志望者多きは、今の英語の研究者多きが如くなりしならんと想はる

(二)

初見參の式は終りぬ、空海は諸種の教誨を得て、夕暮れ西明寺に歸りしより、胸

の雲早や晴れを放ちたるが如き心地しぬ、疑ひの暗の中に早く一點の光明を認め得たるが如く感じぬ

斯くて一月餘りが間は、入壇の用意怠り無く、一面密法修行に餘念無かりしが、六月十三日漸く供具を營み調へて、東塔院に馳せ參り、こゝに秘密壇上の人となりぬ、最初は、大悲胎藏大曼荼羅に臨めるなりき

阿闍梨はやがて空海に命じて、拋華の法を行はしめぬ、拋華の法は、白絹もて眼を覆ひて、胎藏曼荼羅の前に立ち、阿闍梨の授くる華を取り、虚心平氣に曼荼羅の上に抛つを云ふ、花は飛んで曼荼羅の何れかに中る、其中り點に依りて、行者の位を定むるなり、根氣清く御佛の御意に愜へる者と、根氣濁りて、御佛のお心に副はぬ者とは、抛ちたる花の飛ぶ地位に由りて明白せらる

されば拋華の法は、御佛に對ひて、行者の心の清濁を問ふなり、根氣の上下を試むるなり、自然の示現に由りて、現在未來の成就を檢するなり

故に拋華は、一面に於て心の試験なり、一面に於て器の試験なり、この自然の示

現に由りて、その人一生の運命畧定まるなり

空海は清き白絹もて眼を覆はれつゝ、曼荼羅の前に立てり、心に諸佛諸菩薩を念じつゝ、一心の眞を手にせる紅蓮の華に罩めて、卒然と抛ちぬ、蓮華はひらくと手を放れて、その淡紅き葩に、靈氣の宿るが如く翻りしと思ふ間も無く

「阿」と叫びたる大阿闍梨の聲したるが、續いて

「阿、阿、阿」と憫れたるやうに叫ぶ侍僧の聲彼方此方に聲こねたり

空海は流石に胸の轟くを禁じ得ざりき

「摩訶不思議、摩訶不思議」

大阿闍梨は斯く云ひつゝ、侍僧して空海の眼の覆ひを除かせぬ、空海は天の明けたる心地なりき、覆ひたる白絹を除かれたるだけなれど、胸の底の奥までが判明せし如く感じたりき

己の抛ちたる蓮華は、曼荼羅の下に落ちてありき、大阿闍梨は心快げに

「汝の抛げたる華は、ひらく翻りて、中臺に在す毘盧遮那如來の尊像に着き

けるぞ、まことに例なき吉祥、これ恐らくは凡徒に非ずして三地の菩薩なり、内に大乘心具うるものにあらずば、争か斯る奇瑞を得ん、不可思議、不可思議

幾度も讃嘆して、空海を最上の課位に置き、五部の法水をもて頂に灌ぎ、直ちに三密の加持を授けぬ

空海の修行授戒は總て順序よく運びたり、即ち胎藏の梵字儀軌を受け、諸佛の瑜伽觀智を學び、七月上旬進みて金剛界の大曼荼羅に臨みたり、再び五智の瓶水を浴び、恭々しく蓮華を抛ちたるに、此の時も又た翻りて、毘盧遮那如來の尊像に着きたるぞ不思議なりける

「阿、阿、阿」

侍僧は前の如く眼を睜りぬ、同時に

「不可思議、不可思議、摩訶不思議や、さて」

大阿闍梨は驚くと云ふよりも、寧ろ異しむ程の氣色なり、十人が十人、百人が百人、投げたる蓮華の尊像に着く者無きを、空海は二度抛ちて二たび中臺の尊像に着

きぬ、果して凡下ならざりき、果して三地の菩薩なりき、真言の密契を相續する者此の沙門の外あるまじとの覺悟、次第に深く刻まれ行きぬ
斯くして些の凝滯だも無く、形の如く心に入りて、金剛曼荼羅の灌頂を受けたりき、惠果和尚の歡び譬へんに物もなく、感嘆の餘、遍照金剛の法號を授け畢りぬ
次には更に修行して、最後の名譽たる傳法阿闍梨位の灌頂を受くべし、空海の徳は日ごとに向上し、日本僧空海の名は、廣き長安の京を歴して、僧と云はず、俗と云はず、小國の沙門、何として此の如き最上因縁を保ち居れるかと疑ひ異み驚かぬはあらざりき

(三)

『大阿闍梨へ申し上げたい事ござりまする』
惠果阿闍梨は、今しも一日の授戒終りて、方丈へ歸り來りぬ、香の烟鼻々揚りて、簾の間より初秋の風そよよ吹き、快きこと云ふばかりも無ければ、手に芭蕉葉の團扇を持ちたるまゝ、床置に掛りて冥想に耽ける時、縁の外より斯く呼びて、

床下に蹲れる僧ありき

『誰ぞ』

阿闍梨は眼を閉ぎたるまゝ問ひぬ

『これは内供奉十禪師順曉阿闍梨の弟子、玉堂寺の珍賀にておはす、畏れながら大阿闍梨に申し上げたき事ありて、態々御座を驚かし申す、一應の陳情を聞かせらるれば、此上もなき祝着とこそ存じ申せ』

順曉阿闍梨は惠果和尚の同門にて、大徳の聞こえ高き名僧なりき、玉堂寺珍賀の名は、阿闍梨も又た聞かざるにあらねば、徐に閉ぢたる眼を開きて

『云ひたい事は』

『別儀にても在りませぬ、仄に傳へ承はる處、日本の學問僧空海とやらん申す者に、三密の秘教を授けたまふとある、眞實ござりまするか、愚僧疑ひあつて、御尋ねに參り申した』

珍賀はおづ／＼とする中にも、語に力を罩めて云ひぬ

「眞實ぢや、今日し金剛界の曼荼羅に臨んであつた、將來は傳法阿闍梨位の灌頂を授けんとする心構ぢや」

「言語同斷、近頃不承服の御意を承はる、日本の座主、設ひ聖人に在すとも、門徒にてはおはさじ、他餘の諸教典を學ばせたまふは冤もあれ、三密の秘法を授けたまはんこと、諸佛の冥罰空恐しく存じ申す、急ぎ戒壇の諸儀式を中止し、空海を壇上より引きおろして、早く門外へ逐はせたまへ、珍賀斯様に申すこと、海外小國の沙門に後れて、修行授戒の時を得ぬを妬ましく嫉むにはあらず、偏に密法の將來を思ふが故おはす、詞に禮無きを咎め給はず、心に私無きを取らせたまへ」

珍賀は床下に平伏して、思ふことを思ふまゝに言上しぬ

惠果阿闍梨は、再び堅く眼を閉ぢて、心を松風の颯々たるに通はするのみ、珍賀の詞に耳を傾けんとする態無かりき、珍賀は恨めしげに視上げたるまゝ、一尺あまり身を進めて

「重ねて尊意を冒し奉る、申すもおろかや、大阿闍梨の御門人、幾千と限りなけれど、傳燈僅か六高僧に過ぎ給はぬ、殊に金剛胎藏兩界を傳へられしは、供奉の大徳義明阿闍梨只お一人のみ、訶陵の辨弘阿闍梨、新羅の惠日阿闍梨、共に一代の善智識と云ひ難せど、唯胎藏一界の師位を受けたるのみ、劍南の惟象阿闍梨、河北の義圓阿闍梨は、共に密門の先覺をもて稱へらるれど、只金剛一部を授かりしに過ぎず、然も空海は小國の沙門、門外の學僧なり、胎藏一界を授けらるゝさへ、教内の高弟にも例少きを、今や金剛界に臨ませ、更に傳法位の灌頂を授けたまはんとする事、つや／＼其意を得かね申す、世には學深うして志を得ず、行就りて壇に入り得ざる者、その數最も多しと云ふ、幾千の教徒に冷にして、一人の異國僧に温情を運びたまふ事、やがて國內に知れ渡らば、怨憎交々起り、毀譽忽ち湧いて、大徳を傷ぐる事無しとは限らじ、偏に明察を垂れたまへ、珍賀同門の弟子に代り、謹んで此の苦言を呈らする」

されど惠果は睫毛一筋だも動かさず默然たりき

珍賀はくどくと同じ意味を繰り返し云ひて、悄悄と立ち去りき、後は青苔露滑かに、一雙の白鶴蹠として出で遊ぶ

(四)

「恕させたまへ、宥させたまへ、過失にておはしましたし、今より心を改めて、再び生菩薩の行法は妨げまじ、あな苦しや、あな痛や、恕させたまへ、宥させたまへ」

松花露の如く落つる下に床置を置きて、珍賀はそこに轉寢してありき、明星は天に輝き、秋風は地を吹きて、晝間の熱氣漸く去る、彼僧はこゝに坐りて、空海の行法を妨ぐべく、一心に外道悪魔と呪ひて、道ならぬ祈念を凝らすほどに、眠ることもなく、うごくと轉寢する枕頭へ、佛人立ち所に現はれて「起きよ、悪僧起きよ」と絶叫しぬ

珍賀は驚きて我破と起きて、大地の上に両手を支きぬ、佛人は手にせる鋒の石突を珍賀の頸に當てながら

「おのれ、佛門にありながら、佛恩の深さを忘れて、佛法の弘通を妨げし不届きよ、思ひ知れ、思ひ知れ」

前に立つて罵り云ふ佛人の口には火焰見ゆき、然もその火焰鋭く立ちて、珍賀の胸の上に靡きぬ、後に立てるは阿修羅王の暴れたる如き相格したるが、太き剣を横へて

「その舌抜かう、大乘心の貴きを内に持てる學問僧を悪口して、授戒の障りを爲さうとした、その舌を抜き除らう、いで」

云ひながら側近く薄り来る、珍賀は怖しさに臆魂も身に副はず、額を大地に擦り付け、両手を頭の上に合せて「恕し召せ、宥し召せ」と生きたる心地も無く詫び入る

「さらば詫びせ、日本學問僧の前に跪座して、切に深く懺悔して來、もし懈怠あるに於ては、此の鋒汝の心を貫き、此の劍汝の骨を刻まう、什麼と……什麼と……」

恐しきは聲と與に、青く、白く、紅く、碧なる火焰を口より吐きて、紅き唇を大きく開き、今にも一呑に爲さんづ様もて、上より瞰下す刹那なりき、珍賀は身を縮め聲を慄はせ

「恕させたまへ、いかやうにも命に背きませぬ、一刻の遲滞なく日本僧の前に跪き、心から懺悔しまする、心から詫しまする」

眞を罩めて斯く云ひたる時、心から己の所業を惡しと感じて、清く純なる後悔の念を發せし時、さしにも恐しかりし佛人の姿は、掻き消す如く消え失せて、樹の間吹く夜の風、習々として滿地に布き、天空一碧拭ふが如く晴れて、白露星と共に下りぬ

珍賀は、慄として起き上りぬ、襟も、袂も、しごと露に濕りて、恐しきは骨の底に滲み渡りぬ、戦慄しながら前後を見廻して

「夢にてぞありし、あア、夢にてぞありし、されど彼のお聲、彼のお姿、今も歴々と耳に聞こえ、歴々と目に残れる、常事にてはあらず、必定常事にてはあらず」

立ちて胸を抑ゆれば、鼓動高く響きて、今にも心裂くる如く、そつと身の内を撫で試みれば、冷汗瀧の如く流れて、下着の襟絞るが如し

「日本の學僧、斯くまでに……嗚呼斯くまでに……」

夢と共に心も覺めて、茫然と佇む耳根に、異しく恐しき聲又た聞こえて

「早や行け、日本僧空海の前へ早や行け、躊躇は、降魔の劍、汝が頭へ向つて

飛ばん」

珍賀は逸散に、空海が行法の場と聞こえし戒壇側の一室へ駆け行きぬ、恭しく椽

下に跪きて

「恕させられ、愚僧の大罪を恕させたまへ」

血を吐く如き聲にて云ひぬ

空海は終夜端座して、心に諸佛を念じ居き、手にせる珠數の一顆々々が、憂々と

觸れ合ひて、その響き宛ら心に感ずるを覺わつら、一心に精誠の現はれんことを祈り居き

折柄縁下に、突然不思議の聲したれば、空海は徐に目を開きて

「誰ぞ」と問ふ、惠果和尚の灌頂を受けざりし前とは、自ら別人を見るが如き沈着と威權と具はりて、云ふ聲、腹の奥底より迸り出でるやうに覺ねぬ

「罪深き者ござり申す、佛人の勸めに由りて、御僧の前に罪を謝すべく駈け付けた者ござり申す、行法を妨げては濟みませぬ、なれど愚僧の爲め、暫時の時を貸させられ、そして心からする懺悔を享けさせられ」

珍賀は語尾も消ゆるやうに詫び入りて、そのまゝ地上に平伏しぬ

空海は寂然と座りたるまゝ、珍賀が心から云ふ懺悔の詞を聞き居たり

これ真に一小事なりき、空海が修業の廣さに比べては、水の上を撫で、渡る微風にだも及ばぬ些事なりき、されど、空海が高き戒壇に一足を掛ける時、他の一片を取りて引きおろさんとしたる邪魔ありしを知らざるべからず

珍賀は佛人の爲めに降服されて、中途に正しき道へ出でぬ、されど嚴密なる意味より云へば、空海の高徳、自に邪魔を拂ひたるなり、形容は人にして、心は三知

菩薩なる事實目前に現はれて、行法の妨げする惡鬼邪魔を拂ひたるなり

(五)

空海は日ごとに潔齋し、又た日ごとに修行して、只管に傳法阿闍梨位の灌頂に就くべき用意を懈らざりしが、八月初旬吉祥日ありて、やがて夫と定まりたれば、空海は惠果和尚に伴はれて、静々戒壇の下に進みぬ、供花烟るが如く薫じ、燈明不夜城の如く燃わて、音樂の響き劉曉と響き渡る、まことに現世からの極樂淨土と見え、五智の瓶水一滴ごとに菩薩と現じて、空海の頭上に灌る、時、衆聖嘉會の秘篋を叩いて、妙雲塔を開くの歡びに唱和するが如く、阿字素月に現はれ、光相清

く翻りて、空海の口中におさまりぬ

空海はこゝに於て、金剛頂瑜伽の五部の眞言密契を相續し、漢梵差無く悉く心に受け、思ふまゝ不二の法門に入るを得たり、金剛界大悲胎藏兩部の大教は諸佛の秘藏にして、即身成佛の路なり、これより以後、南天の法水遠く流れて、陽谷の草木を潤し、月都の光り遙かに傳はりて、日本の霧を晴らすべき兆と見わき、空海

の満足如何なりけん

大法傳授悉く終りて、空海の袈裟の上に、美しき御光映すが如く見ゆき

此日五百の僧をして齋を用意せしめ、四衆に供養させたるに、青龍寺の僧侶は云ふまで無し、不空三藏の開きたる大興善寺の供奉大徳等まで綺羅星の如く筵に臨みて、悉く隨喜したりき

眞言密教は、金剛薩埵、毘盧遮那の前に於て、親く瑜伽の五部、蘇悉の軌範を受けたるに始まり、轉相傳授して、廣智三藏、金剛智の法化を得て、瑜伽の中邊を探りたるが、尙心に疑義を抱くが故、再び南海を互り、遙に西天に遊びて、未だ聞かざるを尋ね、更に解せざるを習ひ、目前龍智の室に入りて、重ねて總枝の美を盡しぬ、その精誠の奥儀、偏に惠果和尙に相承せらる

惠果の徒弟六千人と註されたれど、金胎兩界に互りて秘法を授けられたるは、唐僧にて義明供奉、日本に於て空海のみ、然も義明は兩界を受けて、瀉瓶を云はず、又た付法の人ならねば、眞言密教の正統としては、空海一人なり、されば自ら遺

告の中に記して「夫れ師資相傳へ、嫡々繼ぎ來る者、大祖大毘盧舍那佛は金剛薩埵に授け、金剛薩埵は龍猛菩薩に傳へ、龍猛菩薩より下つて、大唐玄宗、肅宗、代宗三朝の灌頂の國師、特進試鴻臚卿大興善寺三藏沙門大廣智不空阿闍梨に至るまで六葉、惠果は即ちその上足の法化なれば、凡そ付法を勤ふるに、吾身に至つて八代相傳なり」と云へり、豈に貴からずや、豈に正しからずや

惠果は更に空海に告げて、眞言秘藏の經疏は隱密なり、圖書を借るにあらずば、眞を傳うるに難からん、われ汝の爲めに丹青に命じ、寫經生を雇ひ、兼て供奉鑄の道具を新造し得させん、と云ひぬ

空海は只管に有難き旨を返答するのみ

即ち惠果は、供奉の畫工李眞以下十餘人を喚びて、胎藏金剛界の大曼荼羅及び傳法阿闍梨の影像等十鋪を彩り畫かせ、寫經生二十餘人を集めて、一百餘部の經論を寫させ、更に供奉鑄物の博士楊忠信超吳等を召して、鈴杵輪楸の道具十五具を造らせぬ、その鍊冶する所、各々法に由り、種々の寶物を合成しぬ、併びに皆な如來の

智印、法門の表像なりき
此の畫圖、經文、道具の成就して、空海恭々しく受授頂戴せし時、福利幸運極まりなきを感じぬ

御遺告 其十二

即ち少僧上都長安青龍寺の大徳内供奉十禪師惠果大阿闍梨に遇ひ五智の灌頂に沐して御願に法を修め、雨を祈るに靈驗其れ明かなり、上は殿上より下は四元に至る、并びに諸の新譯の經論唐梵合存せり、少僧大同二年を以て我が本國に歸る、此間海中の人々の云く、日本天皇崩す云々、聞いて是の言を諷め、本口の言を尋ねるに、船内の諸人首尾を論じ争ふ事都て一定せず、着岸に注鑿して、或る人の言に告げらく、天皇某の日時に崩じたまへけと、少僧悲みて素服を給る、爾りしより以降、帝四朝を経て國家の爲めに壇を建て法を修し奉る、こゝ五十一箇度、亦神泉園の池邊にて、胎藏金剛阿闍梨の秘法を學び、及び毘盧遮那金剛頂經等二百餘卷を讀じ……

第十五章 法の燈

空海は斯の如くして惠果和尚の傳授を受けぬ、是然しながら空海誠精の氣、自ら和尚の胸臆に感應せしなり、空海拔群の器量、おのづから和尚の鑑識に適ひたるなり、大毘盧遮那佛の靈徳、空海の頭に宿りて、自然に和尚の因縁を結び付けたるなり

爰に於いて、空海の心契は皓々たる月と化りて、惠果和尚が胸に貯へたる法の泉に映り、秘密の經藏見る／＼間に開けて、彼我一點の靈犀、忽ち融合調和せるなり生れたる土地は三千里を隔て、雲山遠くその間を鎖せど、高く天空を逍遙する彼の靈氣は、咫尺の隔もなく近きて、肉身にも及び難き親みを結べるなり、血の通ひはなけれど靈の通ひはあり、骨肉の關係よりも濃き心は、相互の間に融通して、父子の縁にも見られまじき美しく貴き縁は結ばれぬ
空海はこの有難き師を戴きて、一心に經藏を研究しき、長安第一の名刹と呼ばれ